

もしも炭治郎の下に義勇と実弥が来ていたら

レイファルクス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『もし義勇の他に実弥が来ていたら?』

思いつきで書いた小説です。

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
333	313	295	279	259	246	229	214	201	184	168	153	141	129	117	101	89	77	64	53	37	24	13	1

第1話

時は大正、季節は冬、場所は雲取山^{くもとりやま}。

そこに住む竈門炭治郎^{かまどたんじろう}は妹の禰豆子^{ねずこ}を背負って下山している真っ只中だった。

ことの始まりは前日、炭治郎は麓の村まで炭を売りに山を降り、その帰りの中、途中の家に住んでいる三郎^{さぶろう}と言う老人に止められ、彼の家で一泊した。

そして早朝、三郎の家を出た炭治郎は急いで家まで戻ると、そこには末っ子の六太^{ろくた}を抱き抱えた禰豆子が血まみれで家の外におり、中は母の葵枝^{きえ}と次男の竹雄^{たけお}、次女の花子^{はなこ}、三男の茂^{しげる}が同じく血まみれで死んでいた。

炭治郎は禰豆子の体に触ると、まだ温もりがあり、生きていることが分かると、禰豆子を背負い、医者に見せるために下山を開始した。

…

…

…

その頃、雲取山に鬼が出没すると言う情報を得た富岡義勇^{とみおかぎゆう}と不死川実弥^{しなずがわさねみ}は山の中腹辺りにいた。

「おい、本当にこの山に鬼が出るんだろうなア？」

「その真偽を確かめる為に来たんだ。その為に実弥に同行をお願いしたんだ」

二人は周囲を警戒しながら歩を進めていると、一軒の家を見つけた。

「丁度良かった。あの家で話を聞いてみよう」

二人は歩く速度を速めて家に近づく。すると血の匂いが風に乗って二人の鼻腔を擽る。

二人は『もしや』と思い、駆け出す。そして二人が目にした光景は惜しくも炭治郎が見た光景と同じだった。

…

…

…

「酷^{ひで}エな、こりゃ」

実弥は死体を見て眩いていた。

「実弥、こっちに来てくれ！」

義勇が実弥を呼び、実弥は義勇の下まで来る。

「“これ”を見てくれ」

実弥は義勇が指を指す箇所を見ると、そこには足跡があった。

「足跡…か。大きさから見て大人じゃねエ、子供の物モノだなあ」

実弥は足跡の大きさからその主を推測する。足跡は家から離れて行く感じで付けられていた。

「俺はこの足跡を追う。実弥は家族を吊ってくれないか？」

「しゃくねえなア。一つ貸しだかな？」

「感謝する」

義勇は足跡の主を追いかけ、実弥は竈門一家を吊うために穴を掘り始めた。

…

……

……

「こんなもんかア」

実弥は家族全員が入る程の大きさと深さがある穴を掘り終え、一息ついていた。そこに

『生殺せいざつ与奪よだつの権を他人に握らせるな!!』

義勇の叫び声が響いた。

「今の声…、義勇か。アイツがあんな大声で叫ぶなんて、只事じゃねえ

な。…仕方ねえ、ちよつくら行ってみつか」

実弥は義勇が向かった方向へ駆け出した。

…

…

…

実弥が穴を掘っている頃、義勇は足跡の主に追い付いていた。しかし、その光景に我が目を疑った。

その光景とは、『女の鬼』が少年を襲っている所だった。

義勇は少年、炭治郎を助けるために抜刀し、女の鬼、禰豆子に向かって刀を振るった。

しかしその刀は空を切った。何故なら、『炭治郎が禰豆子を庇った』からだった。

「なぜ庇う？」

「妹だ、俺の、妹なんだ」

炭治郎は未だに暴れる禰豆子を抑えながら義勇に説明をする。

「それが妹…か？」

義勇は再び炭治郎に近づく。炭治郎は禰豆子を庇おうとする。しかしその場に女の鬼は“いなかった”。何故なら『義勇が禰豆子を捕

まえていた』からだった。

「動くな。俺の仕事は鬼を斬ることだ。勿論お前の妹の頸もはねる」

「待ってくれ、禰豆子は誰も殺してはいない！俺の家にはもう一つ嗅いだことの無い誰かの匂いがした。みんなを殺し…たのは多分そいつだ！」

「禰豆子は違う、どうして今そうなったかわからないけど、でも」

「お前は知らないようだから言っておく。”人喰い鬼”には”始祖”と呼ばれる存在がいて、そいつの血を体内に注ぎ込まれるとお前の妹のようになる。そうして人喰い鬼は増える」

「禰豆子は人を喰ったりしない！」

「今のお前の言葉に説得力は無いぞ。思い出してみろ、お前の妹は何故お前を襲っていた？それはお前を餌としか見ていなかったからだ」

義勇は次々に炭治郎の言葉を論破する。

「違う!!俺のことはちゃんとわかっているはずだ！俺が誰も傷つけさせない！きつと禰豆子を人間に戻す、絶対に治します！」

「治らない。鬼になってしまったら、人間に戻ることは無い」

「探す!!必ず方法を見つけるから殺さないでくれ！家族を殺した奴も見つけ出すから！俺がちゃんとするから！だから、だから…」

義勇は炭治郎の言葉を無視して禰豆子に刀を突き刺そうとする。

「やめてくれ!!やめてください……。どうか妹を殺さないでください……。お願いします……。お願いします……」

炭治郎はその場で土下座をして禰豆子を助けるようお願いをする。

「生殺与奪の権を他人に握らせるな!!」

しかし義勇は炭治郎の姿を見て激怒した。

「惨めったらしく踞るのはやめろ!そんなことが通用するならお前の家族は殺されてない!」

「奪うか奪われるかの時に主導権を握れない弱者が、妹を治す? 仇を見つける? 笑止千万!!」

「弱者には何の権利も選択肢も無い! 悉く強者に振じ伏せられるのみ!」

「妹を治す方法は鬼なら知っているかもしれない、だが、鬼共がお前の意志や願いを尊重してくれると思うなよ!」

「当然俺もお前を尊重しない、それが現実だ!なぜさつきお前は妹に覆い被さった? あんなことで妹を守ったつもりか!?!」

そして義勇は炭治郎に刀の切っ先を向けて

「なぜ斧を振らなかつた?なぜ俺に背中を見せた!!そのしくじりで妹を取られている!お前ごと妹を串刺しにしてもよかつたんだぞ!!」

その刀を禰豆子に刺した。その行動に怒った炭治郎は雪の下にあった石を義勇に投げる。

義勇はその石を刀の柄を使って弾く。

炭治郎は木々の間を走り、更に石を投げ、斧を持って義勇に襲い掛かる。

義勇は石を避け、向かって来る炭治郎を刀の柄を当てて気絶させた。その時、義勇は炭治郎が斧を”持っていない”ことに気づいた。

義勇へ斧が何処にあるのか探ると

「義勇、上だ！」

実弥の声が聞こえ、上を向くと、斧が回転しながら自分の方へ落ちてくる所だった。

義勇は首を傾げ、斧が頭に刺さるのを防いだ。

炭治郎は木々の陰に入った時、斧を上へ振り投げ、あたかも斧を持って見せるように見せていたのだった。

義勇が呆気にとられているのを好機と思ったのか、はたまた、義勇の拘束が緩んでしまったのか、禰豆子が暴れ出し、義勇から離れ炭治郎の下へと向かった。

義勇と実弥は『炭治郎少年が喰われる』。そう思った。だが、二人のその予想は思わぬ方向で裏切られた。

何と禰豆子は『炭治郎を庇い、義勇に威嚇』していたのだ。

義勇はこの兄妹に”何か”を見出だしたのか、刀を納刀し、自分に

向かって来る禰豆子に手刀を首筋に当て、気絶させた。

「義勇、大丈夫かア？」

「実弥、俺は大丈夫だ。それとさつきは斧の位置を教えてください助かった」

実弥は義勇に駆け寄り、無事を確認する。義勇は実弥の質問に答え、助けてくれたことに礼を言った。

「気にすんなア。……それより、コイツらどうすんだア？」

実弥は義勇が気絶させた二人を一瞥する。

「実弥も見ていたと思うが、妹は兄を喰うどころか守ろうとした。もしかしたら、今までの鬼とは”何かが違う”のかもしれない。俺はそれに賭けてみようと思う」

義勇は炭治郎と禰豆子に感じたものを実弥に伝えた。

「コイツらが俺たちに”新しい風を吹かす”ってか？お前も物好きだねエ。なら、俺も賭けてみるか。義勇が感じた”何か”ってやつに」

「……感謝する」

義勇と実弥は互いの顔を見て笑っていた。

…

…

……

義勇に気絶させられた炭治郎は母の葵枝の言葉で目が覚める。すると、目の前に竹でできた口枷を啜えさせられた禰豆子が横で寝ていた。しかも、体を冷やさないように羽織を着せられていた。

「起きたか」

義勇の声でしたのでびっくりした炭治郎は禰豆子を守るために抱き締める。そして視界の先に入ったのは、かまくらの中で餅を火鉢で焼いている義勇がいた。

「狭霧山（さぎりやま）と言う山の麓に住んでいる鱗滝左近次（うろこだきざこんじ）と言う老人を訪ねるんだ。俺の名、富岡義勇の名を言えばわかってくれる」

「それと妹を絶対に陽光の下に出すなよ？ 鬼は陽光を浴びれば灰になって崩壊する。妹を助けたければ、陽の当たる所へ連れ出すな」

義勇は再び火鉢で餅を焼き始めた。しかもよく見ると、餅の他にもおにぎりが焼かれていた。

「あの…、その火鉢は…？」

疑問に思った炭治郎は恐る恐る義勇に質問をする。

「この火鉢はこの先にある家から失敬してきた物だ。今俺の”親友”が家の者たちを丁重に吊っている所だ」

「……………（この人、何勝手に俺の家の物を使っているんだ!?!）」

義勇は炭治郎の質問に答えるが、炭治郎は勝手に家の物を使われて

いることに困惑していた。

…

…

…

「よオ、待ってたぜエ」

炭治郎は気絶から覚醒した禰豆子を連れて家に戻ると、そこに実弥が縁側に座って待っていた。

「俺は不死川実弥、 富岡義勇の親友だ」

実弥は炭治郎が質問をする前に自己紹介をした。

「ではあなたが俺たちの家族を弔ってくれたんですね、ありがとうございます
ございます」

炭治郎は実弥に頭を下げる。

「気にすんなア。あのままじゃ寒くて可哀想だったからなア。家族の墓はそっちに作った。家を出る前に手でも合わせていきなア」

実弥は墓がある方を指で差し、立ち上がる。

「おっと、忘れる所だったぜエ。おい坊主、”これ”を持っていきなア」

実弥は懐から脇差し（極道やチンピラ等が持つドスのこと）を差し

出した。

「俺や義勇が持っている刀と同じ”素材”で造られた脇差しだ。ソイツで鬼の頸を斬れば倒せるぜエ。まア、”お守り”代わりとして持つときなア」

実弥は炭治郎に脇差しを手渡すと、ヒラヒラ手を振って去って行った。

炭治郎は実弥から受け取った脇差しを見て懐にしまい、実弥が去った方を向いて頭を下げた。その後、家から必要な物だけを持ち出し、墓の前で手を合わせ、禰豆子を連れて家を去った。

…

…

…

「待たせたなア」

炭治郎の家から去った実弥は義勇がいるかまくらの中に入った。

「そんなに待っていないから安心してくれ。それに丁度餅とおにぎりが焼き上がった所だ」

実弥が義勇の手元を見ると、丁度焼き上がった餅とおにぎりがあった。

二人はかまくらの中で餅とおにぎりを頬張り、食べ終わった後、後片付けをし、かまくらを崩して下山した。

因みに火鉢は雪で冷やした後、実弥が元あった場所に戻っていた。

第2話

炭治郎は禰豆子を運ぶ為の籠を手に入れようと近くの男性に籠と藁、竹を売ってくれと頼む。男性は『金はいらんから好きに持って行きな』と言った。しかし炭治郎は頑なに金を払うと言って男性の手に小銭を叩きつけた。

その後、炭治郎は籠と藁と竹を持って禰豆子に隠れてもらった横穴に到着し、禰豆子の名を呼びながら中を覗く。しかし禰豆子はそこにはいなかった。

それもそのはず、禰豆子は横穴の地面を掘ってその穴に入って隠れていたからだだった。

炭治郎に呼ばれた禰豆子は自分が掘った穴から顔を少しだけ出した。

「(禰豆子が土竜もぐらみたいになってしまった…)」

炭治郎はそう思いながら、せっせと竹を裂き、藁を編んで籠を補強した。

そしていざ禰豆子を籠に入れようとするが、禰豆子の大きさは籠よりも大きく、頭から入っても、腰までしか入らなかった。そこで炭治郎は自分が禰豆子に襲われていた時、禰豆子の体が”大きくなった”ことを思いだし、禰豆子に小さくなるように言う。

すると禰豆子の体が小さくなり、籠にすっぽり入る大きさとなった。炭治郎は小さくなった禰豆子の頭を優しく撫で、禰豆子は満更でも無い様子で喜んでいた。

その後、炭治郎は義勇に言われた狭霧山へと向かった。途中、道行く人に狭霧山への道を聞いたりして、最後の難関である山へと到着した。

道を尋ねた人の証言では、『夜な夜な人が行方不明になっている』と言っていたが、狭霧山に向かうにはこの山を越えなくてはならなかった。炭治郎はその人に礼をして山へと入って行った。

…

…

…

山を登っている途中で夜になり、炭治郎は禰豆子を籠から出し、手を繋いで歩いていると、古ぼけたお堂を見つけた。しかも明かりが漏れていることから人がいると推測された。

だが、お堂から血の匂いを嗅ぎ取った炭治郎は誰かが怪我をしているかもしれないと思い、立て付けが悪い障子を開ける。

するとそこには、人喰い鬼が人間を喰っている真っ最中だった。

鬼は禰豆子の気配を感じ、禰豆子では無く、炭治郎に襲い掛かる。炭治郎は持っていた斧で鬼の頸を狙って振り上げる。

軌道は見事鬼の頸を捉えたが、通常の斧では鬼を殺せる筈も無く、直ぐに傷口が塞がってしまった。

鬼は炭治郎を殺そうと押し倒し、首を掴んだ手に力を込める。する

と禰豆子が鬼の頸を”蹴り飛ばした”。更に炭治郎めがけて鬼の体が動くが、それも禰豆子が蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた鬼は体を操り、禰豆子を襲う。そして鬼の頸も手を生やし炭治郎に襲い掛かる。しかし炭治郎は鬼の頸に頭突きを二回も喰らわせ、脳震盪を起こさせ、近くの木に斧で固定させた。

炭治郎は鬼の頸を固定させた後、禰豆子を助けるために鬼の体に体当たりをする。しかし、その下は運悪く崖となっており、このままでは鬼の体諸共崖下に落ちて死んでしまう。そう思った。

だが炭治郎は禰豆子に助けられ、難を逃れた。そして鬼の体は崖下へと落ち、潰れてしまった。

…

…

…

炭治郎は持っていた小刀で鬼に止めを刺そうとする。しかしそれを止める人がいた。

炭治郎は肩を掴まれ、振り向く。そこには『天狗の面を着けた老人』がいた。

そう、この『天狗面の老人』こそ義勇が紹介した『鱗滝左近次』だったのだ。

炭治郎は左近次に『どうやしたら止めを刺せるか?』と聞くが、左近次は『自分で考えろ』と突っぱねる。

そして炭治郎は小刀をしまい、実弥から受け取った脇差で止めを刺そうとする。だが、いざ止めを刺そうとすると、思いやりが強すぎて中々決行できないでいた。

それを左近次は“嗅覚”で悟った。

炭治郎がもたもたしていると、夜明けとなり、陽光が鬼を照らす。すると鬼から火が出て、そのまま灰と化した。

炭治郎はその光景を見た瞬間、禰豆子が陽光を嫌がる理由が分かったのだった。因みに禰豆子は夜明けが来る前に、お堂の中にある籠の中に避難し、布を被って陽光を凌いでいた。

左近次は炭治郎に自己紹介をし、『もし妹が人を喰ったら時、お前は どうする?』と言う質問をする。炭治郎は意味が分からず呆けていると、左近次は炭治郎の頬を平手打ちした。

左近次の先程の質問は“炭治郎の覚悟”を知る為であった。

左近次は炭治郎に質問をした“意味”を述べ、尚妹を連れて行くか問う。炭治郎は左近次の質問の意味を理解し、力強く返事をする。

そして左近次は『妹を背負ってついて来い』と言って走り出した。炭治郎は急いで禰豆子が入っている籠を背負い、左近次の後を追った。

しかし左近次は老人とは思えぬ速さで走っており、炭治郎は見失わないように追いかけるので精一杯だった。

やっこの思いで狭霧山にたどり着いた炭治郎は既に息が絶え絶え

になっていた。そして左近次は炭治郎に彌豆子を家に置かせ、炭治郎と一緒に山を登る。

そしてある程度登った所で左近次は炭治郎の方を振り向き、『ここから山の麓の家まで下りてくること。今度は夜明けまで待たない』と言つて霧の中へと消えた。

炭治郎は左近次以上に嗅覚が鋭いので、下山するのは楽だと思つていた。しかし、一步足を踏み出すと足下の縄に引つ掛かり、横から石が飛んで来た。

更には手を着こうとした所が落とし穴になつており、炭治郎はそのまま真つ逆さまに落ちてしまった。

炭治郎は至るところに罨が仕掛けられていることに気づく。しかし落とし穴から這い出た途端に罨の仕掛けの紐を手で踏んでしまい、丸太が背後から襲つて来た。

その他にも炭治郎が住んでいた雲取山よりも空気が薄く、息苦しきから思考力が落ちていた。

しかし炭治郎は呼吸を整え、嗅覚で罨の位置を知った。人の手で仕掛けられた罨は微かにその人の匂いが残っているため、炭治郎は罨の位置を知ることができた。

だが、罨の位置を知つても、その全てを回避できる筈も無く。幾度か罨を受けた炭治郎は夜明けギリギリで左近次の家に到着し、左近次に剣士として見込みがあることを認められた。

：

……

……

それから、炭治郎は左近次の”地獄の修行”を受けることになった。

炭治郎は毎日、山を下りる修行をしている。途中、罨が至るところに存在しているが、炭治郎はそれを回避する。しかし全てを回避できる訳でも無く、日に日に罨の精巧さが高くなり、罨に嵌まることもしばしばあった。しかも罨の中には、炭治郎を殺さんがための”刃物付き”まであった。

それから数日後、炭治郎は今度は刀を持って下山をする。しかし、手ぶらと刀を持った状態では勝手が違うらしく、悉く罨に嵌まってしまった。

更には下山したら刀を持つての素振りを言い渡されていた。しかも『刀を折ったらお前の骨を折る』とまで言われていた。

その他に『受け身』、『呼吸法』、『型』などを教えられた。

…

……

……

炭治郎が左近次の下で修行を始めてから一年、左近次は『もう教えることは無い』と言って炭治郎をとある場所へと連れて行く。そこには”しめ縄をされた炭治郎と同じ位の高さの岩”があった。

左近次は『この岩を刀で斬れたら、”最終選別”^{さいしゅうせんべつ}に行くのを許可する』と言つてその場を去つた。

炭治郎はそれから毎日、基礎的な修行を繰り返した。しかし、それでも岩を斬れる予感はしなかった。

…

…

…

「よオ、久しぶりだな」

それから数日後、左近次（正確には炭治郎）の下に実弥が訪れた。

「不死川さん！お久しぶりです！」

「お主が義勇が言つていた不死川実弥か」

炭治郎は実弥に挨拶をし、左近次は実弥を義勇から聞いていたのか、実弥を見ていた。

「お初にお目に掛かります鱗滝左近次殿。私は鬼殺隊”風柱”・不死川実弥と申します。以後お見知りおきを」

実弥は左近次に挨拶をした。

「良い。よくこんな辺鄙^{へんぴ}な所へ来た。中へ入れ、茶を出そう」

「お土産におはぎをお持ちしましたので、よかったら」

実弥は持っていた風呂敷を掲げた。

「頂こう。炭治郎、休憩だ。客人をもてなせ」

「はいー!」

炭治郎は束の間の休息をすることになった。

…

…

…

「ほう、岩を刀で…ねエ」

炭治郎は実弥にアドバイスを貰おうとして修行の内容を実弥に話した。

「はい。でも、幾ら修行しても岩を斬る感じがなくて…」

炭治郎は話している途中で落ち込んでしまった。

「そりや当然だア。何たって『全集中の呼吸』を使っていないんだからなア」

実弥は炭治郎が出来ない理由を看破した。

「『全集中の呼吸』…ですか？」

聞き慣れない単語に炭治郎は首を傾げる。

『全集中の呼吸』ってのは、俺たち鬼殺隊”全員”が使える呼吸法のことだよ。それをするのとしなのとは、力の差がはつきり出る。全集中の呼吸を使えば、岩なんか簡単に斬れるもんだア」

炭治郎は修行の中で左近次から呼吸法と型について教わったことを思い出していた。

「今お前が教わっているのは”水の呼吸”ってやつだよ。コイツは柔軟な動きが特徴でな、今ある呼吸では最多の型が存在する」

実弥は義勇から教わったことを炭治郎に伝える。

「お前には水の呼吸の他にも俺が使う”風の呼吸”も会得して貰う。言っとくが拒否権は無いぜエ」

炭治郎は更なる地獄を見ることが確定した。

…

…

…

実弥が炭治郎の下を訪れてから早一年。炭治郎は岩を斬る修行の中で錆兎さびとと言う少年と真菰まこもと言う少女に出会い、二人（殆んどが真菰）から色々と教わった。

そして半年後、いつも木刀で勝負を仕掛けていた錆兎が、この日は

真剣、つまり刀を持っていた。

そして炭治郎と錆兎の二人は互いに刀を振り下ろす。勝敗は炭治郎の方が速く、錆兎の面を”斬っていた”。

炭治郎が呆けていると、錆兎と真菰はその場におらず、その代わりに、刀で斬られた岩がそこに鎮座していた。

炭治郎は錆兎の面を斬ったと思っていたが、実際は錆兎では無く、岩を斬っていたのだ。

…

……

……

炭治郎は早速左近次に岩を斬ったことを伝え、左近次と共にその場に赴く。そして斬られた岩を見た左近次は

「お前を最終選別に行かせるつもりは無かった。もう子供が死ぬのを見たく無かった。お前にあの岩は斬れないと思っていたのに……」

相当驚いていた。そして

「よく頑張った。炭治郎、お前は凄い子だ……」

炭治郎の頭を優しく撫でていた。炭治郎は左近次の優しさに嬉しくなり、左近次に抱きついて泣いた。

「最終選別、生きて帰れ。儂も妹も、此処で待っている」

その後、炭治郎たちは下山し、炭治郎は髪を切り揃え、左近次は炭治郎に『厄除やくじよの面』と言う狐の面を彫った。その模様は炭治郎に似せてか、額の傷の所と同じ所に太陽が施されていた。

禰豆子は狭霧山に到着してからこの二年間、眠ったままだったので、最終選別には同行できず、左近次が預かる形となった。

そして炭治郎は左近次と同じ服を着て

「鱗滝さん行つてきますー！錆兎と真菰によろしく！」

最終選別が行われる藤襲山ふしかさねやまへと向かった。

左近次は出立する炭治郎を見送りながら

「炭治郎…、なぜお前が”死んだあの子たち”の名を知っている」

と呟いていた。

第3話

ふじかさねやま
藤襲山

そこは山の麓から中腹に掛けて『藤の花』が一年中狂い咲いている不思議な山。

しかも人喰い鬼はこの藤の花の匂いを嫌うため、この山は鬼にとっての『天然の牢獄』でもあった。

左近次と同じ服を着た炭治郎は咲く季節でも無いのに咲いている藤の花に見とれていた。

そして階段を上り中腹にある広場に到着すると、自分と同じ最終選別に参加する少年少女が多数いた。

「お時間となりました。皆様、今宵は最終選別にお集まり頂き、ありがとうございます。この藤襲山には鬼殺の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込められており、外に出ることはできません」

「山の麓から中腹に掛けて鬼共が嫌う藤の花が一年中、狂い咲いているからでございます」

その時、鳥居の前にいた少女二人が最終選別について説明を開始した。

「しかしここから先には藤の花は咲いておりませんから、鬼共がおります。この中で七日間生き抜く」

「それが最終選別の合格条件でございます。では行ってらっしゃいま

せ」

説明を終えた二人は頭を下げる。それを合図に炭治郎を含む参加者は次々に鳥居を潜り、山へと入って行った。

：

……

……

最終選別が始まって数分後、炭治郎は早速二体の鬼に出会した。鬼は炭治郎を喰おうと襲い掛かる。

『全集中 水の呼吸 肆ノ型 打ち潮』

しかし炭治郎は左近次から受け取った『日輪刀』にちりんとうを使い、鬼の頸を斬った。

頸を斬られた鬼は着ていた衣服だけを残し、崩壊した。

「(この刀で頸を斬られると、骨も残らないのか……。不死川さんが言っていた通りだな。成仏して下さい……)」

炭治郎は鬼が残した衣服に向かって祈りを捧げる。

すると炭治郎の鼻が何か腐ったような匂いを嗅ぎ取った。その直後、参加者の一人が炭治郎の側を横切った。

「うわアアア！何で大型の異形がいるんだよ!?聞いてないぞこんなの！」

そして走り去る参加者を追うように、『全身に腕が生えた大型の鬼』が姿を現した。

異形の鬼（以降”手鬼”と表記）は腕を幾つもくっ付け、参加者めがけて伸ばす。そして手鬼が伸ばした腕が逃げる参加者の足を掴む。

『全集中 水の呼吸 式^にノ型 水車』

しかし炭治郎が自分の体を縦に回転させて斬る水車を使い、手鬼の腕を斬った。

腕を斬られた手鬼は炭治郎を一瞥すると

「また来たな、俺の可愛い狐が」

と嬉しそうに言った。

「狐小僧、今は”明治”何年だ？」

手鬼は炭治郎に今の年を聞く。

「(明治?) ……今は”大正”時代だ」

炭治郎は律儀に手鬼の質問に答える。すると

「アアアアア、年号がア！年号が変わっているウ！」

急に叫び出した。

「まただ！また！俺がこんな所に閉じ込められている間に！アアアアア

ア、許さん！許さんんん！！鱗滝め、鱗滝め、鱗滝め、鱗滝め！！」

「どうして鱗滝さんを……」

『知っているのか？』と炭治郎は質問をしようとした。

「知ってるさア！俺を捕まえたのは鱗滝だからなア！忘れもしない四十七年前、アイツがまだ鬼狩りをしていた頃だ！江戸時代：慶応けいおうの頃だった」

何とこの手鬼は江戸時代に左近次に捕まり、この藤襲山に投獄されたのだった。

「嘘だ！そんなに長く生きてる鬼はここにはいないはずだ！ここには人間を二〜三人喰った鬼しか入れてないんだ！選別で斬られるのと、鬼は共喰いするからそれで……」

しかし助けた参加者はそれは嘘だと言い張る。

「でも俺はずつと生き残っている。この藤の花の牢獄で、五十人は喰ったなあガキ共を」

「十二…、十三…、お前で十四だ」

不意に手鬼は何かを数え始めた。

「!?、何の話しだ？」

「俺が喰った鱗滝の弟子の数だよ。アイツの弟子はみんな殺してやるって決めてるんだ」

手鬼はクスクスと笑いながら数えていた理由を述べた。

「そうだなア、特に印象に残っているのは二人だな、あの二人」

「宍色しじの髪をして口に傷がある珍しい毛色のガキだったな。一番強かった。もう一人は花柄の着物で女のガキだった。小さいし力も無かったが、すばしっこかった」

手鬼が言った特徴に炭治郎は心当たりがあつた。そう、自分の修行に付き合ってくれた錆兎と真菰だった。炭治郎は二人が既に死んでいることに驚きを隠せなかつた。

「目印なんだよ、その狐の面がな。鱗滝りんたきが彫つた面の木目を俺は覚えてる。アイツがつけてた天狗の面と同じ彫り方」

「“厄除の面”と言つたか？それをつけてるせいでみんな喰われた。みんな俺の腹の中だ。鱗滝りんたきが殺したようなもんだ」

「これを言った時、女のガキは泣いて怒つてたなア。その後すぐ動きがガタガタになつたからな。手足を引き千切つてそれから「もういい」…んあ？」

手鬼は笑いながら語っていると、炭治郎がその話しを遮つた。

「もういいと言つたんだ。お前だけは許さない。今日ここでお前を倒す」

だんだんは怒りを剥き出しにして手鬼に向かう。手鬼も炭治郎を捕まえようと腕を伸ばす。しかし炭治郎は向かってくる腕を悉く斬り伏せる。炭治郎が刀を振ろうとした時、手鬼の拳が炭治郎に直撃し、木にぶつかつて気を失う。それと同時に炭治郎の面が粉々に割れ

てしまった。

気を失った炭治郎は弟の声で目が覚め、手鬼の攻撃を避けた。その後も炭治郎は手鬼の腕を斬る。その時地中から”変な匂い”を嗅ぎ取り、高く跳躍する。すると炭治郎がいた地面から手鬼の腕が出てきたのだった。

手鬼は奥の手を読まれたことに驚くが、空中にいれば避けられない
と思ひ、炭治郎に向けて腕を伸ばす。

『全集中 風の呼吸 伍ノ型 木枯らし風』

だが炭治郎は実弥から教わった風の呼吸を使い、その腕を斬った。

『全集中 水の呼吸 壺ノ型 水面斬り』

そして炭治郎は手鬼の頸を斬ることに成功した。

…

…

…

頸を斬られた手鬼の頸は地面を転がり、炭治郎を見上げる形で止まった。そして手鬼が見た炭治郎の表情は”嘲笑う顔”では無く、どこか”悲しい顔”だった。

炭治郎は手鬼から悲しい匂いを感じ取り、手鬼の手を握り

「神様、どうかこの人が今度生まれてくる時は、鬼になんてなりません

ように」

そう祈った。

手鬼は炭治郎の慈悲深さを目に焼き付けながら、この世を去った。

それから七日後の早朝、残った者が中腹にある広場へと集まった。炭治郎は落胆していた。それもそのはず、合格者は自分を含めて「四人」しかいなかったからだ。

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございませ。ご無事で何よりです」

最初に七日前に最終選別について説明をした少女二人が合格者を労った。

「まずは隊服を支給させていただきます。体の寸法を計り、その後は階級を刻ませていただきます」

「階級は十段階きのえ きのと ひのえ ひのと つちのえ つちのと かのえ かのと みずのえございます。甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸みずのと。今現在皆様は一番下の癸みずのとでございます」

「刀に關しましては本日中に玉鋼たまはがねを選んでいただき、刀が出来上がるまで十日から十五日となります」

「さらに今からは鎧かすがいががらすつけさせていただきます」

少女がまず説明をし、もう一人が手を叩くと、空から鴉が現れ、合格者の肩や腕に乗った。その中には、一人だけ鴉では無く、雀だった。

すると合格者の一人の少年が鴉を払い退け、少女の一人を殴り、髪を鷲掴みにした。

「どうでもいいんだよ鴉なんて！刀だよ刀！今すぐ刀を寄越せ！鬼殺隊の刀！色変わりの刀”を！」

すると炭治郎がその少年の腕を掴んだ。

「その子から手を放せ！放さないなら折る！」

炭治郎は有言実行と言わんばかりに手に力を込める。すると”誰か”が少年の頭を鷲掴みにした。

「選ベエ、今すぐその手を放すか、俺に殺されるか」

「不死川さん（あ…、兄貴）！」

そう、少年の頭を鷲掴みにしたのは不死川実弥だった。少年は実弥に驚いて掴んでいた手を放す。そして炭治郎と実弥は少年から手を放した。

「かなた様、この度は俺の”弟”が失礼をしまして誠に申し訳ありませんでした。この場をもつてお詫び申し上げます」

実弥は少女”かなた”に向かって深々と頭を下げた。

「風柱様、頭をお上げ下さい。私なら大丈夫です」

「あ…、兄貴！そんな奴に頭を下げなくても…」

「^{げんや}玄弥ア、お前はちよつと黙つてろやア」

実弥は玄弥と呼んだ少年を血走った目で睨み、殺気を放つ。玄弥は殺気に飲まれて動きを止める。

「不死川さん、お久しぶりです！」

しかし炭治郎は空気を讀まず、実弥に声をかける。

「んア？おう炭治郎じゃねえか！久しぶりだな！前会った時より遅くなってるじゃねえか！よく頑張ったなア」

炭治郎に声をかけられた実弥は炭治郎の方を向くと、今までの殺気が嘘のように成りを潜め、笑顔で炭治郎の頭を撫でながら会話をする。

「はい！鱗滝さんから教わった水の呼吸と不死川さんから教わった風の呼吸を使って何とか生き残りました！」

炭治郎もまた、実弥に頭を撫でられながら笑顔で会話をする。その様子を見ていた他の合格者たちは呆気に取られていた。

「風柱様、お話し中の所申し訳ありません。皆様に玉鋼を選んでいただけかないと」

そこに少女の一人が実弥に声をかける。

「輝利哉様、申し訳ございませんでした。よしお前ら！そこにある玉鋼を選びなア！選んだ玉鋼で担当の者が刀を打ってくれる！説明にあつた通り、十日から十五日の間に刀が届くからそれまで大人しく待ってるやア！」

実弥は玉鋼が置かれている棚を指差し、合格者たちはそれぞれ玉鋼を選び、解散となった。

…

…

…

ここはとある屋敷。その一室にいる男性が鴉からの報告を受けていた。

「そうか。五人も生き残ったのかい。優秀だね。また私の子供たち剣士が増えた……。どんな剣士になるのかな」

男性はどこか嬉しそうな声を出していた。

…

…

…

「玄弥ア、お前と炭治郎はちよつと残れやア。輝利哉様、かなた様。申し訳ありませんが、少しの間、お側を離れます」

実弥は輝利哉とかなたに断りを入れて炭治郎と玄弥を連れてその場を離れた。

「ど…、どうしたんだよ兄貴！」

「不死川さん？」

玄弥と炭治郎を連れ実弥はある程度離れると、いきなり玄弥の顔を殴った。

玄弥は何故殴られたのか分からず呆気に取られていた。

「玄弥ア、お前が狼藉をしたお方は俺たちを率いるお方の御子女様だア。狼藉も大概にしねえとなア」

”自分たちを率いる人の娘”。それを聞いた玄弥は顔を青くした。

「あの時は俺が頭を下げたが、今度は庇ったりなんかしねえからなア？」

実弥の言葉に玄弥は何度も頷いた。

「あの…、不死川さん。彼の名前を何度も言っていました。彼は不死川さんの弟なんですか？」

話しが終わったタイミングを見計らった炭治郎は、気になっていたことを実弥に聞く。

「ああそうだ、紹介するぜエ。俺の”生き残った”弟の不死川玄弥だア」

「……不死川玄弥」

「玄弥、コイツは竈門炭治郎。コイツも俺たち同様、鬼に家族を奪われた奴だア」

「俺は竈門炭治郎！玄弥、よろしく！」

炭治郎は玄弥に握手をしようと手を差し出す。しかし玄弥は握手をしようとはしなかった。

ハアツ「玄弥、お前何で鬼殺隊に入隊したんだア？」

実弥はため息を一つすると、玄弥に入隊理由を聞いた。

「決まってる！兄貴と一緒にいたいからだ！」

玄弥の入隊理由は『実弥と一緒にいたいから』だった。

「俺は本音を言えば、お前に鬼殺隊このな世界に入ってほしく無かったんだア。お前は何処かで所帯を作り、幸せに暮らして欲しかった。それだけなんだア」

「兄貴…」

実弥は自分の願いを玄弥に伝える。玄弥はそれを聞いて泣きそうになっていた。

「こんな何時死ぬか分からねエ所にお前を巻き込みたく無かった。でも、優しいお前なら、俺の後を追いかけることくらい、分かってたはずなんだかなア」

「不死川さん、きつと玄弥は不死川さんの力になりたくて入隊したんですよ。でなきや、ここまで来る訳無いじゃないですか」

炭治郎は玄弥の思いを汲み取ったのか、それを実弥に伝える。

「……ありがとうなア、炭治郎。玄弥、お前の今いる世界ははつきり言つてドス黒いモンばかりだ。それでも、進むか？今なら引き返すことも可能だ」

実弥は炭治郎にお礼を言つて、玄弥に覚悟があるのか訪ねる。

「俺は……、兄貴……いや、”兄ちゃん”と一緒にいたい！一緒にいるためだったらどんなことでもやってみせる！」

玄弥は自分の覚悟を実弥に伝える。

「……分かった。もう俺は何も言わねエ。玄弥、死ぬ気で頑張りなア」

実弥は玄弥の覚悟を聞き、頭を撫でてその場を去った。玄弥はポカンとしていたが、最後に実弥に向かって頭を下げて、階段を降りた。その顔は、さつきまでの切羽詰まった表情では無く、イキイキとした笑顔だった。

炭治郎もまた、玄弥の笑顔が移ったのか、笑顔で藤襲山を後にした。

第4話

ガキンツ

『那田蜘蛛山』で『十二鬼月』の一体、『下弦の伍・累』を倒した義勇は炭治郎たちに振るわれた刀を自分の刀で弾いた。

「あら？どうして邪魔をするんです？富岡さん」

炭治郎たちに向けて刀を振るった人物は体を独楽のように回転させてから止まった。

『鬼とは仲良くなれない』って自分が言ってた癖に何なんでしょうか。そんなだから嫌われるんですよ？私以外」

その人物は銚(漁師が使う槍のような物)に似た刀を義勇に向ける。

「さあ富岡さん、退いて下さいね」

しかし義勇は視線を下に向けて震えていた。

「やはり…、俺は…、嫌われて…、いたのか…」

義勇は『嫌われている』と言うフレーズで心が傷付いてしまったのだ。

「ああ富岡さん、勘違いしないで下さいね？私は貴方のことが好きですよ？もちろん”異性”として…ね」

その人物は刀を下ろし、義勇に弁解する。

「なら」しのぶ、俺のことが好きなら俺の話聞いて欲しい」

義勇は雲取山で起きたことをしのぶと呼ばれた人物に話した。

…

…

…

「成る程…。『人を喰わない鬼』…ですか。ですが、それを立証する物はありませんか？」

しのぶに言われ、義勇は禰豆子が人を喰わない立証を探るが

「…：…すまない、立証できる物が何一つ無い。強いて言えば、俺と実弥が見た”禰豆子の行動”。…それだけだ」

立証できる物が何一つ無いことを言った。

「…：…そうですか。ですがそれでは、立証の説得力が欠けますし、何より”他の皆さん”が納得されませんか？」

しのぶは最もな理由を簡潔に述べた。

「それは分かっている。それに関しては時間を掛けて納得してもらうしか方法は無い。だが、しのぶ。お前だけは信じて欲しい。この通りだ」

義勇は刀を納刀すると、しのぶに向かって土下座をした。義勇のそ

の行動にしのぶは愚か、炭治郎までもが驚いていた。

「あ…、頭を上げてください！これではまるで、私が悪者みたいじゃないですか!?!」

「俺の”弟子”を守るためなら、幾らでも頭を下げる！だから、理不尽とは思うが、俺の、炭治郎のことを信じて欲しい！」

義勇は尚も土下座を続けていた。

「……師範?」

そこに髪をサイドポニーテールにして蝶の髪飾りで結った少女の鬼殺隊員が現れた。

「あらカナヲ。そっちは終わったの?」

「もう終わりました。それで次の指示を仰ごうとしたら…」

「今の場面に出会した…と言う訳ね」

しのぶはカナヲと呼ばれた隊員と話していると

「おい義勇、お前は一体何をしているんだア?」

実弥が姿を現した。

「実弥！来てくれたのか!?!」

義勇は頭を上げ、実弥に話しかける。

「今しがた到着したばかりだ。それで、一体全体、何が起きたんだ？」

「実は……」

実弥の質問に義勇が答える。

…

…

……

「……そう言うことか？」

実弥は義勇の説明に納得がいった。

「なア」しのぶ、ここは俺と義勇を信じてはくれないか？」

何と実弥もしのぶの説得に入ったのだった。

「不死川さんまでも…。鬼殺隊の中で一番鬼を嫌っている貴方が何故…？」

しのぶは実弥が義勇に肩入れする理由が分からなかった。

「義勇はこの兄妹に”何か”を感じた。それは俺たち鬼殺隊に”新しい風”を吹かすかもしれない。だから殺さなかった。それに俺も”あの場面”を見なかったら、禰豆子を否定する側にいたかもしれないねエ」

実弥は義勇に肩入れする理由を言った。そしてしのぶは手を自分の顎に当て、暫し考える。

するとしのぶは刀を納刀した。

「分かりました。貴方たちがそこまで言うなら、私はその子を殺しません。ですが、もしその子が貴方たちの期待を裏切れば、私は問答無用でその子を殺します」

しのぶは考え着いた結論を義勇たちに伝える。

「……しのぶ、感謝する」

立ち上がった義勇はしのぶにお礼を言う。

「伝令！伝令！竈門炭治郎、禰豆子両名ヲ拘束！本部へ連れ帰ルベシ！炭治郎及ビ鬼ノ禰豆子、拘束シ本部へ連れ帰レ！」

「額二傷ガアル隊士炭治郎！竹ヲ噛ンダ鬼禰豆子！」

そこに鴉が伝令を伝えに飛んでいた。

「……どうやら、会議に掛けるみてエだな」

「そのようだな。炭治郎、すまないがお前たちを鬼殺隊の本部に連行する。悪いようにはさせないから安心してくれ」

実弥は炭治郎たちを本部に連れ帰る理由を察し、義勇はそのことを炭治郎に伝える。炭治郎は頷き、禰豆子を箱に入れ背負おうとした。

「炭治郎、無理するな。お前は十二鬼月との戦闘で弱っている。実弥、

すまないが彌豆子が入った箱を背負ってくれないか？俺は炭治郎を運ぶ」

「言われなくてもそうするつもりだったぜエ」

実弥は炭治郎から箱を受け取り、背負う。そして義勇は炭治郎をおんぶし、那田蜘蛛山を後にした。

…

……

……

「炭治郎…、炭治郎、炭治郎！」

義勇におんぶされた炭治郎は戦鬪の疲れからか、いつの間にか眠ってしまっていた。そして義勇に揺さぶられ、目を覚ますと、しのぶ、義勇を含む七名が炭治郎を見下ろしていた。

「やっと起きたか…」

義勇は疲れ果てた感じで炭治郎から離れた。

「あの、富岡さん…。ここは…」

「ここは鬼殺隊の本部です。あなたは今から裁判を受けるのですよ、竈門炭治郎君」

炭治郎の疑問に義勇では無く、しのぶが答えた。

「裁判の必要など無いだろう！鬼を庇うなど明らかな隊律違反！我らのみで対処可能！鬼諸とも斬首する！」

最初に炭治郎に対して異を唱えたのは『炎柱・煉獄杏寿郎』だった。

「ならば俺が頸を派手に斬ってやろう。誰よりも派手な血飛沫を見せてやるぜ。もう派手派手だ」

杏寿郎に賛同したのは『派手』を口癖にしている『音柱・宇随天元』だった。

「えええ…、こんな可愛い子を殺してしまうなんて、胸が痛むわ、苦しいわ」

二人の話を聞いていた『恋柱・甘露寺蜜璃』は炭治郎を可哀想と思っていた。

「ああ…、なんとというみすばらしい子供だ、可哀想に。生まれてきたこと事態が可哀想だ」

『岩柱・悲鳴嶼行冥』は涙を流しながら炭治郎の存在そのものを否定していた。

「(何だっけあの雲の形、何て言うんだっけ)」

そんな騒動とは裏腹に、『霞柱・時透無一郎』は空を流れる雲を見ている。

「そんなことより富岡はどうするのかね」

不意に声がして、炭治郎と義勇は声がした方、松の木の枝に寝転がっている人物を見た。

「拘束もしていない様に俺は頭痛がしてくるんだが？胡蝶こちようめの話によると、隊律違反は富岡も同じだろう？どう処分する？どう責任を取らせる？どんな目にあわせてやろうか」ネチネチ

『蛇柱へびばしら・伊黒小芭内いぐろおばない』がネチネチ言いながら二人を指差していた。その様子を見ていた蜜璃は何故か胸がキュンキュンしていた。

「まあいいじゃないですか。処罰は後で考えましょう」

『蟲柱むしばしら・胡蝶しのぶ』が処罰は後にすると言った。

「水柱様、ご要望の物をお持ちしました」

するとそこに黒子のような格好をした人が水が入った桶と空の湯飲みを持って現れた。

「ありがとうございます。彼の側に置いてくれないか」

義勇は炭治郎の側に置くよう指示し、黒子は言われた通りに炭治郎の側に桶を置く。

「炭治郎、この湯飲みでゆっくり水を飲むんだ。慌むてて飲むと噎むせるからな」

義勇に言われ、炭治郎は桶の中の水を湯飲みで掬い、ゆっくりと飲み干す。それを2回、3回と繰り返し、4回目ですと落ち着いたようだった。

「富岡さん、ありがとうございます」

「皆さん、聞いてください。俺の妹は二年も前に鬼にされました。だけど、一度も人を喰ったことはありません。今までも、そしてこれからも、人を傷つけることはしません」

「くだらない妄言を吐き散らかすな。そもそも身内なら庇って当たり前。言うこと全て信用できない。俺は信用しない」ネチネチ

「あああ…、鬼に取り憑かれているのだ。早くこの哀れな子供を殺して解き放ってあげよう」

「話が地味にグルグル回ってるぞ阿保が。人を喰ってないこと、これからも喰わないこと。口先だけで無く、ド派手に証明して見せろ」

炭治郎は禰豆子が人を喰っていないことを話すが、出会った当初の義勇のように誰も信じなかった。

「あのお、でも疑問があるんですけど…。お館様がこのことを把握してないとは思えないです。勝手に処分しちゃっていいんでしょうか？いらっしやるまでとりあえず待った方が…」

そこに蜜璃が待ったを掛けた。

「オイオイ、何だかヤベエことになってやがんなア」

そこに実弥が禰豆子が入った箱を背負って現れた。

「不死川さん、あなたまだその箱を背負っているのですか？」

しのぶが呆れた感じで実弥に問いかける。

「担ぐよりかはマシだと思いがア？」

実弥は炭治郎の側まで近づくと、禰豆子が入っている箱を炭治郎の側に降ろした。

「炭治郎、今の所は誰も禰豆子を傷つけてはいないぜエ。何たって俺がずっと背負っていたからなア」

「不死川さん…、禰豆子を守ってくれて、ありがとうございます」

炭治郎は実弥に禰豆子を守ってくれたことにお礼を言う。

「お館様のお成りです」

すると少女二人の声がし、柱たちは一列に並ぶ。

「炭治郎、俺たちと同じ姿勢をするんだ。粗相はしないようにな」

疑問に言われ、炭治郎は義勇の横に並び、同じ姿勢を取った。

因みに並び順は

炭治郎↓義勇↓しのぶ↓実弥↓小芭内↓行冥↓無一郎↓杏寿郎↓
蜜璃↓天元

となった。

「よく来たね私の可愛い剣士たち^{こども}。お早う皆。今日はとてもいい天気だね。空は青いのかな？顔ぶれが変わらずに半年に一度の”柱合会議”を迎えられたこと、嬉しく思うよ」

屋敷から現れたのは、顔の上半分がまるで火傷の痕のようになっていた男性だった。男性は少女二人に支えられながらゆっくりと用意された座布団に座る。

「お館様におかれましては御壮健で何よりです。益々の御多幸を切に申し上げます」

実弥がお館様に挨拶をし、お館様は実弥にお礼を言う。

「畏れながら蛇柱・伊黒小芭内が進言します。柱合会議の前にこの竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について、ご説明いただきたく存じますが、よろしいでしょうか？」

小芭内がお館様に炭治郎について質問をする。

「そうだね。驚かせてしまつてすまなかつた。炭治郎と禰豆子のことは私が容認していた。そして皆にも認めてほしいと思っている」

お館様の返答に義勇と実弥以外の柱が驚いていた。

「嗚呼…、たとえばお館様の願いであっても、私は承知しかねる…」

「俺も派手に反対する。鬼を連れた鬼殺隊員など認められない」

「私は全てお館様の望むまま従います」

「僕はどちらでも…。すぐに忘れるので」

「信用しない信用しない。そもそも鬼は嫌いだ」ネチネチ

「心より尊敬するお館様ではあるが、理解できないお考えだ！全力で反対する！」

お館様の言葉に反対する者が多数見られた。しかし義勇と実弥、しのぶは黙ったままだった。

「では手紙を」

「はい」

そこでお館様は自分に届いた手紙を読ませることにした。

「こちらの手紙は元柱である鱗滝左近次様から頂いた物です。一部抜粋して読み上げます」

『炭治郎が鬼の妹と共にあることをどうか御許し下さい。禰豆子は強靱な精神力で人としての理性を保っています。飢餓状態であっても人を喰わず、そのまま二年以上の歳月が経過致しました。俄には信じ難い状況ではありませんが事実です。もしも禰豆子が人に襲い掛かった場合は竈門炭治郎及び鱗滝左近次、富岡義勇、不死川実弥が腹を切ってお詫び致します』

手紙を読み終え、炭治郎は義勇と実弥の方を向くと、二人は炭治郎を見て笑っていた。それに感動したのか、炭治郎の目からは大粒の涙が流れていた。

「な…!? 不死川、何故だ！」

手紙の内容に驚いた小芭内が実弥に言い寄る。

「俺も」あの場面」を見ていなかったらお前らと同じ禰豆子のことを

否定していたさ。あれは二年ほど前、俺は義勇と一緒に雲取山まで来ていた。そして炭治郎の家族の死体を見つけた。俺は義勇に頼まれて死体を吊っていたんだが、そこで本来”ついでに”ついでに”ついでに”が無いことに気づいた」

「ついでに”ついでに”ついでに”ですか？」

実弥が語った話にしのが疑問を抱く。

「ああ。それは”齧^{かじ}られた跡”だ。鬼はなつた直後に極度の飢餓状態に陥る。そして最初に自分の家族を喰らう。そうして鬼は人間の味を覚える。しかし炭治郎の家族の死体には齧られた跡が無かった。そして死体を埋める穴を掘り終えた直後に、義勇の声が聞こえてな」

「滅多に大声を出さない奴だから只事ではないと思って義勇がいる所まで走ったさ。そして何と、義勇がまだ入隊していない炭治郎に一杯食わされていたんだよ」

「お…、おい実弥。それは…」

義勇が実弥を止めようとしたが時既に遅し。そのことが他の柱に知れ渡ってしまった。

「ギャハハハッ！おい富岡、お前鬼でも無い奴に地味に一杯食わされたのか！」

天元は笑いながら義勇に聞く。

「宇随、笑っていられるのも今の内だ。本題はここからだ。義勇は炭治郎を気絶させたが、その時に捕まえていた禰豆子が偶然にも義勇の拘束を抜け出してな、炭治郎が喰われると思ったんだが、実は違った

んだ」

「禰豆子は炭治郎を”守る”ために近づき、更には義勇に威嚇までしやがったんだ。それを見た俺たちは禰豆子を斬らなかつたって訳さ」

『……………』

実弥の話が終わり、義勇以外の柱は言葉を失った。

「実弥の言っていることが正しいなら、禰豆子は人を襲わないと言う証明になる。けど、その保証するものが無い」

「お館様、風柱・不死川実弥よりご提案がございます」

「まず屋敷の中で禰豆子を刺し、私が腕を出血させ禰豆子の前に差し出します。そして禰豆子の反応を見るのです」

実弥は前々から考えていたことをお館様に伝える。

「……………なるほど。それで禰豆子が実弥に喰らいつかなければ証明になる。…分かった。実弥、お願いできるかい？」

お館様は実弥の提案を許可した。

「御意。義勇、炭治郎。手伝ってくれ。お館様、補佐として義勇と炭治郎をお連れします」

「お館様、失礼つかまつ仕る」

「し、失礼します」

実弥は禰豆子が入った箱を持ち、義勇は水を捨てた空の桶を持って炭治郎と一緒に入室した。そして実弥は箱を降ろし、禰豆子を箱から出した。

「禰豆子、今からお前が”人を喰わない”か検証をする。今から俺がお前を刀で刺す。そして俺の腕を切って血を見せるからな」

実弥は禰豆子の頭を優しく撫でながら言う。禰豆子は箱の中で話を聞いていたのか、頷いて両腕を横に伸ばした。

そして実弥は自分の刀で禰豆子を刺し、更に義勇が置いた桶の上で自分の腕を切る。するとその血を見た禰豆子が涎をボタボタと流す。

「(禰豆子…)」

炭治郎は禰豆子のことが心配になるが、義勇に肩を掴まれ動けなかった。義勇もまた、禰豆子が実弥に襲い掛からないか心配していた。

「(美味しそう…。でも、人間は家族…。傷つけては駄目…)」

禰豆子は突き出された実弥の腕から顔を反らした。その行動に炭治郎、義勇、実弥の三人はホッと胸を撫で下ろした。

「お館様、禰豆子は私の腕に噛みつくことはありませんでした。これで禰豆子が人を襲わない証明ができました」

「ありがとう実弥。それじゃ治療をしなさい」

部屋の隅に待機していた黒子の一人が、布と包帯を持って近づいて治療を始める。すると禰豆子が実弥の治療を手伝い始めたのだった。

…

…

…

治療が終わった実弥は義勇と炭治郎を連れてお館様から離れた所に並んで正座した。

「炭治郎、禰豆子のことを快く思わない者もいるだろう。だから証明しなくてはならない。これから禰豆子が、炭治郎が鬼殺隊として戦えることを」

「十二鬼月を倒しておいで。そうしたら皆に認められる。炭治郎の言葉の重みが変わってくる」

「御意！そして俺は…、俺と禰豆子は鬼舞辻無惨きぶつじむざんを倒します！必ず、悲しみの連鎖を断ち切る刃を振ります！」

お館様の言葉に、炭治郎は決心を大声で高らかに宣言する。

「今の炭治郎には無惨の討伐は出来ないから、まず十二鬼月を一人倒そうね」

「……はい」

炭治郎は余程恥ずかしかったのか、その場に踞ってしまった。

第5話

柱合裁判が終わった後、お館様こと『産屋敷耀哉』の命令で黒子の格好をした『隠』の者が炭治郎と禰豆子をしのぶの屋敷である『蝶屋敷』に運んでいた。

炭治郎は男性の隠に背負われ、禰豆子は箱に入ってその箱を女性の隠が背負い、二人に負担が掛からないように運んだ。その理由が

「二人を丁寧に運べよなア…。乱暴にしたら…。分かってるよなア…？」

実弥がドスの効いた声で言ったせいだった。その時の実弥は顔中に青筋が浮かび、目も血走っていたので相当怖かったと後に隠の隊員が語っていた。

…

…

…

蝶屋敷

そこは蟲柱・胡蝶しのぶが住む屋敷であり、鬼殺隊の”診療所”も兼用されている屋敷でもあった。

そこでは任務で怪我を負った隊員が治療を受けていた。

「ごめんくださいまし〜」

女性の隠隊員が蝶屋敷の玄関で来訪を伝えるが、誰も出て来なかった。もう一度、さつきよりも大きな声で言うが、それでも来なかった。

仕方無く中庭の方へ向かった三人は、その中庭で蝶と戯れる女性隊員を見つけた。

「あの方は確か…、胡蝶様の継子の栗花落カナヲ様だな」

炭治郎は“継子”の意味が分からず質問をする。

“継子”ってのは柱の方が直々に育てる隊員のことだ。分かりやすく言えば“柱の弟子”の総称だな」

男性の隠隊員は炭治郎の質問に答えた。そして女性の隠隊員が屋敷に入っても良いか質問をするが、カナヲは笑顔を浮かべたまま答えようとはしなかった。

そこに割烹着を着た女性『神崎アオイ』が現れ、三人を屋敷の中へと案内する。そして連れてこられた場所は、等間隔にベッドが並べられた“大病室”だった。

そこでは炭治郎の同期の一人、金髪の少年『我妻善逸』が騒いでいた。彼は側にいる少女を困らせていたため、アオイが一喝して黙らせた。

炭治郎は背負われたままの状態です逸に声をかけた。すると善逸は隠の人に抱きつきながら泣いてしまった。その時に隠の人の隊服に鼻水を盛大につけてしまった。

炭治郎は善逸と同じ自分の同期の一人である頭に猪の被り物をし

ている『嘴平伊之助』と任務の時に出会った『村田』隊士のことを聞
く。善逸は村田隊士のことは知らなかったが、伊之助は隣にいること
を伝えた。

そして炭治郎が隣のベッドに視線を向けると、ベッドに横になつて
いた伊之助を見つけた。炭治郎は伊之助に助けに行けなかったこ
とを謝るが

「イイヨ、気ニシナイデ」

と、鼓屋敷から那田蜘蛛山までに聞いた時と声が違っていた。善逸
によると、伊之助は鬼に喉を握り潰されそうになっており、更にその
状態で大声を上げたことが止めとなってしまい、今の声になってし
まっているんだそう。

その後炭治郎は病人服に着替え、伊之助の隣のベッドに入った。

炭治郎は筋肉痛や肉離れのせいで全身に痛みが広がり、悶絶する。
善逸は薬を飲んだか飲んでないかで騒ぐ。更に意気消沈している伊
之助を炭治郎と善逸が励ます毎日だった。因みに禰豆子是那田蜘蛛
山及び裁判の検証のために作った怪我を治すために四六時中眠って
いた。

炭治郎が蝶屋敷で療養してから数日後、炭治郎の下に任務で知り
合った村田隊士が見舞いに訪れた。

村田曰く、『隊士の質が落ちてる』だの、『命令に従わない隊士の育
手は誰』だの、ピリピリして柱が怖くて生きた心地はしなかったら
しい。

「でも、義勇と風柱様が慰めてくれたから嬉しかったよ」

どうやら義勇と実弥が村田隊士を慰めてくれたらしい。

「よう炭治郎。怪我は大丈夫かア？」

そこに実弥が見舞いに訪れた。手には風呂敷が握られていた。

「あ、不死川さん！」

炭治郎も実弥に気がつき、声をかけた。

「何とか大丈夫そうだなア。これは見舞いの品のおはぎだア、皆で食つてくれやア」

「ありがとうございます！不死川さんっておはぎが好きなんですか？前にもこうしておはぎを頂きましたけど…」

おはぎを受け取った炭治郎は実弥に質問をする。

「まあなア。おはぎは俺の好物だからな。手土産となると、ついっ
い”コイツ”を選んじまうんだア。」

実弥は照れ臭そうに頬を指で搔く。

「それよりも炭治郎、今日はお前に”提案”をしに来たんだ」

”提案”…ですか？」

実弥が言った提案に炭治郎が首を傾げる。

「ああ。…炭治郎、お前、『俺と義勇の継子』になる気はないか？」

「!？」

「……？」

継子の意味を知っている炭治郎と村田隊士は驚き、意味を知らない善逸と伊之助は首を傾げていた。

「その反応を見る限り、継子の意味は知ってるみたいだな。お前は水の呼吸の他に風の呼吸も使える。しかしお館様が仰ったように鬼である禰豆子を連れてきているせいか、お前のことを快く思わない奴が出てくる」

「けど、継子になれば少しは炭治郎の言葉の重みが変わる。しかも柱が二人も認めていれば尚更だ。もちろんこの提案は断つても構わない。俺も義勇も継子にならないことに文句は言わない」

炭治郎は実弥の言葉を聞いて炭治郎は考え込んだ。そして

「不死川さん、継子の件…、お受けします」

炭治郎は実弥の提案を受け入れることにした。

「!!、そうかア、ありがとなア炭治郎」

実弥は炭治郎に頭を下げた。

「実弥さん、お話は終わりましたか？」

実弥の後ろにしなのぶが現れた。その瞬間、村田隊士はそそくさと逃げ帰った。

「ああ、丁度今終わった所だア。炭治郎は受け入れてくれたぜエ。それじゃそろそろ俺はお暇するぜエ」

実弥は椅子から立ち上がり、大病室から退室した。

「体調の方は大丈夫そうですね？」

しのぶが炭治郎たちに質問をし、炭治郎たちは『かなり良くなってきた』と答えた。

「それは良かったです。ではそろそろ機能回復訓練に入りましょうか」

しのぶは笑顔でそう言った。

…

…

…

機能回復訓練

それは怪我を負い長期入院した隊員たちが任務に復帰するための訓練である。

まず炭治郎と伊之助がこれを受けたが、意気消沈した感じで病室に戻るや即座にベッドに潜り、善逸の質問に答える気力すら無くなっていた。

その翌日、蝶屋敷の道場に集まった炭治郎と伊之助、それに善逸が加わり、機能回復訓練が始まろうとしていた。

「善逸さんは今日から訓練参加ですので、ご説明させていただきます」

善逸が訓練初参加と言うことで、アオイが訓練に関しての説明を開始した。

「まずはあちら。寝たきりになった硬くなつた体をあの子たちがほぐします」

アオイが指差した所には布団があり、そこに三人の少女がいた。

「それから」はんしゃくねん「反射訓練」

次にアオイが指差した所には、ちやぶ台があり、その上に湯飲みが幾つも置かれていた。

「湯飲みの中には薬湯が入っています。お互いに薬湯かけ合うのですが、湯飲みを持ち上げる前に相手から湯飲みを押さえられた場合は湯飲みを動かさせません」

「最後はぜんしんくねん全身訓練です。端的に言えば「鬼ごっこ」ですね。私アオイとあちらのカナヲがお相手です」

アオイは自分とちやぶ台の向こう側に座っているカナヲを指差した。説明を聞いていた炭治郎と伊之助は落ち込んでいた。

「すみませんちよつといいですか?」

そこで善逸が待ったをかける。アオイは質問があると思ひ善逸に

質問をする。しかし善逸は質問はせず、炭治郎と伊之助を連れて行くとうとする。だが伊之助はそれを拒否する。

「いいから来いって言ってんだろぅがアアア!!」

しかし善逸は顔に青筋を浮かべ、大声をあげる。これには炭治郎に伊之助、アオイもびっくりした。

そして善逸は炭治郎と伊之助を引き摺り、道場の裏へ来た。善逸は『そこで正座しろ』と命令する。しかし命令されるのが嫌いな伊之助が反発をした。その瞬間、善逸が伊之助を殴り、伊之助は切りもみ回転しながら壁にぶつかつた。

炭治郎は伊之助を介護しながら善逸に謝るように言うが

「お前が謝れ!お前らが詫びれ!!天国にいたのに地獄にいたような顔してんじやねえええ!!」

逆に善逸が謝れと言い出した。

「女の子とキャツキャツキャツやってただけのくせに何をやつれた顔してみせたんだよ!!土下座して謝れよ切腹しろ!!」

炭治郎は善逸の暴言に対して反論を申し立てる。

「黙れこの堅物デコ真面目が!!黙って聞け!いいか!?女の子に触れるんだぞ体揉んでもらえて!湯飲みで遊んでる時は手を!鬼ごつこの時は体触れるだろうがアア!!」

「女の子一人につきおっぱい二つお尻二つ太もも二つついてんだよ!!すれ違えばいい匂いがするし見てるだけでも楽しいじやろがい!!」

しかし善逸の煩惱には『馬の耳に念仏』であり、更に大声で捲し立てる。

そして（炭治郎除く）士気が上がった善逸たちが戻り、機能回復訓練が始まった。

まずは体をほぐす柔軟から始まった。炭治郎は愚か普段は体が柔らかい伊之助も悲鳴をあげる。しかし善逸は途中でプロレス技を三人がかりでかけられるも、終始笑顔でいた。これには伊之助も唸っていた。

続く反射訓練では善逸はアオイの手を握りながら他の湯飲みを持ち上げたが

「俺は女の子にお茶をぶっかけたりしないぜ」

とカツコつける。しかし道場の裏でのやり取りはアオイたちにも聞こえており、アオイたちの善逸を見る目は冷たかった。

全身訓練では善逸はアオイに抱きつき、ボコボコにされた。しかし善逸は

「勝負に勝ち戦いに負けた！」

と満足げになっていた。

伊之助も善逸に続き反射訓練、全身訓練でアオイに勝った。炭治郎だけはアオイに負けていた。そして善逸と伊之助の快進撃はここまですであつた。

アオイに代わりカナヲが相手になると、善逸は愚か伊之助でさえも勝てなかった。

そしてそれから五日間、炭治郎、伊之助、善逸は誰もカナヲに勝つことは出来ず、伊之助はふて腐れてへそを曲げ、善逸も早々に諦め、道場に来るのが炭治郎だけとなってしまった。

事情を聞いたアオイは当然怒り、見放した。それから十日、炭治郎はめげずにカナヲに挑むが、負け続けていた。炭治郎はカナヲとの違いを探すために考え込んでいた。

その時、不意に袖を引つ張られ顔をそちらに向ける。すると道場で炭治郎たちの体をほぐしていた三人の少女がいた。炭治郎は気づかなかったことに謝りながらどうしたのか聞くと

「手拭いを……」

震えながら炭治郎に手拭いを差し出した。炭治郎は笑顔でお礼を言った。すると三人の少女はそれで緊張や警戒心が若干解けたのか

「あの炭治郎さんは全集中の呼吸を四六時中やっておられますか？」

と話せるようになった。炭治郎は少女の一人が言ったことに首を傾げると

「朝も昼も夜も、寝ている間もずっと全集中の呼吸をしていますか？」

もう一人の少女が分かりやすく質問の説明をすると、炭治郎は『やってない』と答えた。更に『そんなことできるの?』と質問をする

「はい。それができるのとできないのでは天地程差が出るそうです」

「できる方々はすでにいらっしやいます。柱の方々やカナヲさんです。頑張ってください」

と返答された。炭治郎は少女たちにお礼を言ってその日の翌日から全集中の呼吸を四六時中する特訓を開始するのだった。

第6話

三人の少女から全集中の呼吸を四六時中行うことを教えてもらった炭治郎は、修行を開始した。が、全集中の呼吸は使用するだけでも肺に負担が掛かるため、習得は熾烈を極めていた。

炭治郎は修行の度に耳を押さえていた。心臓の音が五月蠅く、耳から心臓が出たのではないかと思っていたからだだった。

その様子を見ていた少女たちは炭治郎に差し入れをしようと相談をしていた。

…

…

…

「瓢箪ひょうたんを吹く？」

「そうです。カナヲさんに稽古をつける時、しのぶ様はよく瓢箪を吹かせていました」

差し入れを持ってきた少女たちは炭治郎にしのぶがカナヲにさせていた稽古の内容を教えていた。

「おもしろい訓練だね。音が鳴ったりするのかな？」

「いいえ、吹いて瓢箪を”破裂”させてました」

モシヤリ「へえ、瓢箪を…（え…？破裂？）」

炭治郎は修行の内容にびっくりしていた。

「えっ？これを？この硬いのを？」

「はい。しかもこの瓢箪は特殊ですから通常の瓢箪よりも硬いです」

「だんだんと瓢箪を瓢箪を大きくしていくみたいです。今カナヲさんが破裂させているのは、この瓢箪”です”」

そこには少女が座った状態の背丈と同じ高さの瓢箪が隣にあった。それを見た炭治郎は『頑張ろう！』と決心した。

それから炭治郎は屋敷の塀の上を走ったり、岩をロープで結んで木の枝に引っかけ、ロープを引っ張って岩を持ち上げたりと、狭霧山でやっていた修行を真似ていた。

それから十五日後の夜、炭治郎は屋敷の屋根の上で座禅を組んで瞑想をしていた。炭治郎は昼間に肺を酷使し、夜に肺を落ち着かせるために瞑想による深呼吸をしていたのだった。

瞑想中、自分の刀を打ってくれた火男ひよっこの面を着けた『鋼錢塚はがねづか』や浅草で出会った『人を喰わない医者たまよの鬼』”珠世たまよ”の使い猫”茶々丸ちやちやまる”の事を思い出してしまい、集中力が弱くなってしまった。

炭治郎は再び集中しようとする

「もしもし、頑張ってますね」

しのぶの顔が至近距離にあった。炭治郎はしのぶの美貌と危うく

キスしそうな距離のせいで顔が真っ赤になっていた。

しのぶは炭治郎から少し離れた場所に座り、善逸と伊之助、訓練から逃げた二人のことを話すと、炭治郎は『自分ができるようになればやり方を教えられる』と答えた。

「あの…、すみませんが、少々変な質問をしてもいいですか？」

「変な質問…ですか？いいですよ。ですがもし、私の”体重”や”胸の大きさ”とかの話でしたら…」

しのぶはこめかみに青筋を浮かべ、鳩尾を殴るジエスチャーをする。

「ち…、違いますよ！俺が聞きたいのは『富岡さんと不死川さんとの仲』についてですよ。何かお二人と仲がいいなあと思っていたので…」

炭治郎は義勇と実弥、しのぶの三人の仲について質問をしたかったようだ。しのぶも質問の内容に納得して

「あらあら、それは勘違いしてごめんなさい」

と謝った。

「私と義勇さん、実弥さんとの仲でしたね。別に隠していた訳では無かったのですが、私と義勇さんは恋仲なんです。それと実弥さんに關しては私の姉と恋仲”でした”。なのでお二人とは仲良しなんですよ」

しのぶはあっさりと義勇と実弥との關係を話した。

「そうだったんですか！…あれ？今不死川さんの”は”でした”って…」

炭治郎はしのぶの言葉にある違和感に気づいた。

「私の姉は”元鬼殺隊の柱”だったんです。炭治郎君と同じ鬼に同情している優しい姉でした。でも、姉は鬼に”殺された”んです」

しのぶの衝撃の事実には炭治郎は言葉を失った。

「実弥さんは姉が死んだことに涙を流し、義勇さんは悲しみに暮れた私を慰めてくれました。そのことがきっかけで私は義勇さんのことを異性として意識するようになっていました。それは義勇さんも同じだったようで、私のことを常に心配してくれました」

「それからは何かと任命が一緒になったりして、ますます意識してしまったのですが、ある日義勇さんから告白されました。私も義勇さんのことが好きになっていたので承諾し、恋仲となりました」

しのぶは照れ臭そうに話した。炭治郎もしのぶから照れてる匂いを嗅ぎ取り、真実であることを悟った。

「炭治郎君、あなたには私の、いいえ、姉の夢を託したいと思っています。『鬼と仲良くなる』と言う夢を」

しのぶの発言に炭治郎は呆気にとられた。

「あなたが私の代わりに頑張ってくれてると思うと私は安心できます。気持ちになります。どうか、姉の夢を叶えてください」

そう言っつてしのぶは炭治郎の側を離れた。

「……頑張ります」

炭治郎はそれだけ言っつて瞑想を再び始めた。

…

……

……

「なほ」ちゃん、「すみ」ちゃん、「きよ」ちゃん。俺の修行の手伝いをしてほしい。俺が寝ている間、全集中の呼吸をやめたら布団叩きでぶん殴ってくれないか？」

その翌日、炭治郎は仲良くなった三人の少女に協力を仰いだ。

因みに三つ編みの髪型で蝶の髪飾りをしているのが『なほ』、アオイと同じ髪型にしているのが『きよ』、きよと似ている髪型をしているのが『すみ』である。

「「いいですよー」」

なほ、すみ、きよの三人娘は炭治郎のお願いを承諾した。

そしてその日の夜、炭治郎が寝ている時、全集中の呼吸が途切れた時を見計らい、三人娘は遠慮無く炭治郎を布団叩きで叩いた。

それから十日後、炭治郎は目標の瓢箪を持ち、鼻から息を吸う。そして瓢箪に口を付けて息を勢いよく吹いた。

三人娘が応援している中、炭治郎は遂に瓢箪を息だけで破裂させた。目標を達成したことに炭治郎は三人娘と一緒に喜んだ。

そして全身訓練ではカナヲ相手に互角の勝負をし、遂にカナヲの首を掴み、勝利した。

続く反射訓練でも、カナヲと互角の勝負を繰り広げ、遂に湯飲みを持ち上げることができた。そしていざかけようとすると

『その葉湯、臭いよ？ かけたら可哀想だよ』

炭治郎の理性が語りかけ、湯飲みをカナヲの頭の上に置いた。

炭治郎は初めてカナヲに勝ったことについて三人娘と一緒に喜んだ。その様子を見ていた善逸と伊之助は置いてけぼりを喰らったかのように焦っていた。

…

…

…

それから翌日、炭治郎は善逸と伊之助にどうやって勝ったのか、教えていたが、炭治郎は人に教えるのが爆裂的に下手くそなので、擬音だらけの説明をしていた。

当然善逸と伊之助が分かるはずも無く、二人は炭治郎の説明に首を横に振っていた。

「炭治郎君が会得したのは『全集中・常中』じょうちゆうと言う技です。全集中の呼吸を四六時中やり続けることにより、基礎体力が飛躍的に上がります」

これを見かねたしのぶが炭治郎に代わり炭治郎の後ろから説明を開始する。

「これはまあ基本の技というか初歩的な技術なのでできて当然ですけども。会得するには相当な努力が必要ですよね」

「まあできて当然ですけども。仕方ないですできないから。しようがないしようがない」

しのぶは伊之助の肩をポンポンと叩いた。

「はあーん!?できてやるっつーの当然に!!舐めんじゃねえよ乳もぎ取るぞコラ」

伊之助はしのぶに馬鹿にされた怒りでやる気に満ちた。

「頑張ってください善逸君。一番応援してますよ」

更にしのぶは善逸の手を握り、心にも思っていないことを言った。しかし善逸は顔が真っ赤になり、やる気に満ちた。

しのぶは相手のやる気を引き出すことが得意の『魔蝶の女』であった。

その様子を道場の影から覗いている者がいた。

「しのぶ…、やる気を出させるためとは言え、他の男の手を握るなんて

…。それからあの猪…、一体“誰”の“何”をもぎ取るって言ったんだ…！」

覗いている者とは義勇だった。しかも側には実弥もいた。

「義勇…、お前、こんなに嫉妬深かったかア…？」

実弥は義勇の嫉妬深さに若干引いていた。

…

…

…

それから九日後、善逸と伊之助は常中の会得に成功した。

その数日後、炭治郎の下に鴉がやって来て、刀が打ち終わり、こちらに來ていることが分かった。炭治郎は伊之助を呼び、蝶屋敷の前まで来る。すると屋敷に向かってくる二人の影があった。

炭治郎はその影に向かって大きく手を振る。すると影の一つがだんだんと近づいて來た。そして影が鮮明になると、それは“包丁を持って突進している鋼錢塚”の姿だった。

炭治郎は鋼錢塚の刺突をかわす。振り向いた鋼錢塚は怒りに満ちており、自分が打った刀を折った炭治郎を一時間もの間、追いかけて回した。

「まあ鋼錢塚さんの刀への愛情は人一倍ですからね。あつ、私は鉄穴森かなもりと申します。この度伊之助殿の刀を打たせて頂きました」

鋼錢塚と一緒に来た鉄穴森は自己紹介をした。鉄穴森が伊之助に刀を渡し、伊之助が刀の柄を握ると、刀身に色が着いた。

日輪刀

別名『色変わりの刀』とも呼ばれている鬼殺隊員が用いる刀である。

この刀の原材料は『陽光山』ようこうざんと呼ばれる年中太陽の光が降り注ぐ山で採掘される『猩々緋砂鉄』しょうじょうひさてつと『猩々緋鉞石』しょうじょうひこうせきと呼ばれる陽光を吸収する鉄で造られているのだ。

また、全集中の呼吸の適正者がこの鉄で造られた刀を握ると、刀身にその人に合った呼吸の“色”が浮かぶ。更に一度着いた色は変わらず、他の人が握っても色は変わらないのだ。

(例：水↓青、風↓緑など)

「ああ綺麗ですね。藍鼠色あいなずいろが鈍く光る。渋い色だ、刀らしい良い色だ」

鉄穴森は伊之助の刀の色にうっとりしていた。

すると伊之助は刀を持って中庭に行き、敷き詰められている石を吟味し始めた。その行動に三人は首を傾げると、一つの石を持った伊之助はその石を刀に”振り下ろした”。

そして何度も石を叩きつけ、綺麗な刃は以前使用していたボロボロの刃と同様になってしまった。

これには温厚な鉄穴森も流石に怒り心頭になり、伊之助に突っ掛かろうとする。しかしそれを炭治郎が身を呈して止めた。

屋敷から帰る時も鉄穴森は怒りが収まらず、炭治郎は何度も頭を下げていた。その様子を伊之助は炭治郎の裾を掴んで見ており、鋼錢塚も自分以上に怒った鉄穴森に引いていた。

…

…

…

その夜、琵琶の音が鳴り響くと、左目に”下陸”と刻まれた鬼がとある屋敷の中に現れた。

その屋敷の中は廊下や壁、襖に障子、はたまた階段に部屋などが様々な方向を向いており、統一性が無かった。

更に琵琶の音が鳴り響くと、次々に鬼が姿を現した。集まった鬼は容姿や性別はバラバラだが、一つだけ共通点があった。

それは『左目に数字が刻まれた”十二鬼月”の”下弦の鬼”』であることだった。

十二鬼月

それは”鬼の始祖”である鬼舞辻無惨が選抜した”十二体の鬼”の総称である。

十二鬼月は全部で十二体おり、それぞれ”上弦”と”下弦”に、それぞれ六体のグループに別れている。

十二鬼月の特徴は”目に数字が刻まれている”ことだが、その数字によつて強さが決まっている。

上弦の鬼には両目に文字と数字が刻まれているが、下弦の鬼は片目にしかな文字と数字が刻まれていなかった。

バラバラに集まった鬼たちは今自分が何処にいるのか分からなかった。しかしもう一度琵琶の音が鳴り響くと、下弦の鬼たちは一ヶ所に集められ、目の前には女性が立っていた。

「頭こうべを垂れて蹲つくばえ。平伏せよ」

その”声”を聞いた瞬間、下弦の鬼たちは一斉に平伏した。その声こそ、鬼の始祖である無惨の声だったのだ。

だが炭治郎が以前浅草で出会った姿とは姿形、性別も違っていた。しかしその体から発せられる狂気こそ、目の前の女が無惨である証拠であった。

「累が殺された、下弦の伍だ。私が問いたいのは一つのみ。『何故に下弦の鬼はそれ程まで弱いのか』。十二鬼月に数えられたからと言ってそこで終わりでは無い。そこから始まりだ」

「より人を喰らい、より強くなり私の役に立つための始まり」

「ここ百年余り十二鬼月の上弦は顔ぶれが変わらない。鬼狩りの柱共を葬ってきたのは常に上弦の鬼たちだ。しかし下弦はどうだ？何度入れ替わった？」

無惨の質問に下弦の鬼の一体が『そんなこと言われても…』と思つた。しかし無惨は”鬼の思考が読める”ため、その鬼の思つたことを

口にした。

そして左腕を変形させ、その鬼を”喰った”。更に無惨はもう一体の鬼の思考を読み、質問をする。

その鬼は無惨の質問に対して否定の言葉を述べる。しかし無惨には通じる手では無く、無惨に喰われてしまった。

残り三体となった下弦の鬼の内の一体はその場から逃げ出した。何とか逃げ切ろうとするが

「もはや十二鬼月は上弦のみで良いと思っっている。下弦の鬼は解体する」

無惨はその逃げ出した鬼の頸をいつの間にか持っていた。

残り二体の下弦の鬼の一体は命乞い無惨にする。そして『血を分けて欲しい』と言うが、それは無惨にとっては”指図をした”ことと同義だった。

無惨は持っていた鬼の頸を放り投げ捨て、怒り心頭で指図した鬼に向かって『指図するな』と言う。無論その鬼は指図したとは思ってもいなかったが、無惨は『自分に決定権がある』と言って指図したことにし、その鬼を殺した。

そして最後に残った下弦の鬼、『下弦の壺・えんむ魔夢』に最後の話を振る。

「そうですねえ…」

魔夢は少し考えると

「私は夢見心地で御座いました。貴方様直々に手を下して戴けること、他の鬼たちの断末魔を聞けて楽しかった。幸せでした。人の不幸や苦しみを見るのが大好きなので、夢に見る程好きなので。私を最後まで残してくださいありがとうございます」

とうつとりした顔で喋った。すると無惨は自分の右腕を鋭く変形させ、それを魘夢の頸に刺した。

「気に入った、私の血をふんだんに分けてやろう。ただしお前は血量に耐えきれず死ぬかもしれない。だが”順応”できたならばさらなる強さを手に入れるだろう」

無惨は魘夢に自分の血を流し込んだのだ。魘夢は血を吐き、その場でのたうち回る。

「耳に花札のような飾りをつけた鬼狩りを殺せばもつと血を分けてやる」

無惨はそう言って後ろに現れた障子から出て行った。そして魘夢も町中に落とされた。その間、魘夢は無惨の血から得た情報を見る。そこには炭治郎の姿があった。

「うふ、うふふ。柱と、この子供を殺せばもつと血を戴ける…。夢心地だ……!!」

第7話

炭治郎はこの日、しのぶの診察を受けていた。

「はい、もういいですよ。怪我也治り、体力も回復しました。それに日輪刀も戻って来て、いつでも任務に復帰できますね」

炭治郎が全快になったことをしのぶは伝えた。

「ありがとうございます！あつ、そうだしのぶさん、一つお尋ねしてもいいですか？」

炭治郎は診察を終えたしのぶに質問をする。

”ヒノカミ神楽” について聞いたことはありますか？」

「ありません」ズバツ

「えっ!?!じゃあ”火の呼吸”は…」

「ありません」ズバツ

炭治郎の質問にしのぶは笑顔で”知らない”と答えた。そこで炭治郎はなるべく分かりやすくしのぶに説明をする。

「なるほど…。なぜか炭治郎君のお父さんは火の呼吸を使っていた。火の呼吸の使い手に聞けば何かわかるかもしれない…。ふむふむ」

炭治郎の説明を聞いたしのぶは納得した。

『火の呼吸』はありませんが、『炎の呼吸』ならあります」

しのぶの返答に炭治郎は首を傾げた。

「私も仔細はわからなくて…、ごめんなさいね。ただその辺り、呼び方についてが厳しいですよ。『炎の呼吸』を『火の呼吸』とは呼んではならない。詳しいことは炎柱の煉獄さんに尋ねてみるといいかもしれません」

炭治郎は杏寿郎が誰なのか今一思い出せなかった。

「ほら裁判の時に真つ先に炭治郎君のことを否定していた目がギョロつとした人ですよ」

しのぶに杏寿郎の特徴を言われ、やっと思い出し、納得した。

「今は任務に出掛けているので、鴉に手紙を届けてもらいましょう。返事が来るまで少し時間がかかりますが」

しのぶは早速杏寿郎宛てに手紙を書き、自分の鴉『艶』^{えん}に届けさせた。

その後炭治郎は診察室を後にした。すると先にある角から誰かが来る匂いがしたので、壁際に寄る。そして角を曲がって来た人物は意外な人だった。

「あれ？玄弥じゃないか」

「んあ？炭治郎か」

そう、角を曲がって来たのは実弥の弟の玄弥だった。

「どうしてハハハ？」

炭治郎は玄弥に質問をする。

「実は俺の体は”特異体質”でな。定期的にここで診察を受けているんだ」

玄弥は炭治郎の質問に答えた。そこで二〜三話しをして二人は別れた。

…

…

…

「そうですか、もう行かれるんですね。短い間でしたが同じ刻を共有できて良かったです」

炭治郎は玄弥と話した後、世話になったアオイの下に来ていた。

「忙しい中俺たちの面倒をみてくれて本当にありがとう。おかげでまた戦いに行けるよ」

「あなたたちに比べたら私なんて大したことはないのでお礼は結構です」

「選別でも運良く生き残っただけ。その後は恐ろしくて戦いに行けなかった腰抜けなので」

炭治郎がお礼を言うと、アオイは自分自身を蔑む言い方をした。

「そんなの関係ないよ。俺を手助けしてくれたアオイさんはもう俺の一部だから。アオイさんの想いは俺が戦いの場に持って行くし」

炭治郎の言葉にアオイの頭の中は真っ白になった。

「また怪我したら頼むね」

炭治郎はそう言って手を振りながらその場を去る。その場に残されたアオイは呆然としたまま立っていた。

その日からアオイは炭治郎のことを意識するようになり、夜自室のベッドの中で炭治郎の言葉を思い出しては顔を真っ赤にする日々が続いた。

しかしアオイは気づかなかつた。同じ日に、同じ人に、自分と一緒に気持ちになった人のことを。

…

…

…

「あつ、いたいた。カナヲ」

炭治郎が次に訪れたのは、カナヲがいる縁側だった。

「俺たち出発するよ。色々ありがとう」

炭治郎はカナヲにお礼を言う。するとカナヲはコインを取り出し、それを指で弾いた。空中でクルクル回り落ちるコインをカナヲは右手の甲で受け止め左手で隠した。そして左手をどけるとコインは『裏』と書かれた面が上になっていた。

「師範の指示に従っただけなので、お礼を言われる筋合いは無いから。さようなら」

するとカナヲは炭治郎に向かって喋ったのだった。炭治郎は蝶屋敷に滞在している間、カナヲとは一度も話しをしたことが無かったので嬉しく思っていた。

炭治郎はコインのことを聞くためにカナヲの側に座った。

「指示されてないことはコインを投げて決める。今あなたと話すか話さないか決めた。”話さない”が表、”話す”が裏。裏が出たから話した」

炭治郎は『何故自分で決めないのか?』をカナヲに聞く。カナヲは『全部どうでもいいから自分で決められない』と答えた。

「この世にどうでもいいことなんて無いと思うよ?きつとカナヲは心の声が小さいんだろうな」

炭治郎はどうすればカナヲが素直になれるか考える。

「そうだ!・ねえそれ、貸してくれる?」

炭治郎は妙案を思い付いたのか、カナヲからコインを借りた。

「よし!投げて決めよう!カナヲがこれから、自分の心の声をよく聞

くこと！」

炭治郎はそう言って、カナヲのコインを思い切り上に弾いた。

「よし表にしよう！表が出たらカナヲは心そのままに生きる！」

コインは風に煽られながら炭治郎の近くに落ち、炭治郎は先程カナヲがやったように右手の甲で受け止め、左手で隠した。

そしてそのままカナヲの側に寄り、カナヲと一緒にコインを確認すると、そこには”表”と書かれていた。

「表だー!!」

炭治郎は喜びの余りその場で跳び跳ねた。そして炭治郎はカナヲにコインを返すと

「カナヲ、頑張れ!!人は心が原動力だから!心はどこまでも強くなる!!」

カナヲの手を握った。そして炭治郎はアオイの時と同じように手を上げてその場を去ろうとした。

「まつ…待って!何で…、何で表を出せたの?(あの時、投げる手元は見ていた。小細工はしてなかったのに…)」

カナヲは何故炭治郎が表を出せたことに疑問を持ち、炭治郎を呼び止める。

「偶然だよ。それに裏が出て表が出るまで何度でも投げ続けようと思ってたから」

炭治郎の返答にカナヲは心を射られた。

「元気でね〜」

炭治郎はそのまま去り、カナヲは炭治郎から返されたコインを見つめ、自分の胸に押し当ててみる。それは無意識の行動だったのか、気づいた時には顔が真っ赤になっていた。

その日からカナヲは炭治郎のことを意識してしまい、炭治郎のことを思い出せば顔を真っ赤にする日々が続いた。

しかしカナヲは気づかなかつた。同じ日、同じ人に、自分と一緒に気持ちになった人のことを。

そう、アオイとカナヲは炭治郎に『恋心』を抱くようになったのだ。しかし二人がそれに気づくのはまだ先の話である。

…

…

…

その後炭治郎は禰豆子、善逸、伊之助の三人を連れて蝶屋敷を出立し、人の往来が多い駅へと着いた。その理由は蝶屋敷を出立した炭治郎の下に彼の鴉である『天王寺松右衛門』てんのうじまつえもんがしのぶからの手紙を届けに来て、その手紙の内容が『杏寿郎は駅にいて、列車に乗っている』と書かれていたからだだった。

駅に到着した炭治郎、善逸、伊之助の三人は目的のものを探すこと

にした。伊之助は人が多くいることにビビって炭治郎の背中に隠れる。そして伊之助は“ある物”を見つけた。

それは『漆黒の鉄の塊くろがね』であった。

(要するに列車のことです) by 作者

伊之助は列車を『土地の主』や『土地を統べる者』と勘違いをしており、炭治郎もまた、列車のことを『土地の守り神』と勘違いしていた。唯一真面まともだったのは善逸だけであった。

しかも伊之助は客車に向かって頭突きをしてしまう。その騒ぎを聞いて駆けつけた駅の職員に刀を持っていることがバレてしまい、炭治郎一行は一度その場から離れ、身を隠すことにした。

「鬼殺隊は政府公認の組織じゃないからな、本当は堂々と刀を持って歩けないんだよ。鬼がどうの言っても信じてはもらえんし混乱するだろ」

炭治郎は『なぜ刀を持っているだけで騒がれた』のかその疑問を口にする、善逸がその理由を説明した。炭治郎は『一生懸命頑張っているのに…』と涙を流す。そして善逸の提案で刀を隊服と羽織の間に隠すことにした。

が、そこで問題が、正確には伊之助にのみ、問題が発生した。

伊之助は通常の人よりも『触覚』が鋭く、手をかざした“だけ”で目標を捉えたり、気配を感じ取ることができるのだ。

従って服を着ているとその触覚が鈍ってしまうため、伊之助は常に上半身が裸なのだ。

つまり、伊之助は羽織を持っておらず、背中に刀を隠そうとしても羽織が無いため”丸見え”なのである。

それを打破するためなのか、炭治郎がどこから取り出したのか、布を持っており、その両端を伊之助の首の前で縛った。その間、善逸は人数分の切符を買いに窓口まで向かっていた。

そしていよいよ列車に乗車しようとする、列車が汽笛を鳴らし、出発してしまつた。三人は急いで走り、伊之助と炭治郎は客車の最後尾に飛び乗った。善逸は二人より距離があつたためこのままでは乗れなかつた。

しかし炭治郎と伊之助が手を差し伸べ、善逸がその手を掴む。そして二人が善逸を引き上げ、三人は無事に『無限列車』に乗車することが出来た。

…

…

…

三人は客車を移動しながら杏寿郎を探す。しかし善逸と伊之助は杏寿郎に会つたことが無いので唯一会つた炭治郎に特徴を聞こうとすると、丁度今いる車輛から『うまい！』を連呼する人がいた。

恐る恐る覗くと、そこには焼肉^{駅弁}弁当を幾つも平らげる杏寿郎の姿があつた。

「あの人が炎柱？」

「うん…」

「ただの食いしん坊じゃなくて？」

「うん…」

その姿を見た善逸は思わず炭治郎に何度も確認をしていた。

炭治郎は杏寿郎に断りをもらって杏寿郎の隣（窓側）に座る。そして善逸と伊之助は通路を挟んだ反対側に座った。そして炭治郎は杏寿郎に『ヒノカミ神楽』のことについて質問をする。

「うむ…そういうことか！だが知らん！『ヒノカミ神楽』という言葉も初耳だ！君の父がやっていた神楽が戦いに応用できたのは実にめでたいが、この話はこれでお終いだな！」

炭治郎の話しを聞いた杏寿郎はこの話しは終わりと言わんばかりに打ち切る。更には炭治郎が聞いてもいないことをベラベラと喋る。

「俺の所で鍛えてあげよう！もう安心だ！」

杏寿郎の面倒見が良い所を知った炭治郎は感心していた。

「うおおおお！すげえすげえ速ええええ！」

スピードに乗った列車の速さに伊之助は窓から身を乗り出して興奮していた。しかも列車から降りて競争しようとしていた。

（走ってる列車の窓から身を乗り出すのは大変危険ですので、絶対に真似しないで下さい） by 作者

「危険だぞ！いつ鬼が出てくるかわからないんだ！」

杏寿郎の注意に善逸と伊之助は杏寿郎の方を向く。

「短期間の内にこの汽車で四十人以上の人が行方不明となっている！数名の隊士を送り込んだが、全員連絡が取れず消息を絶っている！だから柱である俺が来たんだ！」

杏寿郎は今回の任務の詳細を言うと、善逸は『降りる！』と騒ぎ出した。

「切符…、拝見…、致します…」

そこに車掌が到着して切符を拝見しようとする。

「車掌さんが切符を確認して切り込みを入れてくれるんだ！さあ車掌さんに切符を渡すんだ！」

杏寿郎が車掌の仕事を説明して一人先に切符を差し出す。三人も杏寿郎の真似をして車掌に切符を差し出す。車掌はそれぞれの切符に切り込みを入れる。その時、炭治郎は微かに”嫌な匂い”を嗅ぎ取った。

…

…

…

すると杏寿郎は不意に立ち上がり、隠していた刀を手に持つ。する

といつの間にか客車の後方に鬼がいた。

「その巨軀を隠していたのは血鬼術か。気配も探りづらかった。しかし！罪なき人に牙を剥こうものならば、この煉獄の赫き炎刀がお前を骨まで焼き尽くす!!」

『炎の呼吸 壺ノ型 不知火』
しらぬい

杏寿郎は抜刀しながら鬼に突進しながら鬼の頸を斬った。

それに感動した炭治郎は杏寿郎に弟子入りを申し出る。杏寿郎がそれを承諾すると、善逸と伊之助も弟子入りを志願し、それも受け入れた。

…

…

…

しかしそれは杏寿郎が見ていた”夢”だった。

そして先頭車輛、機関車の上には『下弦の壺・魘夢』が立っていた。

「夢を見ながら死ねるなんて幸せだよね」

第8話

「おい三太郎、大丈夫か!？」

『無限列車』と融合していた先頭車輛魘夢の類を斬った炭治郎は、魘夢がのたうち回る拍子に飛ばされてしまった。

炭治郎は自分の腹を刺した運転手のことを気にしていたが、それを伊之助は今の状況を伝え『放っておけ!』と言った。しかし炭治郎は『その人はもう十分罰は受けているから助けてやってくれ』と頼んだ。伊之助は仕方なくといった感じで運転手を助けに行った。

炭治郎はその場で仰向けに寝転がると

「全集中の常中ができているようだな! 感心感心!」

杏寿郎が現れ炭治郎を見下ろした。

「常中は柱への第一歩だからな! 柱までは一万歩あるかもしれないがな!」

杏寿郎は炭治郎が常中を会得していることに感心していた。

「腹部から出血しているな。もっと集中して呼吸の”精度”を上げるんだ。体の隅々まで神経を行き渡らせろ」

炭治郎は言われた通りに集中すると、体内にある破れた血管を感じ取った。

「そこだ。止血、出血を止めろ」

炭治郎は止血しようと力むが、痛みのせいで集中できずにいた。すると杏寿郎が炭治郎の額に指を当て

「集中」

とだけ言った。そして炭治郎は痛みを堪え集中し、出血を止めた。

「うむ、止血できたな。呼吸を極めれば何でもできる訳では無いが、様々なことができるようになる。昨日の自分より、確実に強い自分になる」

杏寿郎は持論を言うと、炭治郎は『はい』とだけ返事をした。そしてそろそろ退却しようとした時、炭治郎たちの側で土埃が上がった。

…

…

…

土埃が晴れると、そこには人がいた。しかし杏寿郎と炭治郎はその人物が鬼であることを気配と両目に刻まれている文字で悟った。

すると鬼は炭治郎目掛けて拳を振るう。

『炎の呼吸 弐ノ型 昇り炎天』

しかし杏寿郎がその拳を斬り、鬼を遠ざけた。

「いい刀だ」

鬼は斬られた拳をくっ付け、滴る血を舐め取った。

「(この再生の速さ…、凄まじい圧迫感と鬼気。これが上弦…)なぜ手負いの者から狙った？その考えが理解できない」

杏寿郎は鬼に『なぜ炭治郎を狙った』のか問いただす。

「俺とお前の話し合いを邪魔されたく無かったからだ」

鬼は杏寿郎との話しを邪魔されたく無かったから炭治郎を狙ったことを話した。

「君と俺が何の話をする必要がある？君とは初対面だが、既に俺は君のことが嫌いだ」

杏寿郎は鬼との話し合いを突っぱねる。

「そう言うな。そちらにとっては利益しかない」

鬼は杏寿郎との話し合いを無理矢理しようとする。

「俺はお前たち鬼狩りに”協力”を申し出る」

何と鬼の話し合いとは、自分が鬼殺隊への協力を申し出ることだった。

「俺の名は『猗窩座』。見ての通り、『十二鬼月・上弦の参』だ。そして、俺は『前世の記憶』を持っている」

「俺は前世では今と”同じ立ち位置”の鬼だった。そして此所でお前

たちと戦った。だが、朝日が昇り、決着は着かなかった」

「そして竈門炭治郎、最後は”鬼に変身した”お前によって”ある場所”で倒された。確か名は…、輝く鬼と書いて”輝鬼”だったな。それで気がついたら、この世で以前経験した状況と同じだった」

何と猗窩座と名乗った鬼は前世の記憶を持っていたのだった。

「俺はこの世で以前の過ちを侵さないようにしようとしたが、抗えなかった。そして鬼になった時に、前世の記憶が甦ったのだ。それで俺は自力で”呪い”を解き、お前たちと接触する機会を待っていたのだ」

”呪い”…？」

杏寿郎は呪いと言うフレーズが気になり、それを口に出した。

「俺たち”人喰い鬼”が持たされる共通の呪いさ。それは『鬼舞辻無惨の名を口にする』と、その血に殺されると言うものだ。しかも無惨は鬼にした者の”思考”も読むことができる」

「ああ、安心して欲しい。俺はその呪いを解いたから今の状況を無惨が知る由も無い」

猗窩座は淡々と喋る。それを炭治郎は匂いで嘘かどうか嗅ぎ取ったが、猗窩座からは”嘘の匂い”はしなかった。

「そんなこと信じられるとは思えん！現にお前は手負いの者を襲った！」

「確かに俺は炭治郎を攻撃しようとした。だが当てるつもりは無かつ

た。拳も寸止めにするつもりだった。まあ、殺気に関しては本気で出したがな」

杏寿郎は猗窩座の言ってることが信用できずにいた。

「煉獄さん、俺はこの鬼が言ってることを、信じてもいいと思います」

しかし炭治郎は猗窩座を信じると言った。

「俺は鼻が良く効くので、相手の”感情”とかも読み取れます。この鬼からは嘘の匂いはしませんでした。それに呪いに関してでも納得がいきます。もし呪いを解いていなければ、今頃この鬼は呪いで”死んでいます”から」

「流石は竈門炭治郎だ。俺が認めた強者なだけはある」

炭治郎の言葉に猗窩座は頷いていた。

「だが、納得できないのも分かる。そこでだ、俺とお前。二人で一騎打ちをしないか？」

猗窩座は杏寿郎に打開策として一騎打ちを申し出る。

「俺が勝っても負けても、そちらには利益しか残らない。どうだ？悪くは無いと思うが」

猗窩座の提案に杏寿郎は考え込むと

「良いだろう。その一騎打ち、受けて立とう」

刀を抜刀し、構えた。

「それでこそ、だ。改めて名乗ろう。俺は十二鬼月、上弦の参、猗窩座」

「俺は鬼殺隊、炎柱、煉獄杏寿郎」

「推して参る!!」

『術式展開 破壊殺・羅針』

『炎の呼吸 壺ノ型 不知火』

ドオンッ

”二人”が衝突した途端、周辺に怒号が起きた。

『破壊殺・空式』

『炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり』

『破壊殺・乱式』

『炎の呼吸 伍ノ型 炎虎』

二人は一進一退の激しい攻防を繰り返す。炭治郎はその場から動こうとすると

「動くな!! 傷が開いて致命傷になるぞ!! 待機命令!!」

「そうだ竈門炭治郎!! 動けば余波を喰らうことになるぞ!!」

二人から注意を受け、動けなくなった。

…

…

…

激しい攻防を繰り返してから数分、実際には数時間かもしれないが、長く、永く感じた一騎打ちが終わろうとしていた。

猗窩座は杏寿郎から受けた傷が塞がっていつてるが、杏寿郎は額から出た血が左目に入り、視野を狭めていた。

「そろそろ夜が明ける。杏寿郎、ここで提案だが、お互い”最後の一撃”を出さないか？」

「臨む所だ」

「術式展開、破壊殺・滅式…」

「炎の呼吸、奥義…」

二人は最後の二撃を繰り返すため、力を込める。

そして

「鬼気・正拳突き!!」

「玖ノ型・煉獄!!」

二人の必殺技が炸裂した。二人の周辺は土埃が舞い、様子が伺えな

かった。そして土埃が晴れると、猗窩座の右上半身が抉れ、杏寿郎は刀が根元から折れていた。

「……引き分け、だな」

「……そのようだな」

二人は脱力したのか、その場に座り込んでしまった。

…

…

…

「くっ、不味い。もうすぐ夜が明ける！」

猗窩座は殆んど体力が残っていない体に鞭を打って立ち上がる。

「竈門炭治郎!!」

そして炭治郎の名を叫んだ。

「この一騎打ちは引き分けに終わった！杏寿郎は座り込んでいるが、命に別状は無い！俺はこの場から引き下がる！近い内に俺の”使者”がお前の前に姿を現す！そいつから聞いたことをお前の上司たちに伝えるがいい！去らばだ!!」

猗窩座は足を引き摺って近くの森の中へと入り、気配を消した。

「猗窩座さん…、分かりました」

炭治郎はやつとの思いで立ち上がり、猗窩座が去った森を見つめていた。

「……竈門少年」

その時、杏寿郎が炭治郎を呼んだ。炭治郎は遅い歩みで杏寿郎の下へ向かう。途中膝から崩れ落ちそうになるが、それを伊之助が支え、杏寿郎の下へ到着した。

「……ははっ、すまなかつたな。一騎打ちは引き分けに終わってしまつた」

杏寿郎は笑っていたが、炭治郎は泣いていた。

「煉獄さん、あなたは強い。猗窩座さんに一步も引かなかつた。引き分けなんかじゃない、勝者は煉獄さんです」

炭治郎の言葉が嬉しかつたのか、杏寿郎は刀を置き、炭治郎の頭を撫でた。

「竈門少年、俺は君の妹を信じる。鬼殺隊の一員として認める。汽車の中であの少女が血を流しながら人間を守るのを見た。命を賭けて鬼と戦い人を守る者は、誰が何と言おうと鬼殺隊の一員だ。堂々と胸を張ればいい」

杏寿郎は列車内での禰豆子の働きを見て、彼女を認めたのだ。

「いいか竈門少年。この先過酷な試練が待ち構えているかもしれない。だが、そんな時こそ”心を燃やせ”。そうすれば、苦しいことも乗り越えることができる」

「……はいー」

炭治郎は涙を流しながら力強く返事をした。

その後、隠が到着し、一部の者は杏寿郎たちを担いで、残りの者が事後処理を担当し、任務が終了した。

…

……

……

「全く…、やっと怪我が完治して出立できたと思ったら、また大怪我をして戻ってくるなんて…」

炭治郎、善逸、伊之助、杏寿郎の四人はその後蝶屋敷に運ばれ、治療を受けた。

「善逸君に伊之助君は軽い打撲などの軽症で、煉獄さんは全身打撲に額からの出血。炭治郎君が四人の中で最も重症の腹部を刺されて出血」

「あなたたちは私を過労死させたいのですか？」

しのぶはベッドで横になっている四人に向かって、笑顔を浮かべていた。しかし顔は笑顔なのに、目が笑っておらず、溝尾を殴るジェスチャーもしていた。

「『申し訳ない（ありません）……』」

四人は冷や汗を流しながら謝った。

「まあ任務に赴くにつれて怪我をするのはしょうがないですが、もう少し自分の体を労ってくださいね」

しのぶはそう言って病室を後にした。

「それにしても、まさか鬼が天敵である鬼殺隊に協力を申し出るなんて…」

しのぶが去った後、善逸が炭治郎から聞いたことを口にした。

「俺もびっくりしたよ。しかも前世の記憶を持っていたなんて」

炭治郎も猗窩座のことに驚いていた。

「竈門少年、猗窩座のことだが、”あれ”は本当にあることなのか？」

”前世の記憶を持っている”ってやつですか？……すみません。俺もああいったことを経験したことが無いもので…」

杏寿郎は猗窩座のことについて炭治郎に質問をするが、炭治郎は分からないことだったことを謝った。

「そう言うな、俺も経験したことが無いからな。それはそうと、実は夢の中で思い出したことがあったんだ」

「俺の家に”歴代炎柱の書”て言う物があったな、もしかしたら”ヒノカミ神楽”について何か記されているかもしれない」

杏寿郎は魘夢に見せられていた夢の中で、思い出したことがあった。

「お互いの怪我が完治したら、俺の屋敷、炎屋敷に招待しよう」

「煉獄さん…、はい！ありがとうございます！」

炭治郎は杏寿郎に向かって頭を下げた。その時に刺された腹部を圧迫してしまったのか、痛みが体中に走り、悶絶してしまった。

「ちよっ!?炭治郎大丈夫!?誰か！誰か来て〜！」

痛みを我慢している炭治郎を見た善逸は、大声を出し、助けを呼んだ。その声を聞いたアオイが直ぐ様病室に入り、炭治郎を介護した。

さりげなく自分の胸を炭治郎に押し当てながら。

炭治郎は押し当てられたアオイの胸の柔らかさに顔を真っ赤にし、炭治郎の感情を善逸は耳で聞き取り、炭治郎を責める。

善逸は炭治郎に似て聴覚が鋭く、どんなに小さな音や相手の感情を音で”聞き取る”ことができるのだ。

伊之助は”我関せず”と言った感じでベッドで鼻提灯を作りながら寝ており、杏寿郎はそんな三人を見て微笑んでいた。

この後、騒いだ善逸がしのぶにこっそり叱られていた。

第9話

無限列車での任務から一ヶ月後、ようやく炭治郎の怪我が自由に歩ける程度まで治り、この日はかつて話をしてきた煉獄家へ訪問するこ
とになった。

煉獄家へ訪れたのは、炭治郎の他にカナヲが付き添いで来ていた。

炭治郎は怪我をしても無理に体を行使する節があったため、カナヲがお目付け役として同行していた。

炭治郎の同行について蝶屋敷で話し合いがあったが、そこでアオイが興奮気味に手を上げていた。しかし、しのぶから『蝶屋敷の仕事があるから駄目』と言われてしまった。そしてアオイと同様になほ、すみ、きよの三人も外された。

残るはしのぶとカナヲだが、しのぶは任務が入ってしまったっており、残ったカナヲがお目付け役の権利を得ることになった。

カナヲは炭治郎と一緒に行動できることに、顔には出してはいなかったが、内心喜んでいた。

「竈門炭治郎さんと栗花落カナヲさんですね？僕は炎柱、煉獄杏寿郎の弟の『煉獄千寿郎』といます」

二人が煉獄家の門に到着すると、門前で待っていた少年が挨拶をした。

「初めまして！竈門炭治郎です！」

「栗花落カナヲです。今日はよろしくお願いします」

二人は千寿郎に頭を下げた。

「こちらこそよろしくお願いします。ささつ、中へどうぞ。兄が待っていますので」

千寿郎が屋敷の中へ案内しようとする

「おい千寿郎、その餓鬼たちは誰だ？」

扉から「酒」と書かれた壺を持った男性『煉獄槇寿郎』が現れた。

「父上」。この方々は兄上の客人で竈門炭治郎さんに栗花落カナヲさんです」

千寿郎が炭治郎たちを紹介し、二人は頭を下げる。槇寿郎は炭治郎が着けている「耳飾り」を見ると、驚いて持っていた酒壺を落としてしまった。

「お前…、その耳飾り…。そうか…、お前が…」

「父上？」

槇寿郎の驚きに千寿郎は首を傾げる。

「お前…、」日の呼吸”の使い手だな!？」

日の呼吸と言うフレーズを聞いた炭治郎とカナヲは首を傾げる。すると槇寿郎はものすごいスピードで炭治郎に接近し、炭治郎を地面に押し付けた。

「父上止めてください!!その人は兄上の客人ですよ!」

「うるさい黙れ!!」

槇寿郎を止めようとした千寿郎を槇寿郎が殴り飛ばした。それを見た炭治郎は

「いい加減にしろ!この人でなし!!」

槇寿郎を目一杯“殴った”。しかし槇寿郎は腕でガードしていたため、少し炭治郎から少し離れるだけに終わった。

「さつきから何がしたいんだあんたは!!」

炭治郎は槇寿郎に向かって怒るが

「お前…、俺たちのことを馬鹿にしているだろう…」

槇寿郎は炭治郎の言葉に聞く耳を持たなかった。

「その耳飾り…、俺は知っている。書いてあった!そうだ、”日の呼吸”…、それは始まりの呼吸!!一番初めに生まれた最強の御技!そして全ての呼吸は”日の呼吸”の派生!」

「全ての呼吸が”日の呼吸”の後追いに過ぎない!”日の呼吸”を猿真似し劣化した呼吸だ!火も水も風も全てが!」

槇寿郎が言っていることが分からない炭治郎は訳が分からなくなっていた。

”日の呼吸”の使い手だからと言って、調子に乗るなよ小僧!!」

「調子になんて乗りませんよ!! さっきから何を言っているんですか!?!」

「父上! 竈門少年! 何があった!?!」

騒ぎを聞き付けた杏寿郎が屋敷から飛び出てきた。

「杏寿郎! お前はこの小僧が”日の呼吸”の使い手であることを知っていたのか!?!」

榎寿郎は杏寿郎に炭治郎が日の呼吸の使い手なのを知っていたのか聞いた。杏寿郎は榎寿郎の側まで向かうと

「父上、俺が知る限りでは竈門少年は日の呼吸の使い手ではありません。彼が使う呼吸は”水”と”風”です」

杏寿郎は炭治郎が使用する呼吸を榎寿郎に伝える。

「それに、竈門少年の家に代々伝わる神楽がありまして、その正体の糸口が”歴代炎柱の書”にあるかとも思い、招待しました」

「父上、どうかこの場は俺の顔を立ててはくさいませんか?」

そして杏寿郎は頭を下げる。

「……チツ。杏寿郎、千寿郎! 俺は酒を買いに出る! 後はお前たちの好きにしろー!」

榎寿郎はそう言って、炭治郎たちから去った。

…

……

……

「竈門少年、栗花落少女。先程は父上が失礼なことをして申し訳無かった」

その後杏寿郎の案内で客間に通された炭治郎たちに、杏寿郎は頭を下げた。

「別に気にしていませんので、頭を上げてください」

炭治郎は『気にしてない』と言い、カナヲはそれに同意するかのようには頷いた。そこに千寿郎が人数分の茶を持って入室した。湯飲みは四つ。それは炭治郎とカナヲ、杏寿郎と千寿郎の分だった。

「そう言ってくれると有難い。では早速書を開こう。俺も読むのは久方ぶりだからな！」

杏寿郎は横に置いていた『歴代炎柱の書』を炭治郎たちの前で開く。

「(…)、これは！」

「そんな!？」

「よもやよもや……」

書を開いた時に、炭治郎たちは驚いた。何故なら、「書の中身がズ

タズタに破れていた”からだった。

「酷い…、誰がこんなことを…」

カナヲが書を破った人を怨めしそうにしていると

「申し訳ありません。恐らく父上が破いたのかと…」

「うむ…。この書は嚴重に保管されていたから、それしか考えられまい…」

杏寿郎と千寿郎は破いた犯人について心当たりがあった。

「竈門少年、申し訳無い。折角来てくれたというのに…」

杏寿郎は炭治郎に向かって頭を下げた。

「煉獄さん、頭を上げてください。煉獄さんが悪い訳ではないですから」

炭治郎は杏寿郎に頭を上げるように言った。

「この書は俺たちが責任を持って復元させる。そして何か分かったらすぐに知らせよう」

「……………お願いします」

炭治郎と杏寿郎はそう約束をして炭治郎とカナヲは煉獄家を後にした。

…

……

……

それから更に一ヶ月後。怪我が完治した炭治郎は任務に出ていた。杏寿郎は炎柱の書を復元しながら柱としての任務をこなしていた。

「……………」

炭治郎は鬼を倒し一息着いていた時、近くの茂みがガサガサと揺れた。炭治郎は鬼の新手と思い、刀を構える。そして現れたのは少女の鬼だった。

鬼は炭治郎をじっと見つめていた。

「(市松模様の羽織に背負った箱。そして額にある陽炎のような痣…) あなたが竈門炭治郎?」

「!? そうだ」

鬼の質問に炭治郎は答える。

「そう、なら良かった。私は十二鬼月、下弦の肆、零余子^{むかご}。猗窩座^おの使者よ」

彼女『零余子』は炭治郎に猗窩座の使者と伝えた。

「猗窩座さんの!? じゃあ君が…」

「ええ。猗窩座お兄様からあなたの特徴を聞いていてね。それで確認

のために質問をさせてもらったわ。ああ先に言っておくけど、私も猗窩座お兄様同様、呪いを解いているわ」

「早速だけど、猗窩座お兄様が入手した情報を教えるわ」

零余子は懐から紙の束を取り出す。

「情報は『無惨の目的』、『十二鬼月の状態と潜伏場所』よ」

「まず無惨の目的は『太陽の克服』。そのために『太陽を克服した鬼』の作成と十二鬼月の上弦に『青い彼岸花』の搜索を命じているわ」

”青い”…彼岸花…?”

炭治郎は聞いたことが無い花の名前に疑問が浮かんだ。

「私もよくは知らないんだけど、太陽を克服するために探しているんだと思うわ」

「次に十二鬼月の状態だけど、十二鬼月はもう上弦しかいないわ。下弦の鬼は解体されたの」

「私は血鬼術で分身を作って無惨の所に忍び込ませたの。けど、無惨に喰われてしまったわ。その後猗窩座お兄様からこのことを聞かされたわ。だから私は下弦の肆でも頭に”元”が着くの」

「上弦の鬼に関してはこの書類に”似顔絵”と”名前”、その呼び方と潜伏先が記されているわ」

零余子は炭治郎に紙の束を渡した。

「潜伏先は一部の鬼しか分からなかったらしいわ。それじゃ私はもう消えるわ。いつまでもここにいたら無惨に繋がっている鬼に見つかるもの」

零余子は踵を返してその場を去ろうとする。

「零余子さん!」

「なに?」

炭治郎に呼ばれた零余子は炭治郎の方を向く。

「ありがとう。この情報はみんなに伝えるよ」

炭治郎は零余子に向かって微笑みながら言った。

「べっ…、別にあなたのためにしたんじや無いんだから! 猗窩座お兄様のために仕方なくしただけなんだから!」

零余子は顔を赤くしながらそっぽを向いた。

「そ…、それじゃあね! 精々上弦の鬼に喰い殺されないようにしなさいよー!」

零余子はそれだけ言って今度こそ去った。

…

……

……

零余子からもたらされた情報は炭治郎の鴉を通して耀哉に伝えられた。そして耀哉は緊急柱合会議を開くことにした。

そして柱全員の任務が終わった時を見計らい、柱合会議が開始された。

「おはよう皆。急に呼び出してすまなかった。今日は皆に伝えなくてはいけないことがあったから呼んだんだ」

耀哉は呼び出した柱に会議の内容を伝えようとする。

「お館様、その伝えたいことは？」

柱の中で最年長の行冥が質問をする。

「それは”彼”から聞いてほしい。お願いするね」

「御意」

耀哉に呼ばれて現れたのは炭治郎だった。

「それでは竈門炭治郎から柱の皆様にお伝え致します。まず断つておきますが、この情報は”とある鬼”から頂いた情報であり、真実であることをお伝えします」

「まず無惨は太陽を克服しようと目論み、そのために太陽を克服した鬼を作ろうとしています。そして十二鬼月の上弦にのみ”ある任務”を与えています」

「”ある任務”…ですか？」

しのぶが疑問に思ったことを口にする。

「はい。それは『青い彼岸花』の搜索です。無惨は太陽を克服した鬼、若しくはその『青い彼岸花』を取り込むことで太陽を克服しようと考えているのでしょうか」

炭治郎は零余子が予想していることを柱に伝えた。しかし

「信じない信じない。そもそも鬼が与えた情報が真実かどうかも怪しい」ネチネチ

「私もその信憑性に疑問を感じる…」

「俺も派手に信じないぜ。そもそも、一体どんな鬼がその情報を伝えたんだ？」

小芭内、行冥、天元の三名がその情報を否定した。

「俺は信じるが、竈門少年よ、その情報は誰から貰ったのだ？」

義勇、実弥、しのぶは杏寿郎の疑問に頷いた。

「この情報は、『元』十二月鬼月、下弦の肆である零余子と言う少女の鬼から頂きました。そして彼女は『猗窩座の使者』と言っていました」

炭治郎は誰からの情報なのかを明かすと

「よもや！猗窩座殿からなのか!?!」

杏寿郎は相当驚いたのか、思わず立ち上がってしまった。

「煉獄、炭治郎、その”猗窩座”と言う者は何者だ？」

猗窩座のことについて義勇が質問をする。

「猗窩座さんは十二鬼月の上弦の参の数字を持った鬼ですが、彼は”前世の記憶”と言うものを持っており、俺たち鬼殺隊に協力を申し出た鬼でもあります」

炭治郎は猗窩座のことについて説明をする。しかし小芭内、行冥、天元の三名は相変わらず信じてはいなかった。

「竈門少年の言っていることは本当だ！実際に彼と戦った俺がそれを証明する！」

「炭治郎君は嘘をつくのが苦手ですからね。言っていることは真実でしょう」

「俺は炭治郎の言っていることを信じる」

「俺も義勇に同意だア」

しかし杏寿郎、しのぶ、義勇、実弥の四名が炭治郎の言っていることを信じると言った。

「ありがとうございます。それから十二鬼月のことですが、猗窩座さんの情報によると、下弦の鬼は解体され、今は上弦しかないとされています」

「上弦の鬼に関してはその似顔絵と呼び名、それから潜伏先がこの紙に記されています。今から皆様にお配りしますので、見終わったら隣

の方に渡してください」

「南無…、竈門炭治郎よ。私は盲目のため、似顔絵を見ることはできない。だから私の番の時は隠の者にどんな容姿か言ってもらっても良いか？」

行冥が目が見えないことを伝えたと炭治郎は了承し、行冥の側に隠の者が控えた。

そして義勇を先頭に実弥↓小芭内↓蜜璃↓無一郎↓杏寿郎↓天元↓しのぶ↓行冥の順番に書類が回った。

「!?、こいつは…!」

とある似顔絵を見たしのぶは顔を怒りの色に染める。

「しのぶ、どうした!?」

しのぶの声を聞いた義勇がしのぶの側に駆け寄る。

「コイツは…、姉さんを死に追いやった鬼…!」

しのぶが見ていたのは、『上弦の弑』の似顔絵だった。

「!?、コイツがア…!!」

「カナエさんを…、殺した鬼…!」

しのぶの呟きを聞いた義勇と実弥はもう一度似顔絵を見た。その顔はしのぶ同様、怒りに染まっていた。

「何々…？」上弦の式・童磨^{どうま}？」

「うわあ…、顔は笑っているけど、何か作り物の笑顔みたい…」

天元と蜜璃も童磨の似顔絵を再び見て、各々の感想を言った。

「潜伏先ですが、今皆さんが見ている鬼と、上弦の陸しか分からなかったそうです」

炭治郎が潜伏先が分かった鬼のことを言うと、しのぶが炭治郎の襟首を掴んだ。その力はその細身からは考えられないほどで、炭治郎は息が出来なくなってしまう程だった。

「言って！炭治郎君、この鬼がいる場所を教えて!!」

「落ち着けしのぶ！喉が締まって炭治郎が呼吸が出来なくなっているぞ！」

「しのぶ、一旦その手を退けろオ！」

義勇と実弥がしのぶを何とか落ち着かせ、咳き込む炭治郎の背中を
実弥が擦った。

「炭治郎オ、大丈夫かア？」

「ゲホツ、ゲホツ。ありがとうございます、”実弥師範”」

無限列車の任務の後、義勇と実弥は任務の合間を縫って炭治郎のお見舞いに来ていたのだ。その時、二人から『これからは”師範”と呼んでほしい』と言われ、義勇のことを『義勇師範』、実弥のことを『実弥師範』と呼ぶようになったのだ。

「ごめんなさい炭治郎君。感情を制御できないなんて、柱として不甲斐ないです」

しのぶは興奮が冷め、炭治郎に土下座して謝った。

「しのぶさん、俺は大丈夫ですから、頭を上げてください」

炭治郎はしのぶを許し、しのぶは頭を上げた。

「その鬼は万世極楽教ばんせいごくらくきょうと言う宗教の教祖らしく、いつもはその宗教の総本山にいるそうです。それから、上弦の陸の潜伏先は吉原遊郭よしわらゆうかくと言う場所らしくて、普段は花魁お花魁をしているそうです」

「何だと!？」

炭治郎が言った情報に、今度は天元が驚いた。

「宇随さん、どうしたんですか?そんなに驚いたりして」

天元が驚いたことに蜜璃が疑問に思った。

「遊郭って言ったたら、俺の”嫁たち”が調べている所じゃねえか!!」

『何だって!?!』

天元が言ったことに耀哉を除く全員が驚いた。

「どうしますか?今から手紙を書いて戻ってもらいますか?」

しのぶが天元に提案をする。

「いや、今戻ると鬼に怪しまれる。俺が何とかする」

天元は鬼に怪しまれないように現状を維持することを決めた。

第10話

緊急柱合会議から更に一ヶ月後、炭治郎は任務に勤しんでいた。

その間、珠世から手紙が届いていた。

内容は猗窩座の妹分である零余子が珠世の所で働いていると言ったものだ。

零余子は愈史郎に代わり家事を担当しているらしく、掃除や洗濯、患者の食事作りをやっており、愈史郎は珠世の助手としての仕事に専念できて喜んでいたと書かれていた。

更には猗窩座の動向も書かれており、珠世の診療所を拠点に、他の上弦の鬼の居場所を探るため、旅をしているとのことだった。

しかも二人は珠世にお願いして珠世や愈史郎同様、血を少量飲むだけで満腹になるように体を弄くつたらしい。それだけでは無く、珠世に治療の手解きをも受けているとのことだった。

猗窩座に関しては毒について学んでおり、当人曰く

「俺が毒を知ることでは治療をすれば、恋雪こゆきや親父のような犠牲者を救うことができるかもしれない」

とのことだった。

それを聞いた珠世は感銘を受け、お互いの時間が取れる日には付きつきりで教えていたそうなの。

因みにその手紙をしのぶに見せると

「姉の夢を叶える鬼ひとが増えて、良かったです」

と涙ぐんでいた。それからは、珠世宛ての手紙に二人の力になればと思ひ、しのぶからの知識を書き込み、それを讀んだ二人は更に医学に励んでいた。

そしてこの日は炭治郎が単独任務を終えて蝶屋敷へと戻っている最中だった。炭治郎が蝶屋敷の門前に差し掛かる所で、何やら騒がしい声が聞こえたので、疲れている体に鞭を入れ、走り出した。そして炭治郎が目にしたのは

「放してください！私っ…、この子はっ…」

「うるせえな、黙っとけ」

天元がアオイを俵担ぎをし、なほを脇に抱えている光景だった。

「カツ、カナヲ！」

アオイはカナヲに助けを求めするように手を伸ばす。カナヲはコインでアオイたちを助けようか決めようとするが

『心のままに』

炭治郎がかつて自分に言ってくれた言葉を思い出した。そしてカナヲはアオイの手となほの服を掴まえた。

「地味に引つ張るんじゃないよ。お前は先刻指令がきてるだろうが」

天元がカナヲに手を放すように言うが、カナヲは手を放さなかった。

「何とか言えつての!!地味な奴だな!!」

痺れを切らせた天元が大声を出しながら歩く。だがカナヲは掴んだ手を放さず、引き摺られていた。それを見たすみときよも、天元に突撃し、足や頭に取り付いた。

「女の子に何をしているんだ!手を放せ!!」

そこに炭治郎が到着した。しかし炭治郎はアオイとなほを担ぎ、カナヲたちにしがみつかれている天元を見て、呆けてしまった。

「炭治郎さん、この人、人拐いです!助けてください!」

すみは炭治郎に助けを求めた。炭治郎は天元に頭突きをしようとするが、天元は回避した。その時にきよはカナヲが、すみは炭治郎が庇い、二人は怪我を負わずに済んだ。

「愚か者、俺は”元忍”の宇随天元様だぞ。その界限では派手に名を馳せた男、てめえの鼻糞みたいな頭突きを喰らうと思うか」

天元は門の屋根の上に逃げ、自分のことを話した。

「宇随天元ってあの”幼女好きの人拐い変態地味柱”の宇随天元さん?」

「ちよつと派手に待ちやがれ!!誰が”幼女好き”だ!?誰が”人拐いだ!?誰が”変態”だ!?誰が”地味”だ!?言ってみろ!」

「「「あなた」」」 ビシッ

「どはあ!？」

天元は炭治郎たちに質問をすると、炭治郎、カナヲ、すみ、きよの四人が天元を指差し、天元は屋根の上からずっこけた。

その拍子にアオイとなほを手放してしまい、二人を炭治郎が自分の体をクツションにして救出した。その時に偶然にも、炭治郎はなほとキスをしてしまっていた。

「俺は”ド派手な音柱”だ!!”幼女好き”でも”人拐い”でも”変態”でも”地味”でもねえ!!」

「「「事実でしょう?」」」」ズバツ

炭治郎、カナヲ、すみ、きよに加え、アオイとなほまでもが天元を罵倒した。その口撃を受けた天元は

「ちくしょう…、俺は幼女好きでも、人拐いでも、変態でも、地味でもねえのに…」

その場に蹲り、”の”の字を書いてしまった。

…

…

…

「粗茶です、どうぞ」ドンッ

「あつ…、ああ…、すまねえ」

その後炭治郎たちは蝶屋敷に入り、天元の事情聴取を始めることにした。未遂に終わったが、誘拐されかけたアオイはまだ怒っており、湯飲みを天元の前でわざと音を立てて置いた。

天元は申し訳無さそうにお礼を言っただけで湯飲みの中にあるお茶を飲んだ。

ズズツ「ブハア!?!、ド派手に” 苦い ” じゃねえか!?!」

アオイが天元に出したお茶は機能回復訓練で使用している薬湯だった。

「それで宇随さん、あなたは何故アオイさんたちを誘拐しようとしたんですか?」

炭治郎はアオイから受け取った” 玉露 ” を一口飲み、天元に事情の説明促す。

因みにカナヲは任務に出ていった。カナヲはアオイとなほのことが気になって任務を放棄しようとしていたが、炭治郎がそれを止めさせた。そしてカナヲはアオイとなほをそれぞれ抱き締めてから出立した。

「ゲホツ、ゲホツ。お前は上弦の陸が遊郭に潜んでいること、俺の嫁たちが調べていることを知ってるだろ? 実はここ数日、その嫁たちからの連絡が途絶えていてな。それで潜入してもらったために女性の隊員が必要だったんだよ」

天元はアオイたちを誘拐しようとした経緯を話した。

「それで継子では無い隊員だったら、胡蝶の許しをもらわなくていいかなあ…と思ったんだが…」

天元はちらりとアオイとなほを覗き見る。アオイとなほは即座に炭治郎の背中へと退避し、炭治郎は頭を抱えた。

「宇随さん、なほちゃん、きよちゃん、すみちゃんの三人は隊員ではありません。その証拠に、隊服を着てはいないじゃないですか。それにアオイさんは鬼に対してトラウマを抱えている上に、蝶屋敷の”要”なんですよ？」ズバツ

「そういったことをちゃんと確認されましたか？四人の内、一人でも欠けたら蝶屋敷は機能しないですよ？それすらも分からないのですか？ああそっか、分からないから先程の暴拳をしたんですね」ズバツ

「そんなんだから」幼女好きの人拐い変態地味柱”なんて呼ばれるんですよ」ズバツ

炭治郎は天元の行動にズバズバと口撃をする。アオイたちは炭治郎に同意するかのように頷いた。

「そんな呼び方をするのはお前らが初めてだからな!?それに何度も言うが俺は”幼女好き”でも”人拐い”でも”変態”でも”地味”でもねえ!見ろ、このド派手な姿を!」

天元は立ち上がってポーズを取りながら自分の姿を見せた。

「この姿、正に神に等しい!そう、俺は派手を司る”祭りの神”、音柱

の宇随天元だ！」

天元はビシッとポーズを決める。しかしアオイたちは冷めた目で天元を見ており、炭治郎に至っては

「すみません。何を言っているのか、わかりません」

と口にしていた。

「お前ら…、俺への当たり、冗談抜きでキツくないか？」

天元は若干涙目で炭治郎たちに質問をする。

「」「幼女好きの人拐い変態地味柱のあなたにはこれで丁度良いくらいです」「」

炭治郎たちの息がピツタリ合った言葉に、天元は真つ白に燃え尽きてしまった。

…

……

……

その後、天元は炭治郎に土下座しながら協力をお願いし、炭治郎はそれを仕方なく承諾。同時に任務から戻って来た善逸と伊之助にも協力をお願いし、四人は蝶屋敷を出立、遊郭へと向かった。

その途中、天元たちは藤の花の家紋の家に寄り、準備を整えがてら、作戦会議を開いた。

「遊郭に潜入したら、まず俺の嫁たちと接触しろ。俺は遊郭の屋敷の外から鬼を探す」

天元の作戦に善逸が待ったを掛けた。因みに炭治郎は出された茶を啜り、伊之助はお茶請けのお菓子を貪っていた。

「ちよつと待った！嫁たちって、あんた、嫁何人いるんだよ!？」

「ああ言つて無かったな。俺は嫁が三人いる」

「その方々はみんな俺たちより”幼い”ですか？」

炭治郎が天元の嫁の年齢を聞く。

「お前、まだそれを引き摺っているのか…。歳は俺と差程変わらん」

天元が呆れ気味に炭治郎の質問に答えた。善逸が炭治郎の質問に疑問を浮かべていると

「宇随さんは”幼女好き”で、”変態”で、”地味”な”人拐い”だから」

炭治郎が善逸の疑問に答えると、善逸は汚物を見るような目をして天元から遠ざかった。

「もういい加減にしろよ…。とりあえず怪しい店は既に絞つてある。まず”ときと屋”、次に”萩本屋”、最後に”京極屋”の三件だ。ときと屋には”須磨”、萩本屋には”まきを”、京極屋には”雛鶴”が潜入している」

天元は炭治郎のデイスリを無視することを決めた。そして怪しい店の店名と潜入している嫁の名前を伝えた。その後藤の花の家紋の家の者が天元に言われた物を持って入室し、遊郭へ潜入するための準備が始まった。

…

…

…

吉原よしわら 遊郭ゆうかく

男と女の見栄と欲、愛憎渦巻く夜の街。

遊郭・花街はその名の通り一つの区画で街を形成している。

ここに暮らす遊女たちは貧しさや借金などで売られてきた者が殆んどで、たくさんの苦勞を背負っているが、その代わり衣食住は確保され、遊女として出世できれば裕福な家に身請けされることもあった。

中でも遊女の最高位である”花魁”は別格であり、美貌・教養・芸事全てを身につけている特別な女性。

位の高い花魁には簡単に会うことすらできないので、逢瀬を果たすため男たちは競うように足繁く花街に通うのである。

ここは『ときと屋』。そこには三人の”少女”と一人の”男性”がいた。

「こりやまた…、随分と不細工な子たちだねえ…」

ときと屋の主人と奥さんの前には、女装させられた炭治郎たちがいた。しかし、その顔は相当酷く、まるで『初めて化粧をした子供』のような化粧だった。

三人を見ていたときと屋の主人は、四人に帰ってもらおうとするが、奥さんが頬を染めて『まあ一人くらいならいいけど』と言った。

「じゃあ一人頼むわ。悪イな奥さん」

無事に少女を売ることができた男性・天元が奥さんに礼を言った。因みに天元は今、化粧を落とし、素顔の状態を晒していた。その素顔は、誰もが見惚れる美形だった。

そしてときと屋の奥さんは真ん中の少女・炭子（炭治郎）を選び、残った三人はときと屋を後にした。

「ほんとにダメだなお前らは。二束三文でしか売れねえじゃねえか」

天元は猪子（伊之助）と善子（善逸）に向かって愚痴を溢す。善逸は『アンタとは口利かない』と言っていた。その理由が天元の素顔にあった。化粧を落とした天元の素顔は美形で、善逸はそれに嫉妬していたのだった。

「オイ！なんかあの辺人間がウジヤコラ集まってんぞ！」

伊之助が指差した所を見ると、確かに人混みができていた。

「あゝ、ありや花魁道中おいらんどうちゆうだな」

天元が人混みの理由を察した。

「あれは確か…、ときと屋の鯉夏花魁だ」

そこには左右を男女に囲まれた花魁が歩いていた。

「一番位の高い遊女が客を迎えに行ってるんだよ。それにしても派手だぜ、いくらかかってんだ？」

天元は以前潜入した時に入手した“番付”を見ながら伊之助に説明をする。その時に善逸が鯉夏花魁のことを“天元の嫁”と勘違いをして、血の涙を流しながら天元に迫った。しかし天元は持っていた番付を善逸に見せながら善逸を殴った。

「歩くの遅っ。山の中にいたらすぐ殺されるぜ」

伊之助は耳をほじりながら感想を述べる。しかし、その伊之助を凝視している女性が伊之助の側にいた。

「ちよいと旦那。この子うちで引き取らせて貰うよ、いいかい？」

伊之助を凝視していた女性は天元に声をかける。

「荻本屋の遣手…、アタシの目に狂いはないのさ」

女性は目を狐のように鋭くし、笑っていた。

「荻本屋さん！そりやありがたい！」

天元は渡りに船と言った感じで伊之助を売った。

「達者でな猪子く」

天元は荻本屋の女性に連れられる伊之助に手を振る。そして残った善逸を一瞥する。

「(ヤダ！アタイだけ余ってる!?)」

善逸は何故か女言葉を使っていた……。

第11話

ここは『荻本屋』。そこには猪子こと伊之助と、伊之助を買った女性がいた。

「どうよこれ!!」

女性は伊之助に施された化粧を落とし、伊之助は素顔を露にする。それを見ていたもう一人の女性が伊之助の素顔に驚いていた。

「変な風に顔を塗ったくらいでいたけど、落としたらこうよ!!すごい得したわこんな美形の子安く買えて!!」

「仕込むわよオ!仕込むわよオ!京極屋の”蕨わらび姫” やときと屋の”恋夏” よりも売れっ子にするわよオ!」

伊之助を買った女性は早速伊之助に芸事を仕込むために伊之助と一緒に移動した。その途中、もう一人の女性が伊之助の体格に疑問を持っていた。

…

…

…

ここは『京極屋』。そこでは芸事の一つである三味線の稽古をしていた。その中には善子こと善逸がいた。

「あ…、あの子三味線うまいわね」

「そうね…、すごい迫力…」

「最近入った子？」

「耳がいいみたいよ？一回聞いたら三味線でも琴でも弾けるらしいわ…」

善逸の稽古を見ていた女性たちが善逸のことを次々に話していた。

「アタイにはわかるよ。あの子はのし上がるわね」

そこに煙管キセル（昔の煙草タバコ）を持った女性が現れた。

「自分を捨てた男を見返してやろうっていう気概を感じる。そういう子は強いわよ」

善逸は京極屋に入る時のやり取りを思い出していた。

『便所掃除でも貰って下さいよオ。いつそタダでもいいんでこんなのは』ベシベシ

天元は善逸の頭を叩きながら笑顔で善逸を捨てた。

「（見返してやるあの男…！アタイ絶対吉原一の花魁になる!!）」

（男のお前がなれるわけねーだろ。目的を見誤るんじゃねえよ。そんなんだからモテねえんだよ） by 作者

「誰よアタイの悪口を言ったのは〜!？」

……善逸の耳は天の声までも聞き取れるようだ（汗）

…

……

……

「炭子ちゃん、ちよつとあれ運んでくれる？人手が足りないみたいで」

「ここは炭治郎が潜入している『ときと屋』。その一室で服を畳んでいた炭治郎に女性が手伝いをお願いした。

「わかりました！鯉夏花魁の部屋ですね。すぐ運びます」

炭治郎は恋夏宛ての荷物を一篇に持ち、鯉夏の部屋へと向かった。

因みに炭治郎の化粧は白粉おしろいのみ落とされていた。白粉を落としたのは炭治郎を買った女将であり、白粉を落とした当初は烈火の如く怒った。

女将は炭治郎を捨てようとしていたが、炭治郎が頼み込み、『人前に出ないこと』を条件に炭治郎を働かせることを決めた。

荷物を持った炭治郎は鯉夏の部屋に到着すると、その部屋で内緒話をしている少女の話を立ち聞きしてしまった。

炭治郎は興味を持ち、話していた内容について質問をしながら荷物を部屋に置いた。

そこで”須磨”の名前を聞き、須磨がどうしたのか質問をしようとする

「噂話はよしなきい。本当に逃げ切れたかどうかなんて…、誰にもわからないのよ」

鯉夏が入室し、内緒話しを咎めた。そして炭治郎を呼び寄せ、荷物を運んでくれたお礼にと、お菓子を与えた。

炭治郎が鯉夏に須磨のことを質問すると、逆に鯉夏から須磨とどういう関係なのか質問された。

「ええと…須磨花魁は、私の…、私の…、姉なんです」

炭治郎は鯉夏の質問に答えた。が、その顔は酷く歪んで不細工面になっていた。

炭治郎は真面目な性格のため、嘘をつく時は罪悪感のせいで不細工面になってしまうのだ。

普通なら不細工面こになった者を信じる者はまずいない。しかし鯉夏は炭治郎を信じて須磨に関する話を話したのだった。

…

…

…

一方『幼女好きの人拐い変態地味柱』こと天元は、いつもの『自分が派手だと思っっている』格好になって、屋根の上から遊郭を監視して

いた。

「(今日も異常無し…か。やはり竈門が言っていた鬼の情報通り、遊郭この街に潜んでいるのは上弦の鬼のようだな。となると、これはド派手な殺り合いになるかもな)」

「(後、何か不名誉な呼ばれ方をされた気がする…)」

…

……

……

一方伊之助は身を潜めながらまきをの情報を探っていた。そしてまきが病気で部屋に閉じ籠っていることを聞き当てた。そして伊之助はまきがいると思われる部屋に向かうのだった。

「(…暑い！脱ぎたいぜ脱ぎたいぜ!!こんな服モ着てたら感覚が鈍って仕方ねえ!!)」

伊之助は服を脱ぎたがっていたが、我慢していた。

『お前は声が太いから絶対喋るなよ？裏声も下っ手くそだからすぐ男だつてバレるぞマジで』

『建物の中で暮らす』、『着物を着る』などの生活は伊之助にとって拷問に近かった。何故なら、伊之助は山の中で育ったため、『着物を着る』や『建物の中で暮らす』と言った人間にとって”当たり前”のことは理解できなかったのだ。

『着物は最低限』、『建物は洞窟等の雨風が凌げる場所』といった感じで伊之助は解釈していたのだった。

…

…

…

「さあさ、答えてごらん？お前は誰にこの手紙を出していたの？何だったかお前の名は？ああそうだ、”まきを”だ。答えるんだよ”まきを”！」

伊之助が探していたまきは、自室で”帯”に捕らわれていた。しかも部屋の壁には傷があり、布団や食器はボロボロになっており、まきを自身も切り傷を負っていた。

「(情報を…：…伝えなくては。他の二人とも連絡が取れなくなってる。何とか外へ…。早く…、あの人の所へ…：…、天元様…：…)」

まきは今の状況を打破するための策を考えていたが、急に帯の締め付けがキツくなり、まきをの体が宙に浮いた。

丁度その時、伊之助はまきをの部屋のすぐ近くまで来ていた。

「(妙だな、妙な感じだ。今はまずい状況なのか？わからねえ…。あの部屋…まきをの部屋、ぬめつとした気持ち悪い感じはするが…：…)」

伊之助はまきをの部屋を見ていた。そして若干弱くなっただけはいるが、持ち前の感覚で部屋の空気を読み取る。そして意を決してまきをの部屋まで一気に走り出した。

そして襖を開けると、まきをは部屋にはいなかった。だが、開けた途端、風が吹いているのを伊之助は感じ取った。

「(風…？窓も開いてないのに)」

伊之助は風が吹いている所を考えると

「(天井裏!!やっぱり鬼だ！今は昼間だから上に逃げたな！)」

鬼が天井裏に逃げたことを悟った。そしてまきをのたために作られたうどんの井を掴むと

「おいコラ、バレてんぞ!!」

天井目掛けて思い切り投げた。当然井は割れた。すると天井から”何か”が移動する音がした。

「逃がさねえぞ!!」

逃げ出した鬼を伊之助は追いかけた。

「(どこに行く!?どこに逃げる!?天井から壁を伝って移動するか?よしその瞬間に壁をブン殴って引きずり出す!)」

そして伊之助は壁の一点を見つめる。

「(ここだ!)」

伊之助は鬼を引きずり出すために壁を殴ろうとした。

「おおっ！可愛いのがいるじゃないか！」

しかしその直前に男性が部屋から顔を覗かせてしまった。そして伊之助は壁では無く男性の顔を殴ってしまった。

「(クソツ、しくじった！下に逃げてる!!)」

伊之助は逃げた鬼を気配を頼りに追いかけるが、とうとう見失ってしまった。

…

…

…

視線を京極屋に戻そう。

「(なんか俺、自分を見失ってた…。ここには宇随さんの奥さんの雛鶴さんを探すんだったよ、三味線や琴の腕上げてもどうしようもないだろうよ)」

善逸は歩きながら京極屋に潜入した目的を思い出していた。

(やっと思い出したか非モテ男。早く雛鶴さんの情報を探れよタンポポ頭) by 作者

「(何か悪口言われた気がする…。とりあえず集中して聞いてみるか)」

善逸は耳に手を添えて声を集中して聞いた。

『アレとってアレ!』

『帯が無いのよ』

『もうおなかすいたわ』

『髪結いさん来た?』

『早くしなよ!』

『ひつく…、ひつく…、ぐすん』

「(ひつくひつくぐすん!) 一大事だ、女の子が泣いてる」

女の子の泣き声を聞き取った善逸は直ぐ様その声の主がいる所へ向かった。

そして到着した所は部屋の一室で、その中はめちやくちやだった。善逸は部屋の中で泣いている少女に声をかけると振り向いた少女の顔には痣があった。

少女の顔についた痣を見た善逸は思わず大声を出してしまった。そして少女が更に泣いてしまい、慰めていると

「アンタ、人の部屋で何してんの?」

京極屋の花魁の一人『蕨姫花魁』が現れた。

しかし善逸は今自分の後ろにいる花魁が”鬼”であることを聞き破っていた。

善逸曰く

「鬼の音は人の音とは全く違うから」

とのことだった。

「オイ、耳が聞こえないのかい」

「わ…、蕨姫花魁。その人は一昨日入ったばかりだから…」

善逸のことを他の少女たちがが怯えながら蕨姫に教えるが

「はあ？ だったら何なの？」

蕨姫は一瞥し、少女たちを更に怯えさせた。

「勝手に入ってすみません！ 部屋がめちゃくちゃだったし、あの子が泣いていたので…」

そこに善逸が勝手に入室したことを謝るが、善逸の顔を見た蕨姫は罵詈雑言を善逸に浴びせる。そして泣いていた少女の側まで来ると

ギョツ 「ギャアツ」

少女の耳を思い切り引っ張った。蕨姫は五月蠅くした少女に更に怒る。引っ張る力が強いせいなのか、少女の耳の付け根から出血し、今にも耳が千切れそうになっていた。

ガシツ 「手…、放してください…！」

しかしそれを善逸が蕨姫の手首を掴んで止めさせた。

「気安く触るんじゃないよ、のぼせ腐りやがってこのガキが。躰が要るようだねお前は、きつい躰が」

だが蕨姫は善逸を向かいの部屋まで殴り飛ばした。

「蕨姫花魁……！」

そこに京極屋の旦那が現れ、蕨姫に土下座した。

「この通りだ頼む！もうすぐ店の時間だ、客が来る……！俺がきつく叱っておくからどうか今は……、俺の顔を立ててくれ……！」

それを見た蕨姫は

「旦那さん、顔を上げておくれ。私の方こそご免なさいね。最近ちよつと癩に触ることが多くって」

「入って来たばかりの子につらく当たり過ぎたね。手当てしてやって頂戴」

そう言つて笑つた。

それから旦那は店にいる者総動員で蕨姫の部屋を片付けさせた。

「（あのガキ、この感触からすると軽症だね。失神はしているけれども、受け身を取りやがった。一般人じゃない。鬼殺隊なんだろう、でも柱のような実力は無い）ククツ、フフツ。少し時間がかかったけど、上手く釣れて来たわね。どんどんいらっしやい、皆殺して喰つてあげる」

蕨姫は化粧を施しながら笑っていた……。

第12話

京極屋にいた蕨姫花魁の正体は『十二鬼月・上弦の陸、墮姫』だった。しかも墮姫の中には彼女の”兄”でもある『十二鬼月・上弦の陸、妓夫太郎』が潜んでいた。

墮姫は帯で、妓夫太郎は鎌で攻撃を繰り返す。しかも妓夫太郎の鎌には自分の血で生成した”毒”が塗られており、彼はその毒を斬撃として飛ばすこともできるのだった。

しかも兄妹だからなのか、”互いの視覚”までも共有できる始末で、炭治郎たちは苦戦を強いられていた。

因みに天元の妻である”須磨”と”まきを”は墮姫の帯に取り込まれていたが、伊之助が帯を斬つて救出、雛鶴も切見世きりみせと呼ばれる病気の遊女が住む所で天元に助けられた。

そして天元たちの下に雛鶴が弓状の絡繰を持って屋根の上に現れ、妓夫太郎に向けて天元諸ともクナイを発射した。

『血鬼術 跋弧跳梁』

しかし妓夫太郎は斬撃を自分の周りにドーム状に展開し、自分に迫るクナイの殆んどを弾いた。そこに天元がドーム状の斬撃の隙間から現れた。

妓夫太郎は天元の首目掛けて鎌を振るうが、当たる寸前で天元が屈み、そのまま足を斬った。それと同時に妓夫太郎の頸にクナイが刺さる。妓夫太郎は足を再生させようとするとするが、クナイに塗られた『藤の花で生成した痺れ毒』で再生出来ずにいた。

そこに炭治郎が妓夫太郎の頸を狙って刀を振るおうとしていたが、妓夫太郎は毒を分解し片足だけ再生させた。

『血鬼術 円斬旋回・飛び血鎌』

そして妓夫太郎は腕の血管を破裂させ、腕を”振らず”に毒の斬撃を繰り出した。

天元は炭治郎を助けるために彼を後ろに蹴り飛ばすと

『音の呼吸 肆ノ型 響斬無間』

次々に斬撃を斬った。そして斬撃が止むと、そこには妓夫太郎がいなかった”。天元は妓夫太郎を見失うが、すぐに何処へ向かったのか悟った。

妓夫太郎は雛鶴を殺すために彼女の下へ向かったのだ。

天元は雛鶴をその場から遠ざけるために彼女の下へ向かおうとするが、墮姫の帯がそれを邪魔する。そして妓夫太郎は雛鶴の顔を掴み、そのまま握り潰そうとする。

しかし妓夫太郎の目論見は達成できなかった。

何故なら、炭治郎が妓夫太郎の腕を斬ったからだった。

「(そうか…、呼吸を混ぜれば体の負担を抑えることができるんだ！移動の時は水の呼吸を、攻撃の時には風の呼吸を混ぜればヒノカミ神楽だけの時より速く動けるし、攻撃力も上がる！)」

「(全集中の呼吸はそうやって枝分かれしていったんだ！自分の体に合った呼吸を見つげるために！)」

「(煉獄さんのお父さん、全ての呼吸は決して猿真似何かじゃありませんでした！炎も、水も、風も！全てが自分自身で編み出した自分だけの呼吸だったんです！)」

炭治郎は妓夫太郎の攻撃を防ぎながら禎寿郎に投げ掛けるように心の中で語った。

「竈門炭治郎！お前に感謝する！」

すると天元が妓夫太郎の後ろから頸を狙って刀を振るっていた。

炭治郎も負けじと妓夫太郎の頸目掛けて刀を振るった。しかし妓夫太郎は両手に持った鎌で刀を受け止めていた。

天元が”もう一本”の刀で妓夫太郎の頸を狙うが、妓夫太郎は何と頸を百八十度”回転”させて口で刀を受け止めてしまった。

そして妓夫太郎は円斬旋回を使うために再び血管を破裂させた。しかし天元はそれを察知し、妓夫太郎諸とも屋根から”飛び降りた”。

しかも炭治郎の下に墮姫と戦っていた善逸と伊之助が帯を避けながら迫っていた。

「作戦変更を余儀なくされてるぜ!!蚯蚓女に全っ然近づけねえ!!こっちは三人で、螭螂鬼はオッサンに頑張ってもらおうしかねえ!!」

「幸いにも鎌の男よりもまだこちらの方が弱い。まずこっちの頸を斬

ろう！炭治郎、まだ動けるか!？」

伊之助と善逸の質問に炭治郎は天元の方を覗き見る。天元は妓夫太郎と一進一退の攻防を地上で繰り広げていた。

「動ける!!ただ宇随さんは敵の毒にやられているから危険な状態だ！一刻も早く決着をつけなければ…」

炭治郎は帯をいなしながら質問に答えた。だが、妓夫太郎の斬撃がこちらまで届いていたので慌てて対処した。

「私のことも気にしないで！身を隠すから！勝つことだけ考えて！」

雛鶴は即座にその場から退き、身を隠すために離れた。

「この鬼の頸は柔らかすぎで斬れない!!相当な速度かあるいは複数の方向から斬らなくちゃ駄目だ!!」

炭治郎が二人にアドバイスをする。その理由は善逸が三人の中で最速であり、伊之助が三人の中で複数の方向から攻撃できるからだつた。

「複数の方向なら二刀流の俺様に任せとけコラア！三人なら勝てるぜエエエイ!!」

墮姫の頸を斬る役目は伊之助に決まった。

「わかった！善逸、伊之助を守ろう！」

「よしー。」

炭治郎と善逸は伊之助のサポートに回ることにした。

『獣の呼吸 捌ノ型 爆裂猛進』

伊之助が帯に向かって突進する。

『水の呼吸 参ノ型 流流舞い』

『雷の呼吸 壹ノ型 霹靂一閃・八連』

そして炭治郎と善逸が帯を斬り、伊之助が通る道を広げる。

墮姫は当然の如く近づけさせまいと帯で攻撃するが、伊之助はお構い無しに直進する。そして伊之助の刀が墮姫に届く。

「今度こそ決めるぜ！陸ノ牙！」

「（無駄よ！そんなガタガタの刃で斬れる訳が無い！）」

墮姫は自分の頸が斬られるとは思ってはいなかった。しかし伊之助は刀を引きながら振るい

『乱杭咬み』

墮姫の頸を斬った。墮姫は自分の頸が斬られたことに驚いていた。

「やった伊之助!!（すごい！ノコギリのように刀を振るって斬った！）」

そして伊之助は墮姫の頸を持って再生されないように遠くへ逃げる。その途中で墮姫が髪で攻撃をするが、伊之助はそれを悉く斬る。

しかし伊之助を妓夫太郎が後ろから鎌で刺した。しかも刺した位置は伊之助の心臓がある所だった。

『天元と戦っていた妓夫太郎がなぜそこにいるのか？』炭治郎が疑問に思いふと下を見ると、そこには血まみれの天元が横たわっていた。

そこに墮姫の帯が襲い掛かり、家屋が崩壊し、炭治郎と善逸はその崩壊に巻き込まれてしまった。

…

…

…

炭治郎は家屋の瓦礫の近くで目を覚ました。どうやら家屋が崩壊した際に頭を打って気絶していたらしい。その証拠に、頭部から出血していた。

「何だお前、まだ生きてんのか。運のいい奴だなあ」

そこに妓夫太郎が現れ、炭治郎を見下ろしていた。

「まあ、運がいい以外取り柄がねえんだらうなああ」

「可哀想になあ、お前以外の奴は皆もう駄目だらうしなああ」

「猪は心臓を一突き、黄色い頭は瓦礫に押し潰されて苦しんでいるから、死ぬまで放置するぜ。虫みたいにモゾモゾしてみつともねえよなああ」

「柱も弱かったなあ。威勢がいいだけで、毒にやられて心臓も止まって死んじまった。お陀仏だ」

妓夫太郎は炭治郎を見下ろしながら炭治郎の仲間の状態を話した。

「みつともねえなあ、みつともねえなあ。お前ら本当にみつともねえなあ。特にお前は格別だ。お前の背負っている箱からはみ出しているのは血縁だな？わかるぜ、鬼になつても血が近いのは。そりやあ姉か？妹か？」

炭治郎はなぜ自分に止めを刺さずに話をしている妓夫太郎の行動がわからなかった。

「……妹だ」

「ひひひっ!!そうか、やつぱりそうか!みつともねえなあ、お前全然妹守れてねえじゃねえか!」

妓夫太郎の『妹を守れてない』という言葉に炭治郎は凶星を点かれてしまった。

「まあ仕方ねえ。お前は人間で妹は鬼だ。鬼の妹よりも弱いのは当然だが、それにしてもみつともねえ!」

「兄貴だったら妹に”守られる”んじやなく、”守って”やれよなあこの手で」

妓夫太郎は炭治郎の指を掴むと、そのまま力を込めて指をへし折った。指をへし折られた炭治郎はその痛みに耐えるしか無かった。

「なあオイ、今どんな気持ちだ？一人だけみつともなく生き残って。頼みの綱の妹は殆んど力を使い果たしてるぜ」

「なあ虫けら、ボンクラ、のろま、腑抜け、役立たず。何で生まれて来たんだお前は？どうする？弱い弱いボロボロのみつともねえ人間の体で俺の頸を斬ってみろ。さあさあさあ！」

炭治郎は折れた指で”地面”を搔いて頭を下げた。その様子を伊之助から取り戻した頸をくつつけた墮姫が見下ろしていた。

「ひひひひっ!!そうかそうか、土壇場で心が折れたか。みつともねえなあ本当にみつともねえ!!みつともねえが俺は嫌いじゃねえ。俺は惨めでみつともなくて汚いものが好きだからなあ」

「お前の額のその汚い傷!いいなあ、愛着が湧くななあ」

妓夫太郎は尚も炭治郎と話す。そして妓夫太郎は炭治郎に鬼になるよう自分の顔を掻きむしりながら勧めた。それを聞いた墮姫は嫌がるが、妓夫太郎は聞く耳を持たなかった。

そして炭治郎は下げていた頭を上には振りかぶった。

「俺は…、俺は…、準備してたんだ」

そして炭治郎は妓夫太郎に向けて渾身の頭突きをした。

鬼の妓夫太郎にとっては石頭の炭治郎の頭突きは差程効かないが、炭治郎は頭突きと同時に毒が塗られたクナイを妓夫太郎の太腿に刺していたのだ。

妓夫太郎は炭治郎の攻撃が頭突きだけだと思っており、クナイの毒

には注意をしておらず、バランスを崩してしまった。そこに炭治郎が刀を振りかぶり、刃が妓夫太郎の頸に食い込んだ。

墮姫はそれを見て妓夫太郎を助けようと帯を伸ばす。そこに瓦礫を吹き飛ばしながら善逸が現れた。

『雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃』

「(あんたの技の速度はわかってんのよ! 何度も見てるからね!)」

墮姫は帯を炭治郎では無く、善逸に向けた。しかし善逸はその帯を足場にし

『神速』

自身が持つ最大の速度で墮姫の頸を捉えた。

「(斬れる斬れる振り抜け! 霹靂の神速は二回しか使えない。足が駄目になる。瓦礫から抜けるために一度使っていて後が無い。そして今以外頸を狙える機会は訪れない!)」

「(炭治郎がこの千載一遇を作った。絶対に斬る、絶対に!!)」

善逸が墮姫の頸を斬ろうとしている中、炭治郎は妓夫太郎の頸の固さに悪戦苦闘していた。そして毒から回復した妓夫太郎は円斬旋回を使い、炭治郎の刀を弾いた。

妓夫太郎の斬撃を捌いている炭治郎の首に妓夫太郎の鎌が刺さろうとする。そこに”死んでいた”はずの天元が現れ、鎌を防いだ。

天元の体は満身創痍で、左腕も斬り落とされていた。

「(死んでない!!死んでなかったコイツ、心臓は…そうか、”筋肉で無理矢理に心臓を止めてやがった”なあ。そうすりゃあ毒の巡りも一時的に止まる)」

妓夫太郎は天元がまだ生きていた理由を察した。

”譜面”が完成した!!勝ちに行くぞオオ!!」

譜面

それは宇随天元”独自”の戦闘計算式である。

分析に時間がかかるものの、敵の攻撃動作の律動を読み、音に変換することで相手の癖や死角もわかる。

唄に合いの手を入れるが如く、音の隙間に攻撃すれば敵に打撃を与えられる。

円斬旋回を全て弾いた天元は妓夫太郎に肉薄する。その時に天元は左目を斬られ、腹に鎌が刺さる。しかし天元は止まらずそのまま妓夫太郎を抑え込んだ。

そして炭治郎が天元を飛び越え、刀を振ろうとするが、先に妓夫太郎の鎌が炭治郎の顎に刺さった。だが炭治郎はお構い無しに刀を妓夫太郎の頸目掛けて振るい、刃が妓夫太郎の頸を捉えた。

「腕の力だけじゃ駄目だ、全身の力で斬るんだ。頭の天辺からつま先まで使え。体中の痛みは全て忘れろ喰らいつけ!渾身の一撃じゃ足りない、その百倍の力を捻り出せ!」

すると炭治郎の額の痣がみるみる濃くなっていた。

「(まずい、斬られる!! いや、大丈夫だ。俺の頸が斬られても、妹の頸が繋がってりゃあ)」

そう、妓夫太郎と墮姫は『二体で一体の鬼』なのだ。たとえどちらかの頸が斬られても、もう一方が斬られていなければ頸を繋げるだけで済む。

だが、その『慢心』が敗因になるとは、この時の妓夫太郎はおもってもいなかった。

その頃、墮姫は善逸に攻撃をしようとする、その帯が斬られた。帯を斬った犯人は伊之助だった。

「俺の体の柔ら”かさを” 見くびんじゃね” え”! 内臓の位置をずらすな” ンてお茶の子さい” さい” だぜ! 険しい山で育つだ俺には毒も効かね” え”!」

そして伊之助は善逸とは逆の方向に向けて刀を振るった。

「アアアアアア!!」

「アアアアアア!!」

「ガアア”ア”アア”ア”!」

そして遂に三人は妓夫太郎と墮姫の頸を” 同時” に斬ったのだつた。

∴

……

……

妓夫太郎の頸を斬った炭治郎はその場にへたり込んでしまった。

炭治郎は何とか呼吸で毒の巡りを遅らせようとしていた。そこに天元が何かを言っていた。体力を激しく消耗している炭治郎はうまく聞き取れてはいなかったが、天元が残った体力を全て使い叫んだ。

「逃げろー！ー！ツ!!!」

その時、妓夫太郎の四肢から円斬旋回が暴走したかのように四方八方に飛び散った。

第13話

「む〜」

「彌豆子…」

気絶していた炭治郎は小さくなった彌豆子に膝枕をされた状態で目を覚ました。そしてもはや瓦礫の山と化した遊郭の街並みを見て呆然としていた。

そこに彌豆子が自分の頭を炭治郎に押し付けた。この行動は頭を撫でて欲しいという催促であった。

炭治郎は彌豆子の頭を撫でる。彌豆子はにっこりと笑っていた。

そして炭治郎は他の皆がどうなったのか心配で立ち上がるが、膝から崩れ落ちた。

今の炭治郎は体力が限界以上に消耗してしまっているので、立ち上がるのも困難になっているのだ。

「たんじろ〜」

「たああんじろ〜」

すると善逸の声が小さくではあるが聞こえてきた。

すると彌豆子が炭治郎をおんぶして善逸の所まで連れて行ってくれた。

「起きたら体中痛いよおお。俺の両足これ折れてんね何なの？誰にやられたのコレ？怖くて見れないい」

「無事か!!良かった」

「無事じゃねえよおお」

(いやそんだけ騒げりや例え満身創痍でも無事だと思われるぞ？だから非モテ男になるんだよ) by作者

「何か嫌な言われ方された俺も可哀想だけど、伊之助がヤバイよお。心臓の音がどんどん弱くなってるよ〜」

「何だって!?!伊之助は何処に!?!」

「あそこにいるよあそこ〜」

善逸から伊之助の容態を聞いた炭治郎は、善逸から伊之助の場所を聞く。そして善逸が指差した所を見ると、そこには瓦礫の山の上に仰向けで倒れている伊之助がいた。

「伊之助っ！伊之助、しっかりしろ！」

炭治郎が伊之助の体を起こし、心臓がある所に手を当てる。確かに善逸が言った通り、心臓の音がだんだん弱くなっているのがわかった。

「(毒を何とかしないと…。そうだ、陽の光は!?)」

炭治郎は毒が鬼の血で生成された物であることを思いだし、陽光で毒を分解できるのではと思い、空を見る。しかし空はまだ暗く、頭上

には満月が浮かんでいた。

炭治郎はしのぶに手紙を出すことも考えたが、それでは遅すぎて伊之助が助からないことを悟る。更には何で自分は助かったのかが分からなかった。

炭治郎も妓夫太郎の毒に侵されていたはずなのに、今は毒が全く無いことが分かる。そしてその答えが判明する。

禰豆子が伊之助に手を置いた瞬間、彼女の血鬼術である爆血が発動し、伊之助の体を燃やした。しかし伊之助の体は実際には燃えておらず、それどころか毒で爛れた皮膚が徐々に治っていったのだ。

そして

「腹減った、何か食わせろ!!」

伊之助が復活した。そのことに炭治郎は喜び、伊之助に抱きついた。

…

…

…

天元は自分の妻である須磨とまきをと雛鶴に囲まれていた。彼は妓夫太郎の毒を誰よりも多く喰らっており、生命いのちも風前の灯であった。

須磨が天元が助からないことに騒ぎ、まきをがそれを止めようとす

る。雛鶴が二人を止めようと注意するが、二人は聞く耳を持たなかった。

そこに禰豆子が現れ、『ヨッ』と挨拶をする。そして伊之助と同じように天元の体を燃やした。

その行動を見た三人は驚き、禰豆子を遠ざけ、火を消そうとする。

「ちよつと待て。こりや一体どういうことだ？毒が消えた」

天元が助かったことに三人はまたもや驚き、喜んだ。

「禰豆子の血鬼術が毒だけを燃やして飛ばしたんだと思います。似たようなことが無限列車の任務の時にもありましたので…」

禰豆子と一緒に行動していた炭治郎が毒が消えた経緯を話した。

「それはさておき…」

炭治郎は須磨、まきを、雛鶴の順番で顔を見る。

「確かに俺たちよりは、年上」ですね。『幼女好きの人拐い変態地味柱』の奥さんとは思えませんよ。俺は鬼の頸を探しに行つてきます」

「お前…、ここに来てそれは地味にねえだろ…」

炭治郎のデイスリを受けた天元は今までにないくらい疲れた顔をしていた。

…

……

……

その後炭治郎は鬼の血だまりを見つけ、攻撃してこないことを確認した後、愈史郎特性の”採血刀”で血を採取。それを茶々丸に渡した。

そして妓夫太郎と墮姫が言い争っている所を目撃し、仲裁。二人は炭治郎に感謝しながら崩壊した。それを見た炭治郎は崩壊した場所で手を合わせ、妓夫太郎と墮姫の冥福を祈った。

…

……

……

「ふうんそうかふうん」ネチネチ

「陸ね一番下だ上弦の」ネチネチ

「陸とはいえ上弦を倒したわけだ」ネチネチ

「実にめでたいことだな」ネチネチ

「陸だがな」ネチネチ

「褒めてやってもいい」

ここは天元がいる場所。そこには宇随夫妻に加え、応援にやって来

た小芭内がいた。

「おい伊黒、そんな言い方はねえんじゃねえのかア？」

更に同じく応援に駆けつけた実弥が小芭内に注意していた。

「……おい宇随、左手と左目を失ってどうするつもりだ？ たかが上弦の陸との戦いで復帰までどれだけかかる？ その間の穴埋めは誰がするんだ？」 ネチネチ

小芭内は実弥の注意を聞くが、口調は変わらず、相変わらずネチネチ天元を責めた。

「俺は柱を引退する。さすがにもう戦えねえよ。お館様も許してくださいさるだろう」

天元は自分の限界を感じ、柱を引退することを決めた。

「ふざけるなよ俺は許さない。ただでさえ若手が弱くて育たないんだ、お前程度でもないよりはマシだ。死ぬまで戦え」

「おい伊黒、こればかりは同じ柱として見過ごすわけにはいかねえぞ……」

実弥は小芭内の言い方に若干キレてしまったのか、額に青筋を浮かべて小芭内の肩を掴んだ。

「不死川、止めるんだ。伊黒の言っていることは事実だから仕方ねえさ。それに、若手はちゃんと育っているぜ。お前の大嫌いな若手がな」

天元の言い方に小芭内は心当たりがあった。

「おいまさか、生き残ったのか？この戦いで。竈門炭治郎が」

「ああ。しかも上弦の陸の頸を斬ったのは、竈門と我妻と嘴平の三人だ」

小芭内の質問に天元が頷き、更に頸を斬った者の名を言う。

「そうかそうか、流石は炭治郎だ。俺と義勇の”継子”なだけはあ
るぜエ」

実弥は腕を胸の前で組み、頷いていた。その様子を宇随夫妻と小芭内が見ていた。

「なあ不死川、ちよつと聞きたいんだが…」

「んア？どうしたア？」

天元が疑問に思ったことを実弥に質問をする。

「もしかして、竈門はお前の継子なのか？」

「言ってなかったかア？炭治郎は俺と義勇の継子だって」

それを聞いた天元、須磨、まきを、雛鶴、小芭内の五人は首を横に振る。

「そう言えば宇随、お前蝶屋敷で”とんでもないこと”をやらかした
そうだなア…？」

実弥はゴキゴキと拳を固めながら天元に迫った。天元は心当たりがあるせいか、冷や汗をダラダラ流していた。

実は炭治郎は遊郭に潜入している間、実弥と文通をしており、遊郭に潜入している経緯を書いていたのだった。

「おい不死川、先程のことは一体どういうことだ？」

疑問に思っていた須磨、まきを、雛鶴、小芭内の四人は小芭内を代表として実弥に質問をした。

「実はなあ……」

……………実弥説明中……………

「……………と、言うわけだア」

実弥の説明が終わると

「「天元様……………」」

須磨、まきを、雛鶴の三人は天元に冷たい眼差しを向けた。

「因みにだが宇随、そのことは義勇としのぶはとづくに知ってるぜエ？だから怪我が完治したら、俺と義勇、しのぶと炭治郎の”四人同時に稽古をしてみらうぜエ？」

義勇としのぶが知っている理由は、義勇は実弥が見せた炭治郎からの手紙。しのぶはアオイとなほという被害者から聞いていたのだった。

「あの…、拒否権は…」

「もちろん、ある訳がねえ」

「ですよね…」

柱三人と炭治郎との稽古が確定した天元はガツクリと項垂れていた。

「まあ…、その…、何だ…。宇随、御愁傷様だ」

小芭内も哀れな天元に同情を隠せなかった。

…

…

…

「(異空間無限城。ここに呼ばれたということは…、上弦が鬼狩りに殺られた)」

ここは無惨の根城である無限城。そこに鬼殺隊の協力者である猗窩座がいた。猗窩座は前世の記憶を頼りに、上弦が集結する時期を見て、”無惨の呪い”を発動させ、自分の位置を無惨に教えていたのだ。

そして彼の目の前には琵琶を持った女性の鬼鳴女なきめが琵琶を鳴らしていた。

「ピョッ。これはこれは猗窩座殿、いやはやお元気そうで。九十年振りです。御座いますよね？」

すると猗窩座の近くにあつた壺から異形の鬼『上弦の伍・玉壺』が姿を見せた。

「怖ろしい怖ろしい。暫く会わない内に玉壺は数も

数えられなくなつておる。呼ばれたのは百十三年振りじや。割り切れぬ数字…、不吉な丁、奇数！怖ろしい怖ろしい」

その近くに頭に大きなコブを持った鬼『上弦の肆・半天狗』が階段の手摺に身を潜めていた。

「琵琶女、無惨”様”はいらつしやらないのか？」

猗窩座は鳴女に無惨が来てないか質問をする。疑われないように”様”を付けて。

ベンツ 「まだ御見えではありません」

「なら上弦の壺はどこだ？まさか殺られたわけじゃないだろうな」

猗窩座は更に鳴女に質問をする。

「おつとおつと！ちよつと待つておくれよ猗窩座殿！俺の心配はしてくれないのかい？」

そこに『上弦の弐・童磨』が猗窩座の肩に腕を回した。

「お前はいてもいなくてもどうでもいい。それよりも早く俺の肩に回した腕を退かせ。さもなれば、貴様の顎を砕く」

猗窩座はそう言つて、童磨の顎を本当に砕いた。

「うーん、いい拳だ！前より強くなったかな？猗窩座殿」

しかし童磨は砕かれた顎をすぐに再生させた。

「……………」ビキッ

猗窩座は童磨の言動に苛立ちを覚え、額に青筋が浮かんでいた。

「上弦の壺様は最初に御呼びしました。ずっとそこにいらつしやいますよ」

鳴女が猗窩座の質問に答え、猗窩座は近くにある座敷を見る。

「私は…、ここにいます……………」

すると確かにそこには侍の風格をした鬼『上弦の壺・黒死牟こくしぼう』が座っていた。

「無惨様が…、御見えだ…」

黒死牟が呟くと、猗窩座たちの頭上に無惨が姿を現した。

「妓夫太郎が死んだ。上弦の月が欠けた」

無惨は試験管に液体を滴しながら言った。そして試験管の中の反応を万年筆で白紙の本に記す。

「産屋敷一族を未だに葬っていない。」青い彼岸花も見つけてはいない。私は、貴様らの存在理由が分からなくなった」

無惨の怒りを知った上弦の鬼たち（猗窩座除く）は次々に謝った。

「無惨様!!私とは違います!貴方様の望みに一步近づいたための情報を私は掴みました!ほんの今しがた……」

玉壺はその情報を伝えようとするが、それは出来なかった。何故なら、無惨が玉壺の頸を持っていたからだだった。

鳴女が琵琶を鳴らすと、玉壺の頸は真つ逆さまに落ちた。

「これからは死に物狂いでやった方がいい。私は上弦だからという理由でお前たちを甘やかしすぎたようだ」

「玉壺、情報が確定したら半天狗と共に其処へ向かえ」

無惨はそう言つて消えた。

「玉壺殿!情報とは何のことだ?俺も一緒に行きたい!」

玉壺の頸の下に童磨が近づき、玉壺が得た情報を聞き出そうとする。しかし童磨の頭を猗窩座が裏拳で殴り飛ばした。

だが、童磨の頭を殴つたと同時に猗窩座の腕も斬り落とされていった。

「猗窩座……お前は……度が過ぎる……」

猗窩座の腕を斬り落とした犯人は黒死牟だった。

「良い良い黒死牟殿!俺は気にしない!」

童磨は頭を再生させながら猗窩座の行動を咎めなかった。

「猗窩座よ…、気に喰わぬのならば、入れ替わりの血戦^クを申し込むことだ…。わかったか…」

猗窩座を黒死牟の目が睨む。その顔は、目が左右に三つ、そして陽炎のような瘡^クがあった。

「……わかった。俺は必ず童磨^{コイツ}を殺す」

「そうか…。励む…。ことだ…」

黒死牟はそう言って消えた。

「鳴女殿！私と半天狗を同じ場所に飛ばしてください！」

玉壺も頸をくっつけるために急いで体がある所へ向かい、半天狗と共に姿を消した。

「琵琶女、俺も去る。飛ばしてくれ」

猗窩座もいなくなり、童磨は鳴女をデートに誘うが速攻で断られ、『万世極楽教』の自室に飛ばされた。

…

…

…

「(玉壺と半天狗の共闘…。恐らくは”あそこ”を襲うつもりだな

…」

猗窩座は無限城から出た後、すぐに”無惨の呪い”を解き、その場を移動した。

そして偶然か必然か、ちょうどその近くに義勇がいた。

「……ふう」チンツ

義勇は鬼を倒した直後だったのか、持っていた刀を納刀していた。

「……そこにいるのはわかっている。大人しく出てきたらどうだ？」

義勇は誰もいないはずの暗闇に向けて喋りだした。するとそこから猗窩座が現れた。

「お初にお目に掛かる。鬼殺隊の柱とお見受けする。俺は猗窩座、十二鬼月、上弦の参」

猗窩座は義勇に向けて自己紹介をする。

「猗窩座……？もしか、煉獄や炭治郎が言っていた『鬼殺隊に協力している鬼』……か？」

義勇は緊急柱合会議の時に炭治郎が言っていたことを思い出した。

「その通りだ。……竈門炭治郎は俺が入手した情報を知らせたようだな。喜ばしいことだ。そうは思わんか？」富岡義勇殿？」

義勇はまだ名乗ってはいないのに、名を言い当てられたことに驚き、刀に手を添える。

「おっと、刀を抜かないでもらいたい。知ってるとは思いますが、俺は前世の記憶を持っている。それ故に煉獄杏寿郎のこと、竈門炭治郎のこと、そして貴殿のことを知っているのだ」

猗窩座の説明を聞いていた義勇は、炭治郎も同じことを言っていたことを思い出し、刀に添えていた手を放した。

「わかって頂き感謝する。早速だが、俺が入手した新たな情報を伝える。近々、上弦の肆と伍が『刀鍛冶の里』を襲う手筈を整える。ついでには貴殿にその情報を皆に伝えて欲しい」

猗窩座は先程無限城で無惨が玉壺と半天狗に命じたことを義勇に伝える。

「……わかった。お館様に伝えよう。それと、お館様がお前に会いたいと仰っていた。暇な時で構わないから、会いに行つて欲しい」

「承知した。その時には、貴殿に護衛をお願いしたいものだ」

猗窩座はそう言って暗闇に溶けるように姿を消した。そして義勇は猗窩座から受け取った情報を耀哉に伝えるべく、産屋敷邸に向かった。

第14話

季節は春。

場所はとある家。

座敷には一人の女性が横になっており、縁側に一人の侍が座っていた。

そこにおにぎりとお茶を乗せたお盆をもった人が現れ、侍の側にお盆を置いた。

侍の腕には赤ん坊が抱かれており、穏やかな寝息を立てていた。

侍はお茶を一口啜ると、お盆を持ってきた人を見る。その顔には額に炭治郎と同じ痣があり、耳にはこれもまた炭治郎と同じ花札のような耳飾りをしていた。

そして侍は立ち上がり、腰に刀を差し、家を去った。

…

…

…

炭治郎はそこで目が覚めた。今まで見ていたのは炭治郎の夢だった。

今の炭治郎の姿は、両腕に点滴の管を刺し、頭を含む数ヶ所に包帯

が巻かれていた。

バリンツ

何か割れる音がして、炭治郎は視線をそちらに向ける。そこにはカナヲが立っており、足下には割れた花瓶があった。

花瓶の破片と一緒に水と花があることから、どうやらカナヲは花瓶に花を生け、炭治郎がいる部屋に飾ろうとして入室した所で、炭治郎が目を見ましたことを知って、持っていた花瓶を落としてしまったようだ。

「…大丈夫？ 戦いの後、二ヶ月もの間意識が戻らなかったのよ」

カナヲから説明を受けた炭治郎はどれだけの間寝ていたのかわかった。

「目が覚めて…、良かった」

カナヲは炭治郎の顔を見て微笑む。そして部屋の片隅には、茶々丸がおり、二人の様子を見ていた。

…

…

…

丁度その頃、隠の隊員の一人である『後藤』が（当時では）高級菓子のカステラを持って炭治郎の部屋へと向かっていた。

そして炭治郎の部屋の戸が開いてることに気づき、入室すると戸の側に割れた花瓶が散乱しており、それを箒とちりとりを持ったカナヲが片付けている所だった。

「あつ、後藤さん」

片付けの途中でカナヲが後藤に気づいた。

「後藤さん、丁度良かった。今炭治郎が目覚まして、アオイさんたちを呼びに行こうと思ってたの。でも、花瓶を割ってしまつて片付けている所だったの」

カナヲは炭治郎が目覚めたことを後藤に伝える。

「それで、後藤さんにお願ひがあるの。私は花瓶の破片を処理するかから私の変わりにアオイさんたちに炭治郎が目覚めたことを伝えて欲しいの」

カナヲは後藤にアオイたちに炭治郎のことを伝えて欲しいことを頼んだ。後藤はそれを承諾し、サイドテーブルにカステラを乗せた皿を置いてアオイたちを呼びに行った。

その後炭治郎の下になほ、すみ、きよの三人が先に到着し、炭治郎が目覚めたことに喜んで泣いていた。

すると廊下を走る音がしたと思うと、誰かが部屋に入って来た。

その人物は洗濯物が絡まったアオイだった。

アオイは洗濯物を放り投げ捨てると、炭治郎の側まで寄つて泣いた。

「どうやら自分のせいで炭治郎が意識不明の重症になったことを悔やんでいたようだった。」

「ありが…とう…。他の…、みんなは…、大丈夫…、ですか…？」

炭治郎は心配してくれたことに感謝してお礼を言って、他のメンバーのことを質問した。

「黄色い頭の奴は一昨日だっけ？復帰してるぜ。嫌がりながらも任務に出てるらしい」

「はい。善逸さん、翌日には目を覚ましたんですよ」

「音柱は嫁さんの肩を借りてだけど、自力で歩いてたな。隠は引いてたな、頑丈過ぎて。凄い引いてた」

伊之助以外のメンバーの様子を後藤が語った。そして炭治郎は伊之助のことを質問する。

「伊之助さんも一時危なかったんです」

「伊之助さんすごく状態が悪かったの。毒が回ったせいで呼吸による止血が遅れてしまっ…」

伊之助の状態をアオイたちが語る。

「そうか…。じゃあ…、天井に張り付いている伊之助は俺の幻覚なんだな…」

炭治郎がそう言って全員が天井を見上げると、そこには伊之助が張

り付いていた。その状況に炭治郎を除くみんなが驚いた。

「グワハハハ!!よくぞ気づいた炭八郎!」

「俺…、あお向けだから…」

炭治郎が伊之助を見つけた理由を話すと、伊之助は炭治郎の上に降り立った。

「俺はお前よりも七日前に目覚めた男!そしてお前は軟弱だ!子分が親分を心配させんじゃねえ!」

伊之助は炭治郎を指差しながら自慢をする。

「伊之助さんが普通じゃないんですよ!」

「そうですよ!炭治郎さん、これを見てください!」

きよは炭治郎にとある本を見せる。それは『外国の動物図鑑』だった。

『ミツアナグマ』っていう外国のイタチです!このイタチの皮膚は厚くて丈夫なので、獅子に噛まれても平気なんです。毒も効かないから毒蛇でも平気で食べちゃうんです!」

きよは炭治郎に図鑑を見せながら説明をする。

それを聞いた伊之助は自分が最強だと勘違いする。しかしそれをアオイが否定する。何でも『毒は効きづらいけど薬も効きづらい』という理由だった。

しかも炭治郎は伊之助とアオイが騒いでいる間に睡魔に襲われ眠ってしまった。

未だに騒ぐ二人にカナヲが炭治郎が寝たからと言って注意をする。アオイとカナヲは炭治郎のためにお粥を作ることにし、その場を静かに去った。きよたち三人も二人の手伝いのためについて行った。

伊之助は後藤に引き摺られながらも部屋を出た。

それから一週間後、炭治郎は回復。同じ時期に伊之助も任務に復帰した。

後藤は隠の仕事があったため、手紙で炭治郎たちのことを知った。

「んー、悔しい。やっぱり体力が戻らないなあ」

炭治郎は機能回復訓練を受けており、今は柔軟をしていた。だが、約二ヶ月もの間寝ていたこともあり、体がバキバキに固まっていた。

しかも炭治郎を心配していた義勇と杏寿郎も炭治郎の様子を見に来ていた。

「あつ、そうだ。俺が眠っている間に刀届いてない？刃こぼれしてしまったやつなんだけど」

炭治郎は刀のことを質問すると、彼の背中を押していたなほが動きを止める。

「なんだ竈門少年、刀が刃こぼれしてしまったのか！まだまだ修行不足だな！俺の継子になれば刃こぼれしにくくなるぞ！」

「煉獄、相手は上弦の鬼だったんだ。刃こぼれしてしまうのは当然だ。折れなかっただけでも儲けものだ。それと炭治郎は俺と実弥の継子だ」

杏寿郎は炭治郎を継子として勧誘する。だがそれを義勇が遮った。

「鋼錢塚さんからお手紙が来てますが…、あまり読まれない方が…」

休憩のためにお茶を用意していたすみが遠慮がちに言った。炭治郎はとりあえず鋼錢塚からの手紙を読むことにした。

『お前にやる刀は無い』

『呪ってやる』

『憎い』

『ゆるさない』

「……………」

「「「「……………」」」」

鋼錢塚の手紙を読んだ全員が言葉を失った。

「刀が破損することはよくあることらしいのですが…、鋼錢塚さんはちよつと気難しい方ですね…」

きよは首を傾げた。

「そつだ竈門少年!」里」に行つてみるのはどうだろうか?」ボリボリ

「そうだな。お館様にご相談すれば返事を送ってくださるだろう。それに丁度”人手”が欲しかった所だったからな」ボリボリ

義勇と杏寿郎はお茶請けとして用意されていた歌舞伎揚げを食べながら炭治郎に話を持ちかけた。

「人手…、ですか？」

炭治郎は義勇の言葉に疑問を持った。

「ああ。実は二ヶ月程前なんだが、俺の下に猗窩座が現れたんだ。そして彼が言うには近々刀鍛冶の里が襲撃されるらしい」

「そこでお館様からのご命令で俺と富岡が増援として抜擢され、里に向かうことになったのだ！」

義勇の話を遮るように杏寿郎が話した。

「煉獄、他人^{ひと}の話を横取りするな。まあ、先程煉獄が言ったように、俺と煉獄が里に向かうから、それに同行する形であれば、お館様も許可してくださるだろう」

「そうだったんですか…。なら、お願いしてもよろしいですか？」

炭治郎は義勇に里への同行をお願いする。

「わかった、お館様にご相談しよう」

「お願いします！」

義勇は炭治郎の刀鍛冶の里への同行を手紙に書いて鴉に届けても
らった。そして耀哉は炭治郎の同行を許可したのだった。

…

…

…

「はじめまして。お館様から貴方を里にお連れするよう仰せ^{つかまつ}りました」

数日後、蝶屋敷に女性の隠の隊員が訪れた。因みに義勇と杏寿郎はこの日の二日前に里へ出立しており、その後を炭治郎が追う形となった。

女性隊員は炭治郎に目隠しと耳栓を渡した。何でも鬼の襲撃を防ぐために里の場所は柱を除く極一部の者と鴉しか知らないとのことらしい。

炭治郎は鼻が効くという理由で更に鼻栓までさせられ、刀鍛冶の里へと出立した。

「ちよつと重い…」

移動手段は徒歩であり、隠の隊員が炭治郎をおんぶする形で移動する。炭治郎をおんぶしている女性隊員は、移動速度が遅かった。

その理由は炭治郎と（小さくなつてはいるが）禰豆子の二人をおんぶしているからであった。

そして女性隊員は仲間が待機している所へ到着し、炭治郎を引き渡す。そしてその仲間も他の仲間の下へ向かい、炭治郎を引き渡す。これを何回か繰り返したのだった。

「ありがとうございます！お疲れさまでした！よろしくお願いします！」

炭治郎は引き渡しの際に必ず連れて来てくれた隠の隊員を労い、案内してくれる隠の隊員をお願いした。炭治郎のこの行動に隠の隊員たちはほっこりした気持ちになっていた。

…

…

…

「目隠しを外しますよ」

耳栓を取られた炭治郎は続いて目隠しを取られる。するとそこには町並みが広がっていた。

「すごい建物ですね！しかもこの匂い…、近くに温泉があるようだ！」

炭治郎は初めて訪れる里に興奮していた。

「はい、温泉がありますよ。あちらを左へ曲がった先が長の家です。一番最初に挨拶をしてください。では私はこれで失礼します」

「はい！ありがとうございます！」

隠の隊員が里長の家の場所を伝え、炭治郎はお礼を言った。

…

……

……

『ありがとうございます！ ありがとうございます！ ありがとうございます！ ありがとうございます！』

「ん？感謝の山彦が聞こえた。誰か来たのかしら？何だかドキドキしちゃう」

炭治郎の感謝の声は山彦となり、丁度温泉に浸かっていた蜜璃の耳に届いた。

そしてその温泉の近くには、温泉の効能が書かれた看板が立っていた。

…

……

……

『この温泉は』以下の症状に効きます』

『切り傷』、”火傷”、”イボ痔”、”切れ痔”、”便秘”、”痛風”、
”糖尿病”、”高血圧”、”貧血”、”慢性胆のう炎”、”筋肉痛”、
”関節痛”、”性格の歪み”、”思いやりの欠如”、”鼻炎”、”へ

その痒み”、”失恋の痛み”』

……

……

…

（いや”性格の歪み”や”思いやりの欠如”や”へその痒み”や”失恋の痛み”は関係無えだろ!?”）by作者

…

……

……

「どうもコンニチハ。ワシこの里の長の鉄地河原鉄珍てっちかわはらてっちん、よろびく。里で一番小さくて一番えらいのワシ。まあ畳におでこつくくらいに頭下げたってや」

「竈門炭治郎です、よろしくお願いします!」ゴンツ

炭治郎は言われた通りに畳に額を着けてお辞儀した。

「まあええ子やな。おいで、かりんとうをあげよう」

「ありがとうございます!」ボリボリ

炭治郎は受け取ったかりんとうを食べ始めた。

「君のことは聞いてちよる、刀が欲しいんやったな。けど堪忍な、君の担当の蛭が今行方不明になつとつてな、刀を渡すことができるのや」

「蛭？」

「そうや、”鋼錢塚蛭”。ワシが名付け親」

炭治郎は今初めて鋼錢塚のフルネームを知ったのだった。

「可愛い名前ですね！」

「可愛すぎ言うて本人から罵倒されたわ。あの子は小さい時からあんなふうや。すーぐ癩癩起こしてどっか行きよる。」

里長の鉄珍は火男ひよっこの面を着けたまま、ため息を一つ吐いた。

「いえいえそんな！俺が刀を折ったり刃こぼれさせたりするから」

炭治郎は鋼錢塚を庇うが

「いや、違う。折れるような鈍ナマクラを作ったあの子が悪いんや」

鉄珍が威圧感たつぷりに言うと、炭治郎はその威圧感に圧倒され言葉を失った。

「見つけ次第取り押さえて連れて参りますので、ご安心ください」

鉄珍の側に控えていた連れが、腕を振りながら物騒なことを言った。

「君はまだ鬼狩りに行ける程体力が回復しちよらんと聞いたとる。うち

の里の温泉は弱った体によく効く。蛍が見つかるまでゆっくりしていきなさい」

「それまでに蛍が見つからなかった時には、別の者を君の刀鍛冶たんとうにするから」

鉄珍はそう言つて、連れを率いて部屋を退室した。そして炭治郎は案内人に連れられて森の中にある階段へとやつて来た。そこには所々に“湯”と書かれた看板があつた。

「この坂の上に温泉がございます。階段を登つて頂ければ迷わずに着けます。私は下でお食事の用意をしておきますので、ゆっくり浸かつていってください。尚、本日の主食は松茸ご飯となっております」

「ありがとうございます」

炭治郎は案内人にお礼を言つて階段を登り始めた。そして中腹辺りで誰かが上から降りて来た。

「あーっ、炭治郎君だ！炭治郎く〜くん!!」

「えっ!?甘露寺さん!」

降りて来たのは蜜璃だつた。しかし、蜜璃は浴衣姿で階段を駆け降りているため、乳房やまが激しく揺れていた。

「気をつけてください!何か”が零れ落ちそうですよ!」

炭治郎は言葉を濁しながら注意するが、蜜璃には聞こえておらず

「聞いてよ聞いてよ〜!私今そこで無視されたの〜!挨拶したのに無

視されたの〜！」

炭治郎に涙目になりながらすがり付いてきた。

「誰にですか？」

「わかんないの〜！だから名前聞いたのに無視なの！酷いと思わない？私柱なの〜！もうお風呂上がりもいい気分が全部台無し！」

炭治郎は蜜璃に誰に無視されたのか質問をするが、蜜璃はそれが誰なのか分からなかったらしい。挙げ句の果てに蜜璃はめそめそ泣き出してしまった。

「(どうしよう…、あつ、そうだ！) 下でもうすぐご飯ができるそうですよ？今日は松茸ご飯だそうです」

「えーっ、本当?!」

泣いていた蜜璃は即座に泣き止み、炭治郎に確認する。炭治郎が領くと、蜜璃は意気揚々と階段を降りていった。

「(煉獄さんから甘露寺さんのこと聞いて良かった…)」

炭治郎は刀鍛冶の里に来る前に杏寿郎から蜜璃のことを聞いていた。と、言うか、杏寿郎の方から炭治郎に蜜璃のことを話してしたのだった。

そして炭治郎は温泉に到着した。炭治郎はその温泉の広さに驚いていると、額に何か当たった。炭治郎はそれを拾ってみると、それは”人の前歯”だった。

そして炭治郎は温泉の方を見ると、そこには実弥の弟の玄弥が温泉に浸かっていた。

「玄弥！玄弥じゃないか！」

「ん？、炭治郎じゃないか！お前、何でここにいるんだよ！」

炭治郎は玄弥に声を掛け、玄弥は自分を呼んだ声が出た方を見ると、炭治郎が手を大きく振っていた。

炭治郎は禰豆子が入っている箱を下ろし、服を脱ぎ、温泉の中を泳ぎ玄弥の側まで行った。

「俺は刀が刃こぼれして、二ヶ月前に修理に出していたんだけど、まだ届いてないから受け取りに来たんだ。そう言う玄弥こそ何でこの里にいるんだ？」

炭治郎は玄弥の質問に答え、今度は自分の番とばかりに玄弥に質問をする。

「俺はちよつとした”用事”があるから里こゝにいるんだ」

玄弥も炭治郎の質問に答え、二人は温泉でのんびりした。

その間、禰豆子が温泉で泳いでいるのを見た玄弥が顔を真っ赤にし、炭治郎は玄弥が温泉で逆上のぼせたと勘違いしてしまったたりした。

第15話

温泉に向かう途中で恋柱の甘露寺蜜璃、温泉で同期の不死川実弥の弟の玄弥と再会した炭治郎は、温泉で疲れを癒した後、母屋の一室で夕飯を食べることにした。

「す…、凄いですね…」

「そうかな？今日はそんなに食べてないけど」

「(そんなに食べてない!?じゃあ普段どれだけ食べているんだこの人?)」

炭治郎は蜜璃の食欲に圧倒されていた。

「あつ、そうだ。甘露寺さんが温泉で会ったのは実弥師範の弟で俺と同期の不死川玄弥でしたよ」

炭治郎は玄弥のことを蜜璃に話した。そこにテーブルの下に潜り込んで遊んでいた禰豆子が顔を出す。

「そうだったんだ。そう言えば不死川さん言ってたなあ、『俺の弟が鬼殺隊に入隊した』って」

蜜璃はかつて実弥が言っていたことを思い出していた。そして蜜璃は禰豆子をこしょくつて禰豆子の遊び相手を勤めた。

「そう言えば、玄弥君来ないわね。お腹空いていないのかしら？」

蜜璃は未だに食事に来ない玄弥を心配していた。

「後で玄弥におにぎりでも持って行きましょうか」

炭治郎がそう提案し、里の人にお願いしおにぎりを作ってもらい、三人はおにぎりを持って玄弥が借りている部屋へと向かった。

…

…

…

「あの、甘露寺さんはなぜ鬼殺隊に入ったんですか？」

炭治郎はふと疑問に思ったことを蜜璃に質問する。

「私が鬼殺隊に入った理由？それはね…、添い遂げる殿方を見つけるためのの！」

「……………（聞かなかった方が良かったかも…）」

蜜璃は顔を赤くしながら炭治郎の質問に答えた。そして質問をした炭治郎当人は、意外な入隊理由だったため呆然としていた。

（安心しろ炭治郎、入隊理由^そを聞いた者はみんな同じ気持ちになって
いるから） by 作者

そして炭治郎たちは玄弥が借りているであろう部屋に到着し、障子を開けたが、借りている当人は部屋にはいなかった。

「甘露寺様、間もなく刀が研ぎ終わるそうです。最後の調整のために

工房へお越し頂きたいのですが…」

そこに女性の隠隊員が現れ、蜜璃を呼びつける。

「あら、もう行かなきゃいけないみたい」

「気になさらず！お見送りしますよ」

炭治郎は蜜璃を見送ろうとするが、蜜璃が『深夜に出立することに
なりそうだから大丈夫』とやんわりと断った。それでも炭治郎は見送
りをしようとしていた。

「炭治郎君、今度また生きて会えるかわからないけど、頑張りましょう
ね。あなたは上弦の鬼と戦って生き残った。これは凄い経験よ」

「実際に体感して得たものはこれ以上ない程価値がある。五年分、十
年分の修行に匹敵する。今の炭治郎君は前よりも、もつとずっと強く
なってる」

「甘露寺蜜璃は竈門兄妹を応援してるよ！」

蜜璃は彌豆子の頭を撫でながら炭治郎たちを認めた。

蜜璃は元々、柱合裁判の時に既に炭治郎たちのことを認めてはい
た。だけでも、改めて蜜璃は炭治郎たちのことを認めると伝えたの
だった。

「ありがとうございます。でもまだまだです。あの時は俺の他に善逸
に伊之助、宇随さんがいたから勝てたんです。俺の力なんて微々たる
ものです。なのでもっともつと頑張ります、鬼舞辻無惨に勝つために
！」

炭治郎が凜々しい顔つきで言うと、禰豆子が不満げな顔で頭を炭治郎に押し付けてきた。

「ああもちろん、禰豆子も同じだよ。毒にやられた俺たちを助けてくれたもんな」

炭治郎が禰豆子の頭を撫でると、禰豆子は嬉しそうに目を細めた。その様子を見ていた蜜璃と女性隊員はほっこりした気分になった。

「と…っ、ところで、炭治郎君は長く滞在する許可が出てるのよね？」

「えっ？あ、はい。一応は…」

蜜璃はもじもじしながら炭治郎に質問をする。そして炭治郎が答えした後、ちらりと女性隊員の方を向いて、炭治郎に近寄ると

「この里には強くなるための”秘密の武器”があるらしいの。探してみてね」

そう耳元で囁いた。

「じゃあねー」

そして蜜璃は女性隊員と一緒にその場を去った。炭治郎は呆然と立っており、禰豆子は名残惜しそうな顔をして手を振っていた。

すると炭治郎の鼻から勢いよく鼻血が出た。どうやら蜜璃に耳元で囁かれたのが効いたらしい。だが炭治郎は鼻血が出るのが分かっていたのか、おにぎりを乗せたお盆は自分の頭上に上げていたお陰で

食べ物を粗末にしなくて済んだのだった。

…

…

…

翌朝、炭治郎は禰豆子と一緒に蜜璃が教えてくれた”秘密の武器”を探すために森の中を歩いていた。

炭治郎は昨夜鼻血を出した後、”立ったまま気絶”という器用なことをしていた。禰豆子は炭治郎を起こそうとしていた所に、丁度温泉上がりだったのか、義勇と杏寿郎が通り掛かり、炭治郎を起こすことが出来たのだった。

炭治郎は体調がまだ万全では無いせいで鼻が利きにくい状態であった。

(いや昨夜の鼻血も原因の一つだと思うぞ?) by 作者

「誰か何か言った気がする…」ん？あれは…、子供？…ともう一人は…」

炭治郎が森の中を彷徨っていると、丁度鬼殺隊員の一人に少年が(一方的に)言い争っている所を見かけた。

「どっか行けよ！何があっても”鍵”は渡さない！使い方も絶対教えねえからな！」

炭治郎が聞こえたのはその辺りだけであり、後は距離が遠かったの

で聞こえなかった。すると鬼殺隊員『霞柱・時透無一郎』は手を上げると、少年の首目掛けて手刀を落とした。

そして無一郎は少年の胸ぐらを掴み、無理やり起き上がらせた。

「止めろっ、何してるんだ！手を放せ！」

それを見かねた炭治郎は無一郎の手首を掴んだ。

「声がともうるさい…。誰？」

「子供相手に何してるんだ…！早く手を…（ぐっ、びくともしない！）」

炭治郎は無一郎の手を少年から放そうとするが、無一郎の手はびくともしなかった。それでも何とか手を放そうとする。

「君が手を放しなよ」

「!?（肘打ちが来る！）」

”何故か”無一郎の行動を読めた炭治郎は無一郎の肘打ちが体に当たる寸前で無一郎から離れ、距離を取った。

「へえ…？よくわかったね…」

肘打ちを避けられた無一郎は炭治郎に感心していた。

しかもその一瞬の隙を突かれたのか、掴んでいた少年が炭治郎に奪還されていたのだった。

炭治郎は少年の安否を確認するが、少年は助けてくれた炭治郎に礼

は言わず、頑なに鍵は渡さないと震えながら言っていた。

しかしそれでも無一郎は少年に鍵を渡すよう強要し、手を差し出した。

すると炭治郎が無一郎の差し出した手を叩いた。

「君の言っていることは正しいかもしれない。柱は誰よりも強くて沢山の人を助けられるかもしれない。でも、今の君には『配慮』が足りない」

「そんな言い方じゃ誰も感謝しないし、誰も協力なんかしない」

その様子を鋼錢塚は木の影から見ていた。

「刀鍛冶の人たちは、俺たちよりも優れた技術を持った人たちです。この人たちがいなければ俺たちは鬼を倒すことはできません。だから『悪いけど』……え？」

「君のくだらない話に付き合っている暇、無いんだよね」

炭治郎の話を遮った無一郎は炭治郎の首に手刀を当て、気絶させた。炭治郎は気絶する寸前、炭治郎は鋼錢塚の姿を見た気がした。

…

…

…

「どうしよう…、俺一人で運べるかな…？」

「もう少しして起きなきや俺が運ぶ…ん？」

「ヤベエ、コイツの瞼がピクピクしだした！じゃあな！」

「う…、うん」

誰かの話し声が聞こえたので、炭治郎は目を覚ました。

炭治郎は少年に鋼錢塚がいなかったか質問をする。その理由は聞こえた声の一人が鋼錢塚の声だったからだだった。

しかし少年は鋼錢塚はいないと言った。ご丁寧に下手な口笛を吹きながら。

炭治郎は無一郎のことを少年に聞くと、少年は『鍵を渡したらどっか行ってしまった』と答えた。

「結局その”鍵”ってというのは何の鍵なの？」

「”絡繰人形”を起動させるための鍵です」

少年が言うには、『先祖が作った人形で百八つの動きができる上、人間を凌駕する力があり、戦闘訓練に利用される』代物だそうだ。だが、度重なる訓練や年代物のせいでの老朽化が進み、精々訓練に利用できるのが後一回くらいだったそうなの。

その時、鉄がぶつかる音がしたため、炭治郎は少年と一緒にその音がした所へ向かった。

すると無一郎が”何か”と戦っていた。

「あれが…、俺の祖先が作った”戦闘用”絡繰人形、『縁壹零式』よりいちぜろしきです」

無一郎が戦っていた何かの正体、それこそが先ほど少年が話していた絡繰人形だったのだ。

その姿は異様で、”腕が六本”あった。だが顔面に関しては所々罅割れていたり、欠けたりして眼球や中の歯車が露出していたりしていた。

炭治郎が少年に”なぜ絡繰人形の腕が六本ある”のか質問をする
と、少年は『父の話では、原型となった戦国の剣士の動きを再現するために腕を六本にせざるを得なかった』らしい。

炭治郎はその話を聞いて、昔の技術は凄いと感心していた。

「そう言えば、お互いまだ自己紹介してなかったね。俺は竈門炭治郎。よろしく」

「俺は小鉄といいます。炭治郎さん、よろしくお願いします」

炭治郎と少年・小鉄は互いに自己紹介をした。その時、無一郎の攻撃が絡繰人形の鎧を砕いてしまった。

それを見た小鉄はその場から走り去ってしまった。

…

……

……

炭治郎は小鉄の匂いを嗅ぎながら探していると、木の枝の上にいるのを見つけた。炭治郎は『もし壊れたら一緒に直そう』と言うが、小鉄は『自分には才能が無い』と言った。

すると小鉄の側に炭治郎が音も無く現れ、小鉄の顎をデコピンならぬアゴピンした。

そして炭治郎は小鉄を説得し、小鉄は覚悟を決めた。

炭治郎と小鉄は一緒に先程無一郎が訓練をしていた場所まで戻っていると、二人の間を無一郎が通過した。

しかも彼の手には先程の絡繰人形の腕があり、無一郎は絡繰人形の刀を貰うと言った。

それを聞いた小鉄は急いで人形がある所へ走って行った。無一郎は折れた刀を炭治郎に投げ渡し、処分するように言ってその場を去った。

炭治郎は小鉄の後を追い、やっとその姿を見つけた。小鉄は腕が一本無くなり、顔が更に砕けた人形の前で座り込んでいた。そして空には雨雲が広がり、とうとう雨が降りだした。

それはまるで小鉄の涙を代用するような雨だった。

炭治郎は小鉄に『動くか確認しよう』と言って二人で人形を立たせた。

それでも人形は動かず、小鉄は諦めかけていたその時、中の歯車が回り、人形が動いた。それを見た炭治郎は喜んだ。しかし小鉄は

「……炭治郎さん、これで修行してあの“澄ました顔の糞ガキ”よりも絶対に強くなってくださいね……!!全力で協力しますので!」

お面越しでもわかる程の怒りを

炭治郎はこの先地獄を見る予感がした。

…

……

……

縁壺零式が動くことがわかった小鉄は早速炭治郎に修行を受けさせた。

その際、人形が持っている刀を素振り棒に変え、人形に振るわせていた。

だが炭治郎は人形の動きについて行けず、何度も人形に吹っ飛ばされていた。

「炭治郎さんアナタ癖で動いているんですよ、相手の動きを見てから判断して動いてるんじゃないんだだから駄目なんですよわかります？要は基礎がなってない。本当に今まで生きてこられましたね鬼殺隊でギリギリですよ、全てが俺はアナタの弱い所を徹底的に叩きますから俺の言ったことができるようになるまで食べ物あげませんから!」

小鉄の言い分に炭治郎は絶望していた。

小鉄は元々毒舌だった。しかし父を亡くしたショックでその毒舌も鳴りを潜めていた。だが、無一郎のせいで毒舌が完全復活し、炭治郎はそれに巻き込まれてしまったのだった。

更に小鉄は分析が得意であり、自分の力量を正確に捉えていたのだった。

「この絡繰人形は首の後ろの鍵を回す以外でも、動きの型を変えられるんです。指や手首を回す回数によって動作を決められるんです」

「あの糞ガキには言いませんでしたが、この方法は今は俺だけしか知り得ません。嫌いな奴には死んでも教えねえよ」

つまり絡繰による修行はその持ち主との二人三脚で行われるのが普通なのだ。それを知らなかった無一郎はただ単に時間を無駄にしただけだったのだ。

…

…

…

炭治郎が縁壺零式による修行を始めてから五日が経過していた。

その間小鉄は炭治郎に休憩を与えず、食事は愚か水さえも与えなかった。小鉄は分析力が高い反面、剣術の教え方はドが付く程の素人で、人間の”命の限界”がどれ位なのか分からなかったのだ。

修行の途中で雨が降り、炭治郎はそれで喉を潤したが、失った分を

取り戻すほど量は無かった。

そして七日目にして激しい運動と五日に渡る不眠不休の末、炭治郎の意識は体から離れ、三途の川を渡りかけた。

炭治郎は三途の川に掛けられている橋の上を歩いていると、突然川から腕が伸び、炭治郎を捕まえ、川の中へと引き摺り込んだ。

炭治郎は川の中で自分を引き摺り込んだ相手を見た。

『こんな所で死ぬな！お前が死んだら、誰が禰豆子を人間に戻してやるんだ！誰がカナヲたちを幸せにしてやれるんだ！』

その相手は、白い肌に銀一色の装飾品を着け、腹に全体が白く、縁が緑の小さな太鼓のような物、腰に先端に白い宝玉のような物を着けたバチのような物を取り付けた”鬼”だった。

その”鬼”は炭治郎を川底へ誘導し、”とある石”を指差す。その石は微かに光っており、仄かに匂いもした。

そして炭治郎がその石を掴むと、意識が体に戻った。すると炭治郎の鼻が隙の糸とは”違う匂い”を感じ取った。

それは”どの腕が自分のどの箇所を狙っている”のかがわかるものだった。

そして炭治郎は人形の攻撃を避け、足に一撃を与えた。

こうして炭治郎は実に七日ぶりに食事にありつけた。

炭治郎が死に際に獲得した能力は”動作予知能力”と言い、隙の糸

よりも早い段階で匂いを嗅ぎ取ることができ、相手が次に狙ってくる場所がわかるようになるものだった。

そして炭治郎は動作予知能力を使い、人形の動きに直角に戦える程に強くなった。

そして炭治郎は人形の攻撃を掻い潜り、一撃を与えようとするが、一瞬『壊れたらどうしよう』と戸惑う。

「斬ってー！壊れてもいいですから！俺が絶対に直しますから！」

小鉄のその言葉を聞いた瞬間、炭治郎の一撃が人形の首を捉えた。

だが炭治郎は受け身を取れず、思い切り尻を地面にぶつけてしまった。しかも炭治郎が持っていた刀も首を捉えた拍子に折れてしまったのだった。

小鉄が炭治郎の側まで来てふと人形の方を見る。すると首から罫が入り、顔が完全に砕けた。

そして人形の中には“一本の刀”が収まっていた。

「うえええ!!刀、刀が出た！小鉄君、何で人形の中に刀が入ってるの!?!」

「知りませんよ!?!それに刀が人形の中に入っているなんて俺も今知ったばかりですから!!」

炭治郎と小鉄は組体操をしながら興奮していた。

「そうだ炭治郎さん！この刀貰ってくださいよ!!」

「いいの!?!俺が貰っちゃっていいの!?!」

「いいんですよ!持ち主の俺が言うんだから!!」

炭治郎は小鉄から刀を受け取り、いざ鞆から刀を抜く。しかし刀身は長年手入れをしていなかったため、錆び付いていた。

刀が錆びていたことに落胆していた二人の下に、筋骨隆々になった鋼錢塚が現れた。

「お前たちの話は聞かせてもらった。お前たちさえ良かったらその刀を俺に預けてはもらえんか?」

鋼錢塚は錆びた刀を指差す。

「この刀を?どうするんですか?」

「知れたこと。我が鋼錢塚家に伝わる”日輪刀研磨術”で錆を落とし、新品同様に仕上げてしんぜよう」

炭治郎の質問に鋼錢塚は何処ぞの真拳使いのような動きで答えた。

「少年たちよ、ここは彼に任せてみては如何かな?」

そこに鉄穴森が現れた。

「あつ、鉄穴森さん!ご無沙汰です!あの、鋼錢塚さんのこの姿は一体…」

鉄穴森を見た炭治郎は挨拶をする。

「炭治郎君、お久しぶりです。彼の今の姿は山に籠って修行をしていたからなんですよ」

「修行を…？」

炭治郎はなぜ修行をしていたのかわからず、首を傾げた。

「君はずっと刀を彼にお願いしてるでしょう？それが彼にとってはとても嬉しいことなんですよ。だから君が死なないようにもつと強い刀を作るために修行をしていたのですよ」

鉄穴森が鋼錢塚の方を見ると、お面越しでもわかる位に鋼錢塚の顔は真っ赤になっていた。

「この刀が磨き終わるまで三日三晩掛かる。磨き終わったら持つていくから、それまで母屋で寛いでいるがいい」

鋼錢塚は錆びた刀を持って森の中へと姿を消した。

…

…

…

「……と、言うことがあったんだ」

「お前…、そんなことやってたのか……」

炭治郎は鋼錢塚と別れた後、母屋で玄弥と再会し、今までの経緯を

話していた。

「水柱と炎柱の人が」お前の姿が見当たらない” って言って里中探し回っていたんだぞ」

そう、義勇と杏寿郎は炭治郎が森に入った日を境に姿が見えなくなっていたので、鬼に襲われたと勘違いしていたのだった。

そして二人は里中を探し回って、希望が絶望に変わろうとしていた七日目の夕方に、炭治郎が森から帰って来たのを見つけた。

炭治郎を見つけた二人は炭治郎を抱き締めていた。が、その力がかなり強く、炭治郎が失神寸前までいってしまったのだった。

「あはは……。義勇師範と杏寿郎さんには、後で大好物でも振る舞おうかな……。？」

「それがいいと思うぞ？それと多分、暫くの内はピッタリ張り付くと思っぞぞ」

それを聞いた炭治郎は心なしかげんなりしていた。

第16話

七日間にも及ぶ過激な修行の末、”動作予知能力”と戦国時代の刀を手に入れた炭治郎は、その夜に自分の同期である玄弥と語らった。

そして玄弥は『用事がある』と言ってその場はお開きとなり、炭治郎は禰豆子を連れて自分が借りている部屋へと戻った。その後炭治郎は折り紙で鶴を作ったり、禰豆子の髪型を蜜璃と同じ三つ編みにしたり、と禰豆子を喜ばせていた。

炭治郎と禰豆子は遊び疲れたのか、その場で布団も被らずに寝ていた所を無一郎に鼻を摘ままれて起こされたのだった。

「ねえ、鉄穴森って人知らない？」

「知ってますよ。今は鋼錢塚さんの所にいると思いますけど…。良かったら一緒に探しましょうか？」

無一郎は『なぜそこまで人に構うの？』か質問をした。

「人のために何かをすることは結局、巡り巡って自分のためになってくるものだし。俺も行くこうと思っていたから丁度いいんだよ」

炭治郎はそう言って笑顔で返した。

炭治郎の言葉を聞いた無一郎はかなり驚いていた。彼は母親を病気で、父親を事故で亡くした後、”兄”と二人で暮らしていた。しかしその兄も鬼に襲われ死亡。無一郎もまた鬼に襲われ重症を負ったが、何とか討伐した。

そして無一郎は耀哉の妻であるあまねに助けられ、一命を取り留める。その時に無一郎は“記憶喪失”となってしまうのだった。

炭治郎が言った言葉は、無一郎の記憶を取り戻すきっかけとなったのだ。

その時寝ていた禰豆子が起き上がった。その際に頭を炭治郎の顎にぶつけていたが、何ともなかった。

無一郎は禰豆子を見て『変な生き物』と言って首を傾げた。炭治郎は無一郎の言葉に驚き、禰豆子は無一郎の真似をしているのか、無一郎と同じ方向に首を傾げていた。

すると部屋に誰かが来た気配がして、炭治郎と無一郎は障子に目を向ける。

そして部屋に入って来たのは、『上弦の肆・半天狗』だった。

半天狗の気配の誤魔化し方は実に巧妙で、炭治郎は愚か無一郎でさえも視認するまでは鬼とは分からず、呆然としてしまっていた。

しかしそれは瞬きを一回する程の一瞬であり、無一郎は人形から奪った刀で、炭治郎は鋼錢塚が打った予備の刀で応戦した。

『霞の呼吸 肆ノ型 移流斬り』

最初に無一郎が攻撃を仕掛ける。しかし攻撃は半天狗の顔を少し斬るだけに終わり、半天狗は天井に張り付いた。

『ヒノカミ神楽 陽華突』

炭治郎は刀の柄を押しして威力を上げる突きを半天狗に向かって放つ。しかし半天狗は天井から離れ、炭治郎の攻撃を避けた。

しかし天井から離れた半天狗を禰豆子が蹴り飛ばした。だが炭治郎は禰豆子の姿を見て驚いていた。その姿とは、以前遊郭で暴走を見せた鬼の姿であった。

「禰豆子！その姿になるな！」

禰豆子の暴走を危惧した炭治郎は禰豆子に注意をする。その時、無一郎が半天狗の頸を斬った。しかし炭治郎は油断はしなかった。何故なら、遊郭で戦った上弦の陸のように”特殊な条件”で倒さなければならぬと思っていたからだだった。

「時透君、油断しないで！」

炭治郎が無一郎に注意をする。すると頸が斬られた体から”頸”が、斬られた頸からは”体”が生え、それぞれ”別の鬼”に姿を変えてしまった。

炭治郎と無一郎はそれぞれ別の鬼を相手にしようとする、無一郎が向かっていた鬼が団扇を扇ぐと、もの凄い突風が吹き荒れ、家屋を壊し、無一郎を遙か彼方へ吹き飛ばしてしまった。

炭治郎は禰豆子に捕まり、禰豆子もまた破損した壁にしがみつき、突風を凌いでいた。

「カカカツ、楽しいのう。豆粒が遠くまでよく飛んだ。なあ”積怒”」

「何も楽しくはない、儂はただひたすら腹立だしい。”可樂”…、お前と混ざっていたことも」

団扇を扇いだ鬼”可楽”は錫杖しゃくじょう（お坊さんが持つ輪っかが付いた杖）を持った鬼”積怒”に話しかけるが、あっさりとおしらわれた。

炭治郎が二体の鬼に攻撃を仕掛けようとすると、積怒が錫杖の石突きを畳に叩きつける。するとそこを起点として放射状に雷が走った。

炭治郎は当然それを喰らってしまい、意識が飛びそうになる。そして炭治郎は屋根の上に人影があるのを見た。

それはこちら銃口を向けている玄弥だった。

玄弥は用事を済ませ、母屋に戻っている最中に突風が吹いたのを見た。そして炭治郎の下に鬼が現れたことを察した玄弥は急いで屋根の上に登り、銃口を鬼に向けたのだった。

玄弥は銃の引き金を引き、銃口が火を吹く。そして積怒と可楽の頸を撃ち落とした。

玄弥が撃った弾は日輪刀と同じ素材で生成された”散弾”だった。その散弾によって積怒の頸を撃ち落としたが、可楽に関しては首の皮一枚繋がっていた。

「ちっ、一匹仕留め損ねたか！」

玄弥は腰に差していた刀で可楽の頸を斬ろうとする。

「駄目だ玄弥！この鬼は頸を斬っても倒せない！斬ったら斬っただけ”分裂”する！頸を斬らせるのはわざとだ！」

炭治郎は玄弥に注意をするが、時既に遅し。玄弥の刀は可楽の頸を

斬っていた後だった。

積怒と可楽の体は自身の頸を再生させ、斬られた頸からは新しい体が再生されていた。

炭治郎は四体の鬼の規則性や急所を探そうとする。すると背中から猛禽類を思わせる翼を生やし、手足もまた、猛禽類の足の形をした鬼”空喜”が炭治郎を掴んで空を飛んでいた。

炭治郎は禰豆子に玄弥を助けるように頼もうとすると、玄弥が積怒の頸から再生した哀絶が持つ槍に体を貫かれていた。

「自分の心配より他人の心配とは、余程余裕があるようだのう」

空喜は口を大きく開け、衝撃波を放つ。炭治郎はそれを喰らってしまった。だが、炭治郎もまた、ヒノカミ神楽で空喜の足を斬っていた。

炭治郎は落ちながら枝に手足を引っかけ、何とか地面への衝突を免れた。そして起き上がろうとした時に、自分の足を掴んでいた空喜の足から顔が生え、衝撃波を放とうとしていた。

炭治郎は咄嗟に顔を斬ってしまった。炭治郎はそれが敵を増やすことになることを斬った後に思い出していた。

炭治郎は分裂した顔から放たれた衝撃波を受けるが、”威力が弱まっている”ことに気づいた。

そう、半天狗の分身体は”空喜”、”積怒”、”哀絶”、”可楽”の四体の時”のみ”絶大な力を発揮する。そしてそれ以上に分裂すると、それ相応に”弱くなる”のだ。

炭治郎はそのことを看破し、再生した口を刀で突き刺した。

そして炭治郎は自分の後ろに空喜の本体”がいることに気づいた。空喜は衝撃波を放つが、炭治郎は横飛びで回避した。その時、炭治郎は刀で突き刺した口が”消えている”ことに気づいた。

だがそこに空喜の爪が迫り、炭治郎の体を切った。

「どうだ俺の爪は！この速度、切れ味！金剛石をも砕く威力だ！震えるがいい、歡喜の血飛沫をもっと上げてみせろ！」

「お前もな」

体を切られた炭治郎が不敵に笑う。すると空喜の頸が”縦”に斬られていた。空喜は衝撃波を放とうとすると、それよりも速く炭治郎が空喜の口を斬った。

が、空喜は即座に斬られた箇所を再生させ、持ち前のスピードで炭治郎を翻弄する。しかし炭治郎もまた負けてはいなかった。

炭治郎は空喜の”弱点”である”体の軽さ”に気づき、空喜の舌に刀を突き刺し、その勢いで母屋の壁を破壊した。

そして炭治郎が目にしたものは、『積怒の錫杖によつて喉を貫かれて感電している禰豆子』の姿だった。

炭治郎は禰豆子を助けるために積怒に迫る。積怒は手から新たに錫杖を作り、炭治郎に突き刺そうとした。しかし炭治郎はいつの間にか斬っていたのか、空喜の足を盾にして錫杖を受け止めた。

それは偶然にも、錫杖の雷撃を通すことは無かった。炭治郎は積怒

の舌を口ごと斬り、禰豆子の喉に刺さった錫杖を空喜の足を使って抜いた。

しかし禰豆子のことに集中し過ぎたため、後方警戒を怠ってしまい、積怒の錫杖が首の後ろに迫ってしまった。

『このままでは貫かれてしまう』そう思った炭治郎だが、それは杞憂に終わった。何故なら、禰豆子が錫杖を”掴んで”いたからであり、炭治郎は首に少し刺さっただけとなった。

その後禰豆子は爆血で積怒を燃やし炭治郎から離れさせた。しかしそこに可楽が現れ、団扇から突風を繰り出し炭治郎と禰豆子の二人を押しえつけた。

その突風の威力は凄まじく、二人がいる畳を団扇の形に繰り抜く程だった。そして二人はその衝撃によって気絶してしまったのだった。

…

…

…

その頃里は大騒ぎになっていた。何故なら『上弦の伍・玉壺』が放った”使い魔”が里で大暴れしていたからだだった。

「水の呼吸 参ノ型 流流舞い」

「炎の呼吸 壺ノ型 不知火」

しかし被害はそれほど大きくは無かった。その理由は義勇と杏寿

郎の二人が使い魔を悉く倒していたからだった。

「この辺りは粗方片付いたな」

「うむ！しかしこうも多くてはいずれ重傷者や死者を出してしまいかねん！どうしたものか…」

義勇と杏寿郎は使い魔を倒しながらこの状況を打破しようと考えていた。

「今は甘露寺がこちらに戻っていると思うから、それまでは持ち堪えさせてみせよう！」

「そうだな…つと、言ってる間に団体客がご到着のようだ」

二人が話している間に、使い魔が四方八方からワラワラと現れた。どうやら義勇と杏寿郎の二人を最大の脅威と捉えたようだ。

「このままでは埒がいかん！富岡、お互いの最強の型で始末しないか！」

「奇遇だな。俺も同じ提案をしようと思っていた所だ」

義勇と杏寿郎は互いに笑い合うと

「水の呼吸 拾ノ型…」

「炎の呼吸 奥義…」

最強の型を繰り出すために刀を構えた。そして

「生生流転！」

「玖ノ型 煉獄！」

それぞれの最強の型で使い魔を全て倒した。

「水柱様く！、炎柱様く！」

そこに里の人が手を振りながら走って来た。

「今恋柱様がご到着されて、長を無事に救出されました！」

どうやら蜜璃が長を救出したことを伝えに来たようだ。

「流石は甘露寺！見事だ！」

「感心している場合か？今は一人でも多く助けるのが先だ」

義勇はそう言って、先にその場を去った。杏寿郎も義勇の後を追う形でその場を去り、使い魔を次々に倒していった。

…

…

…

「ええいつ、ちよこまかと逃げるなあ!!」

その頃炭治郎たちは積怒の雷から逃げていた。炭治郎は禰豆子に担がれ、そこで目を覚ました。空喜の突進を回避した炭治郎たちは建

物の中に避難するが、可楽の突風で母屋は破壊された。

禰豆子は瓦礫に挟まれる際に炭治郎の刀を握った。そして刀身に禰豆子の血が付着すると、爆血が発動し、漆黒だった刀身が徐々に赫くなつて炎を纏い始めた。

禰豆子の力によって作られた刀『爆血刀』を携えた炭治郎は積怒たちの前に立ちはだかった。

『ヒノカミ神楽 日暈の龍 頭舞い』
かぶりま

そして積怒、可楽、空喜の三体の鬼の頸を斬った。

炭治郎は哀絶の頸を斬ろうとその姿を探していると、体を木に槍で固定され、頸を斬られた哀絶と、その頸を持った玄弥の姿が見えた。

「玄弥！」

炭治郎は玄弥に声を掛ける。玄弥は首を炭治郎の方に向けた。そして炭治郎は驚いていた。玄弥の姿は眼球は黒く染まり、歯から牙も生えて、まるで“鬼”のようだった。

「炭治郎か。その様子だと、そつちも鬼を倒したようだな」

「玄弥…、お前まさか”鬼喰い”を…」

「ああ、そうしないとヤバかったからな」

鬼喰い

それは鬼の血肉、或いは血鬼術で生成された物の一部分など、『鬼の

一部』を喰らうことで一時的に鬼になれる”異能力”である。

だがこれを多く使用すれば、自我を失い、人喰い鬼になってしまう。正に『諸刃の剣』である。

炭治郎は玄弥から”鬼喰い”のことを聞いてはいた。しかし炭治郎はふと、『ある違和感』を感じた。

「あれ？玄弥、”鬼喰い”をしたら自我が薄くなるんじゃないか？」

炭治郎が感じた違和感、それは”玄弥の自我”であった。

「それに関しては俺も疑問に思っている。ヤバくなった時にお前の妹から分けてもらった髪を喰ったんだが、いつまで経っても自我が無くなりそうにないんだよ」

玄弥は炭治郎と別れる前に、鬼喰いのことを話しており、炭治郎の許可をもらって禰豆子の髪を一房もらっていたのだった。

そして哀絶と戦っている時に、哀絶の隙を見て禰豆子の髪を喰い、鬼の力を得て哀絶に攻撃をしたのだった。

だが玄弥は禰豆子の髪を喰った後も”自我を保ったまま”であったため、玄弥自身も不思議に思っていたのだった。

「あつー！そうだ禰豆子ー！」

炭治郎は急いで禰豆子の下へ向かい、瓦礫を取り除いて禰豆子を救出した。

「もしかしたら、禰豆子が原因かもしれない…」

瓦礫から助けた禰豆子を抱き締めた炭治郎は玄弥の鬼喰いをして
も自我を保っている原因を察した。

「どういうことだ？」

玄弥は炭治郎に質問をし、炭治郎は禰豆子が他の鬼とは違うことを
話した。

「なるほどな…。それだったら合点がいく」

玄弥も炭治郎の憶測に納得していた。

「!?、危ない！」

炭治郎は早々に再生した積怒の雷に気づき、玄弥と禰豆子を避難さ
せた。

「玄弥、俺が匂いで”五体目”の鬼を探る！きつとそいつが”本体”
だ！見つけたら知らせるから玄弥がその鬼の頸を斬ってくれ！」

炭治郎はそう言つて、周囲の匂いを嗅いだ。

「(団扇の鬼が突風を使ったおかげで温泉特有の硫黄の匂いが流れて
いる！探るなら今しかない！探れ探れ！集中するんだ！)」

炭治郎は硫黄の匂いが充満するまでの間に本体の匂いを探った。
そして

「大丈夫、大丈夫じゃ…。儂は見つからぬ。悪い奴らは喜怒哀楽が倒

してくれる…」

茂みの中に隠れている鬼を見つけた。

「いた!!いた!!いた!!見つけた…、五体目、本体の鬼…!!」

第17話

「玄弥ーっ！北東に真っ直ぐだ！五体目は低い位置に身を隠している！今すぐ向かってくれ！援護する！禰豆子！玄弥を援護しろ！鬼に玄弥の邪魔をさせるな！」

「半天狗の”本体”を見つけた炭治郎は玄弥に位置を知らせ、禰豆子に玄弥の援護をお願いする。

炭治郎は爆血刀で、禰豆子は爆血で喜怒哀楽の鬼の邪魔をする。

「玄弥ーっ！右だ、南に移動している！探してくれ！」

玄弥もまた、炭治郎の指示に従って本体を探す。

「西だ、もっと右！近くなっている！低い所を探すんだ！」

玄弥は炭治郎の指示通りに低い所を探す。すると

「ヒィィ」

『鼠ほどの大きさの鬼』が茂みの中に隠れていた。

「(ちっさ!!!)」

本体を見つけた玄弥はその小ささに驚いていた。しかしそれも束の間、玄弥は銃を本体に向けてぶっ放すが、当たらなかった。

「(くそつたれが、こんな野ネズミ程度の大きさの鬼なんて、普通見つけられるか!?喜怒哀楽の鬼が強力すぎんだよ！あんなのをこんなチ

ビが操ってんのか!?あの四体を相手にしながらのネズミ取り、面倒くせえぜ!」

玄弥は刀で本体の頸を斬ろうとする。そして刃が本体の頸に当たる。

「よし、いける!」

玄弥は勝利を確信した。その時

パキンツ

刀が頸に当たっていた所から折れてしまったのだ。

「んなっ!?（刀が折れた…だと!?コイツの頸、一体どれだけ硬えんだよ!?!）」

玄弥は次に銃で本体を狙うが、当たっていないのか、それとも当たっても効果が無かったのか、本体は無傷だった。

そこに積怒が玄弥の後ろから襲い掛かった。だが炭治郎が積怒の腕を斬ったことよって玄弥は首を貫かれずに済んだ。

「玄弥、諦めるな!次は絶対に斬れる!俺たちが援護する!」

すると炭治郎の後方から哀絶が現れた。

『激涙刺突』

哀絶は高速の突きを炭治郎に向けて放った。しかし炭治郎は無傷だった。

「げ…、玄弥…」

何故なら、玄弥が炭治郎の”盾”となっていたからだだった。

「炭治郎…、お前が斬れ…。俺の刀じゃ…、斬れない…。心配…するな…。今の…俺な…ら、これく…らい、再生…、できる…」

玄弥に背中を押された炭治郎は半天狗の本体の頸を狙いに走る。その途中で玄弥が銃を使って攪乱し、遂に炭治郎の爆血刀が本体の頸を捉えた。

その時、炭治郎は後ろから”もの凄い殺気”を感じ取った。

そして太鼓を叩く音がした瞬間、炭治郎がいる地面から樹木が生えた。しかも樹木の先が竜の形になっており、炭治郎を噛み砕こうとしていた。

しかし寸前で禰豆子が炭治郎を庇い、助けた。だが禰豆子は無傷とはいかず、片足を樹木竜に喰われていた。

禰豆子は喰われた片足を再生させるが、着地に失敗した。しかも血を流し過ぎたのか、ぐったりしていた。

「弱き者」をいたぶる鬼畜…、不快、不愉快、際まれり。極悪人共めが」

炭治郎たちは声がした方を見ると、背中に『憎』と書かれた太鼓を背負った”子供の鬼”と、樹木に守られるように踞っている本体がそこにいた。

「ろ…。」六体”目…」

「違う！炭治郎、ソイツはあの四体の鬼の”集合体”だ！俺は見た！ソイツは最初は”怒りの鬼”だった！けど、怒りの鬼が手を掲げた瞬間に、”団扇を持った鬼”と”鳥のような鬼”が吸収されたんだ！」

「その後に”槍を持った鬼”の所に行つてその鬼を吸収したと思つたら、ソイツになつたんだよ！」

炭治郎が新たに出た六体目の鬼に驚いていると、玄弥が看破し、事情を説明した。

すると六体目の鬼が太鼓を叩き、本体を樹木の中に隠そうとする。

「待てー！」

炭治郎がそれを止めようとする、六体目の鬼が炭治郎を睨んだ。すると炭治郎たちはその”威圧感”に当てられ、立ち止まってしまった。

「何ぞ？貴様、儂のすることに何か不満でもあるのか？のう、悪人共めら」

六体目の鬼”憎珀天”どうはくてんは更に威圧を増す。玄弥と禰豆子は動くことすら儘ならない中、炭治郎は顔を俯きながら疑問に思ったことを口にした。

「どうして、どうして俺たちが悪人なんだ？」

「知れたこと、”弱き者”をいたぶるからよ。のう？先程貴様らは手のひらに乗るような”小さく弱き者”を斬ろうとした。何という極

悪非道。これはもう鬼畜の所業だ」

憎珀天は炭治郎の疑問に律儀に答えた。

”小さく弱き者”ふざけるな。お前が喰った人間の数…、百や二百じゃない、軽く千は越えているだろう。その人たちがお前に何をした？どんな罪を犯した？その命をもって償わなければならぬことをしたのか!!?”

憎珀天の答えに炭治郎の堪忍袋の緒が切れた。

「罪無き人を殺して喰っておいて、被害者面するのは止めろ!!俺たちから見れば、お前の方が悪人だ！命を何とも思わないその性根、万死に値する！貴様の頸は、俺が斬る！」

顔を上げた炭治郎の額には、陽炎のような”痣”が浮かんでいた。

「ならばやってみせよ。儂とお前、どちらが先に悪人を裁くか、勝負といこうか」

憎珀天は背中の太鼓を叩き、樹木竜を操作する。

炭治郎は樹木竜を避けながら憎珀天に迫るが、樹木竜が多く、中々近づくことができなかつた。

「(あの鬼が操る木の竜の頭は五本、一本一本が伸びる範囲はおよそ6尺！よし、ひとつ分かつたぞ！)」

炭治郎は樹木竜の攻撃を避けながら分析をしていた。そして口を開けた竜に”ヒノカミ神楽 碧羅の天”を繰り出そうとすると、その口から”空喜の衝撃波”が放たれた。

炭治郎は衝撃波を諸に喰らってしまった、鼓膜が破れてしまった。更には目が回り視界が定まらなくなっている所に、炭治郎の”動作予知能力”が働き、炭治郎はその場を離れた。その直後に炭治郎がいた所が”天狗の団扇の形に凹へこんだ”。

炭治郎は完全に避けたと思っていたが、実際には左足に攻撃を喰らっており、足から血が出ていた。

「喜怒哀楽の鬼の力も使えるのか!?!しかも攻撃力が上がっている…!」

その後も憎珀天は太鼓を叩き、喜怒哀楽の力を使い炭治郎を追い詰める。炭治郎は樹木竜が届かない場所まで移動するが、竜の口から更に竜が次々に現れ、炭治郎の腕に噛みついた。

そして炭治郎は樹木竜に引き寄せられてしまい、喰われてしまった。

禰豆子と玄弥は炭治郎を助けに行きたかったが、炭治郎同様樹木竜に捕まっけていて、向かうことすら出来なかった。

炭治郎は樹木竜の中で押し潰されそうになるが、”誰か”が樹木竜を斬り、炭治郎を救出した。

「キヤーツ、すごいお化け!なあにあれ!?!大丈夫!?!ごめんね、遅れちゃって!ギリギリだったね!」

炭治郎を救出したのは蜜璃だった。蜜璃は炭治郎を地面に降ろし、憎珀天の前に立った。

「ちよつと君！おイタが過ぎるわよ！彌豆子ちゃんと玄弥君も返して
もらうからね！」

蜜璃は憎珀天を叱る。

「黙れあばずれが。儂に命令して良いのはこの世で御一方、”あの御
方”のみぞ」

蜜璃は憎珀天に”あばずれ”と呼ばれたことにショックを受けて
いた。

『狂鳴雷殺』
きょうめいらいざつ

蜜璃が呆然としている瞬間、憎珀天が蜜璃に攻撃を仕掛けた。

『恋の呼吸 参ノ型 恋猫しぐれ』

しかし蜜璃はその攻撃を”斬った”。これを見た炭治郎はかなり
驚いていた。

蜜璃の愛刀はとても薄く柔い鉄珍特性の”しなる刀”である。こ
の刀と女性特有の関節や筋肉の柔らかさを用いることで先程の芸当
ができるのである。

『恋の呼吸 式ノ型 懊悩巡る恋』
おうのう

『陸ノ型 猫足恋風』

蜜璃は次々に来る攻撃を斬って凌いだ。

「(この速さでもついて来るか。なら、術で埋め尽くす)」

『血鬼術 無間業樹』
むけんごうじゆ

憎珀天は樹木竜を更に数倍の数に増やして攻撃を仕掛けた。

「(広範囲の術!?受けきれるかしら!?)」

『恋の呼吸 伍ノ型 揺らめく恋情・乱れ爪』

しかし蜜璃はこれも捌いてみせた。そして蜜璃の刀が憎珀天の頸を捉えた。しかしそれは悪手だと知ることになる。

「甘露寺さん、駄目だ!そいつは”本体”じゃ無い!頸を斬っても死なない!」

炭治郎の言葉によって。

「(えっ!?やだホントに!?判断間違えちゃった…!)」

憎珀天の口から攻撃が放たれようとしたその瞬間

「炎の呼吸 伍ノ型 炎虎!」

炎の虎が憎珀天に襲い掛かった。それと同時に禰豆子と玄弥を拘束していた樹木竜が焼かれ、二人は助かった。

「甘露寺よ、大丈夫か!」

蜜璃の下に杏寿郎が現れた。

「師範!?なんでここに!?里の方は…」

「心配無用だ！襲っていた奴らはいなくなった！それに里には富岡もいる！だから俺が来た！」

杏寿郎は蜜璃を心配させまいと声を張った。

「竈門少年！この鬼は俺たちが引き受ける！君たちはもう一体の方を頼む！」

杏寿郎は憎珀天に刀を向ける。

「分かりました！禰豆子、玄弥！行くぞ！」

杏寿郎に助けられた禰豆子と玄弥は、本体が隠れている方へ走った。

…

…

…

半天狗の本体が隠れている樹を見つけた炭治郎たちは、本体を引き摺り出そうとするが、まるで蛇のように樹が動いたため、振り落とされそうになっていた。

「（くそつ、こんな状態じゃ刀を満足に振れねえ！刀をちゃんと振ろうとすれば、この樹の動きで振り落とされる！この状態を打破する方法は…）これしかねえ！」ガブリツ ガジガジ

何を思ったのか、玄弥はいきなり樹木の幹に齧りついた。そして

ビーバーの如くそのまま幹を喰い破っていった。

「(玄弥!? 何て硬い歯なんだ! でもこれならいける!) 玄弥、頑張れ! もう少して倒れるぞ!」

炭治郎の応援が玄弥に力を与えたのか、玄弥の噛むスピードが早まり、遂に幹を噛み切った。

そして地面に落ちた樹を炭治郎が斬ろうとすると、枝が鞭のように動き、炭治郎を妨害する。しかし禰豆子が爆血を使い、樹を燃やす。

炭治郎は禰豆子の爆血を宿した”爆血刀”を振りかぶり

『ヒノカミ神楽 炎舞』

二連の斬撃で本体が隠れている樹の”玉”の部分斬った。そして禰豆子と玄弥が斬った箇所を掴み、玉を広げる。炭治郎が本体を狙おうとするが、そこには既に本体は”いなかった”。

「(いない!? また逃げた! どこだ、どこにいる!? どこ…!)」

炭治郎は周囲を見渡すと、逃げている本体を見つけた。

「貴様アアア!! 逃げるなアア!! 責任から逃げるなアア!!」

炭治郎はとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「炭治郎、退け! この耄碌爺イ、いい加減に、しやがれエエエ!!!」

ブオン

すると玄弥が周辺に生えていた木を引っこ抜き、本体に向けてぶん投げた。

「……………」もんげー

玄弥のこの行動に、炭治郎と禰豆子は驚きを隠せなかった。

玄弥は更に木を次々に引っこ抜いては本体に投げるを繰り返し、逃げ場を封じた。そこに禰豆子が現れ、爪で引っこ掻こうとするが、本体のスピードがやけに速く、当たらなかった。

炭治郎はどうかして本体に追い付こうと考えていると、ふと以前善逸が言っていたことを思い出した。

「雷の呼吸って一番足に意識を集中させるんだよな。自分の体の寸法とか筋肉の一つ一つの形って案外きちんと把握できてないからさ、『それら全てを認識してこそその”全集中”なり』って、俺の育手のじいちゃんがよく言ってたよ」

炭治郎は善逸が言っていたことを実践する。

「（筋肉の繊維一本一本、血管の一筋一筋まで空気を巡らせる。力を足”だけ”に溜めて、溜めて、空気を切り裂く雷鳴みたいに、一気に爆発させる！）」

本体を追い掛けていた玄弥と禰豆子よりも速く、炭治郎は本体に追いついた。それを見た玄弥と禰豆子は驚いていた。

そして炭治郎の刀は本体の頸を捉え、半分の所まで一気に斬った。

「お前はああ、儂がああああ、可哀相かわいそうだとは、思わんのかアアアア!!!」

すると本体が急に大きくなり、炭治郎に襲い掛かった。

「弱い者いじめをオ、するなあああ!!!」

半天狗は炭治郎の顔を掴み、握り潰そうと力を込める。

「それは貴様の理屈だろうが！自分の理屈を、他人に押し付けるな!!」

そこに玄弥が到着し、炭治郎を掴んでいる手を放そうとする。更に禰豆子が自分の血を浴びせ、燃やす。半天狗は思わず怯み、炭治郎を掴んでいた手の力を弱めてしまった。

そして玄弥は自分ご持てる力を出し、半天狗の両腕を引き千切った。その表示に半天狗は後ろに傾く。だがその先はちようど崖となっており、半天狗は炭治郎と炭治郎を助けようとしていた禰豆子諸とも崖下へと落ちてしまった。

両腕を引き千切られ、頸に刀が食い込んだ半天狗は栄養を取るために餌である人間を探しに歩く。

「待て」

そこに崖の中腹辺りに生えていた木に引つ掛かった炭治郎が言葉を発する。

「逃がさないぞ…。地獄の果てまで追い掛けて、頸を…斬るからな…！」

炭治郎の殺気に半天狗は一瞬、身震いした。だが、振り向いた先に、刀を多数持った里の職人がおり、半天狗はそこへ向かった。

炭治郎は木から滑り降り、半天狗を追い掛けようとする。しかし今までのダメージが蓄積されているせいなのか、思うように体が動かなかった。

そこに炭治郎の前に刀が一本突き刺さった。しかもその刀は炭治郎が鋼錢塚に託した刀であった。

「炭治郎！」

炭治郎は周囲を見渡していると、自分を呼ぶ声がしたのでそこを見つみると、そこには無一郎がいた。

「炭治郎、それを使え！夜明けが近い！鬼が逃げるぞ!!」

炭治郎は無一郎に感謝しながら刀を抜く。そして

『円舞一閃』

半天狗の後ろから一気に刀を振り抜き、半天狗の頸を斬った。

炭治郎は禰豆子を陽光から遠ざけるために禰豆子に近づくが、逆に禰豆子の方から炭治郎に近づいた。

そして禰豆子が指を差し、そこに目を向けると、頸を斬られた半天狗の体が職人を襲おうとしている所だった。

炭治郎は斬った頸を見ると、舌には“恨”^{うらみ}の文字が書かれていた。

「(舌に恨み!?本体の舌に書かれていた文字は“怯”^{おびえ}だったはず…、舌の文字が違う!)」

炭治郎は舌の文字が違うことに気づき、体を追い掛けようとする。しかしその時、運悪く夜明けが訪れた。

《鬼である禰豆子は陽光を浴びると、消滅してしまう。》

今正に禰豆子は陽光を浴び、体が焼け始めてしまった。

炭治郎は自らの体を影にして禰豆子を守ろうとする。その時、禰豆子が巴^{ともえな}投げの要領で炭治郎を投げ飛ばした。

炭治郎はその瞬間、禰豆子が”笑っている”のを見た。

そして着地した炭治郎は、半天狗を追い掛けながら本体がどこにいるのか鼻を使って探した。鼻から得る情報を取捨^{しゅせんたく}選択し、そして心臓の中にいる本体を見つけた。

炭治郎は跳躍し、鬼の腕を斬る。

「その命をもって罪を償え！」

炭治郎は鬼の体を袈裟斬りにし、心臓に隠れている本体の頸を斬った。

…

…

…

炭治郎は鬼を倒した後、その場に踞ってしまった。理由は禰豆子を

”死なせて”しまったからだった。

しかし職人たちが炭治郎に声を掛け、後ろを指差す。そこには

「お、お、おはよう」

なんと死んだはずの禰豆子が立っていたのだった。

第18話

『炭治郎さん、十二鬼月と禰豆子さんの血を提供し、研究に協力してください。ありがとうございます。浅草で無惨に鬼にさせられた男性が自我を取り戻しました。禰豆子さんの血のお陰です』

『無惨の支配からも解放され、少量の血で生きていられる。禰豆子さんの血の変化には驚いています。この短時間で何度も何度も変化している。私はずっと考えていました。禰豆子さんが未だに自我を取り戻さず、幼子のような状態にいる理由を』

『恐らく禰豆子さんの中では、自我を取り戻すよりも重要で、優先すべきことがあるのではないか』

『炭治郎さん、これは完全に私の憶測ですが、禰豆子さんは近いうちに太陽を克服すると思います』

…

……

………

炭治郎は太陽を克服した禰豆子に近づいた。そして生きてくれたことに喜び、禰豆子に抱きついた。

その様子を崖から降りた玄弥が見ており、喜びを感じ、笑っていた。

…

……

……

その頃、憎珀天と戦っていた杏寿郎と蜜璃は、突如憎珀天が崩壊したことに驚き、そして炭治郎が本体を倒したことを察した。

…

……

……

ここは日本にあるとある屋敷。その部屋の一室で少年が本棚にある本を床にブチ撒けていた。

「遂に太陽を克服する鬼ものが現れた…！よくやった半天狗!!」

少年は喜びの余り、入室していた女性の首を”破壊”してしまつた。

「これでもう”青い彼岸花”を探す必要も無い。クククツ、永かつた…!!しかしこの為…、この為に千年…！増やしたくもない同類を増やし続けたのだ…！」

「十二鬼月の中にすら現れなかった稀有な存在…、選ばれし鬼！あの娘の鬼を喰って取り込めば、私も太陽を克服できる…!!」

少年は自分の体を変化させ、青年の姿となった。しかし、その口からは牙が見え、瞳も紅梅色で瞳孔が猫のような縦長となっていた。

そう、その少年の正体とは、鬼舞辻無惨が”擬態”した姿だったのだ。

正体を隠す必要がなくなった無惨は、屋敷にいる者全てを殺し、姿を消した。後に警察が到着し、犯人を探すために捜査を開始するが、犯人が見つかるはずもなく、事件は迷宮入りとなった。

…

…

…

炭治郎は遊郭の時と同じように禰豆子におんぶされた状態で無一郎と合流した。無一郎は小鉄に肩を借りていた。

そこに蜜璃が走って来て、炭治郎、禰豆子、玄弥、小鉄、無一郎を抱き締めた。

「よもやよもや、まさか竈門少女が太陽を克服するとは…」

更には杏寿郎も蜜璃に追い付き、太陽を克服した禰豆子を見て驚いていた。

「煉獄さん！助太刀、ありがとうございます！」

炭治郎は蜜璃に抱き付かれたままの状態でお礼を言った。

「何これしきのこと、柱であれば当然のことだ！だがまあ、礼は受け取っておこう！」

杏寿郎は炭治郎の礼を受け取った。

「さて甘露寺よ！皆疲れている、早く離して蝶屋敷まで運ばないとな！」

杏寿郎は蜜璃に皆を離すよう言い、一先ず里の母屋へと向かった。

後日、連絡を受けた隠の者たちが到着し、怪我人を蝶屋敷まで運んで行った。

…

…

…

「そうなんですね。もう拠点を移して…」

「空里^{からい}」って言うのをいくつか作ってんのよ。何かあったらすぐ移れるようになってな」

炭治郎は蝶屋敷のベッドの上で見舞いに来た後藤と里について話していた。

「つーかよう、お前また七日も意識無かったのに、そんなに食って大丈夫なのかよ？」

炭治郎のベッドの上には、アオイが作ったおにぎりがあった。しかも、さりげなく匂でも無いのに、炭治郎の好物である”タラの芽の天ぷら”までもあった。

「はい！甘露寺さんもいっぱい食べるって言ってたんで！」

炭治郎は蜜璃の真似をするために、食事をたくさん食べるようにしていた。

「あの人はちょっと意外な気がするけどな…。恋柱様と霞柱様は二日眠ってその後三日でほぼ全快だったんだって？」

「はい。尊敬します」

「（いや、お前も段々と近づいてんだよ……。段々とな…）まあ…、お前がそれでいいのなら、それでいいんだがよ…」

「??？」

後藤の独り言に首を傾げる炭治郎であった。

「あつ、そうだ！これを一番聞きたかったんだわ。お前の妹、太陽を克服したって聞いたけど、大丈夫なのか？」

後藤は一番疑問に思っていたことを炭治郎に質問する。

「はい、大丈夫ですよ。太陽の下トコトコ歩いてますね。今までは夜にしか歩けなかったんで嬉しい限りですよ」

炭治郎は禰豆子が日中においても大丈夫であることに喜びを感じていた。

「でもそれって、”人間に戻りかけている”のか”鬼として進化している”のか分からねえんじやねえのか？」

後藤は誰しもが思うことを炭治郎に質問した。

「はい、なのでしのぶさんと珠世さんが一緒に調べるそうですね」

「珠世さんって、誰だ？」

後藤は炭治郎の口から聞かない名前を聞いたので、質問をする。

「珠世さんは俺が浅草での任務の時に出会った人で、鬼ではあるんですが、医者でもあるんです。今、禰豆子の血などを調べて『鬼を人に戻す薬』の研究をされているんです」

炭治郎は珠世のことを後藤に説明した。

「へえ、そうか。因みにだが、その珠世さんって美人か？」

後藤は炭治郎に顔を寄せて内緒話をするように声を小さくして聞いた。

「美人ですよ。でも、色目はしない方がいいですよ？ 愈史郎さんが怒りますから」

炭治郎は注意をしながら後藤の質問に答えた。

「そっかそっか。あ、話はお前の妹のことに戻るけど、あの善逸黄色い頭の奴に知られたら、ヤバいんじゃないかね？」

後藤は話の路線を切り替え、これから起こるであろうことを話した。

…

……

……

「ギィイヤアアア（汚い声）!!」

後藤が懸念していたことが、今正に蝶屋敷の庭で起きていた。

禰豆子は普段自分の散歩や遊びの相手をしてくれているアオイたちを手伝うために、中庭で洗濯物を干していた。

その途中で善逸が任務から帰還し、中庭に出ると、禰豆子の姿を見た瞬間に甲高い汚い声を発したのだった。

「可愛い過ぎて死にそう!」

善逸は禰豆子に近づいて手を握り

「どうしたの禰豆子ちゃん喋ってるじゃない!俺のため?俺のためかな?俺のために頑張ったんだね!とても嬉しいよ俺たち遂に結婚かな!?!」

「月明かりの下の禰豆子ちゃんも素敵だったけど、太陽の下の禰豆子ちゃんも堪らなく素敵だよ!素晴らしいよ!結婚したら毎日寿司と鰻食べさせてあげるから!安心して嫁いでおいで!」

ハチャメチャなことを叫んでいた。しかしこの後の禰豆子の発言で一気に空気が白けることになった。

「おかえり、”いのすけ”」

ヒュ〜ッ

善逸の足下に枯れ葉が一枚、宙に舞った。

「あいつ今どこにいる？…ちよつと殺してくるわ…」

善逸は怒りを露にしながら伊之助を探しに行った。

禰豆子が善逸を伊之助と言った理由は、任務で怪我を負った伊之助が、蝶屋敷に来た際に禰豆子に自分の名前を覚えさせたのが原因であつた。

…

…

…

そしてこの日は、緊急柱合会議が産屋敷邸で開かれていた。

「刀鍛冶の里を上弦の肆・伍が襲撃。だが炎柱と水柱が里を防衛し、霞柱が伍を、炭治郎が肆を討伐…か。羨ましいぜ全く」

実弥は愚痴る感じで独り言を言った。

「愚痴愚痴言うな不死川。甘露寺と時透、その後、体の方はどうだ？」

小芭内が実弥の独り言を注意し、蜜璃と無一郎の容態を確認した。

「あつ、うん。ありがとう、随分良くなったよ。（キヤ〜、伊黒さんが

心配してくれてる！嬉しい！」

「僕もだいぶ良くなったよ…。まだ本調子じゃ無いけど…」

蜜璃と無一郎はそれぞれ返事をした。

「今は柱が一人欠けているだけで済んでいるが、これ以上柱が欠ければ鬼殺隊が危うい…。上弦相手に死なずに済んだことは幸いだ…」

行冥は数珠をジャリジャリ鳴らしながら二人を労った。

「うむ！上弦の肆は竈門少年が倒したが、時透少年は一人で上弦の伍を倒したことは実にめでたい！」

杏寿郎も行冥に習って無一郎を労った。

「それにしても、お二人の傷の治りが異常に早いですね。何があったんですか？」

しのぶは蜜璃と無一郎の傷の治りが早いことに疑問を持ち、質問をする。

「そのことも含めてお館様からお話があるだろう。それとしのぶ、もうすぐお館様がいらっしゃる。そろそろ離れたらどうだ？」

義勇はしのぶの疑問に答え、今のしのぶの行動を注意した。今しのぶは義勇の腕にしがみついている格好をしていたからだった。

「嫌ですか？」

しのぶは義勇の肩に頭を乗せ、上目遣いで義勇を見る。

「嫌では無い。寧ろ女性からこういったことをされるのは男として誇らしい。だが、あまり度が過ぎると、一部の隊士から嫉妬の眼差しを受けるんだ。それが辛い」

義勇はしのぶの色気に負けた。

「大丈夫ですよ。お館様たちが来られたら離しますから」

「ならいい」

どうやら二人の間で話が纏まったようだ。

「大変お待たせ致しました。本日の柱合会議、当主の産屋敷耀哉の代理を私、産屋敷あまねが務めさせていただきます。当主の耀哉が病状の悪化によって皆様の前へ今後出れなくなってしまうこと、深くお詫び申し上げます」

そこにあまねが現れ、耀哉が出れなくなったことを含めて挨拶をする。それと同時に柱全員が平伏した。

「承知しました…。お館様が一日でも早くその命の灯火を燃やして下さいをお祈り申し上げます…」

行冥があまねへの返事をし、柱合会議が開始された。

「ありがとうございます。既に御聞き及びとはございますが、日の光を克服した鬼が現れた以上、鬼舞辻無惨は目の色を変えてそれを狙ってくるでしょう」

「己も太陽を克服するために、大規模な総力戦が近づいています」

「上弦の肆・伍との戦いで甘露寺様、時透様の御二人に独特の紋様の”痣”が発現したという報告が上がっております。御二人には痣の発現の条件を御教示願いたく存じます」

あまねの”痣”という言葉に蜜璃と無一郎は首を傾げる。

「戦国の時代、鬼舞辻無惨をあと一步という所まで追い詰めた始まりの呼吸の剣士たち、彼らは全員に鬼の紋様と似た痣が発現していたそうです。ですよね？煉獄様」

全員の視線ぎ杏寿郎に向けられた。

「御意。我が家にあります”歴代炎柱の書”によりますれば、そのような記述が残されております」

杏寿郎はあまねの質問に答えた。

「俺は初耳です。何故伏せられていたのです？」

痣のことについて実弥があまねに質問をする。

「それについては俺が答えよう」

杏寿郎が実弥の質問に答えると言って、再び視線が杏寿郎に集まる。

「痣を持たぬ者が痣を発現せずに思い詰めてしまうということがあったそうだ。当時は今よりも医学が発達しておらず、痣の発現の条件が曖昧だったことも理由の一つとなっている」

「煉獄様の仰る通りでございます。しかし、ただひとつ言えることがございます。それは”痣の者が一人現れると、それに共鳴するように周りの者たちにも痣が現れる”と言ったことです」

柱の者たちは言葉を失った。

「痣を持つ者は柱の階級ではありませんが、竈門炭治郎様、彼が今この世代で最初に痣が現れた方です。ですが彼御本人にもはつきりと痣の発現の方法がわからない様子でしたので、御二人に御教示をと思いました。改めまして御教示願います、甘露寺様、時透様」

あまねは二人に対して頭を下げた。

「はっ、はい！あの時はですね、確かに凄く体が軽かったです！えーつと、えーつと…」

最初に蜜璃が説明をし始めた。しかし

「ぐあああ〜つてきました！グツてぐあーつて、心臓とかばくんばくんして耳もキーンとしてメキメキメキイって!!」

蜜璃の説明は擬音ばかりで、説明にすらなっていなかった。柱のほとんどやあまねたちは目が点になり、小芭内に関しては分かっていたのか、頭を抱えていた。

「申し訳ありません。穴があつたら入りたいです…」

我に返った蜜璃は恥ずかしさの余り、踞ってしまった。

「痣というものに自覚はありませんでしたが、あの時の戦闘を思い返した時に、思い当たること、いつもと違うことがいくつもありました。

その条件を満たせば恐らく痣が浮き出ると思います。今からその方法を御伝えします」

今度は無一郎が説明を始めた。それと同時にしのぶが蜜璃にハンカチを渡していた。

「前回の戦いで僕は毒を喰らい、動けなくなりました。呼吸で血の巡りを抑えて毒が回るのを遅らせようとはしましたが、僕を助けようとしていた少年が殺されかけ、以前の記憶が戻り、強すぎる怒りで感情の収拾がつかなくなりました」

「その時の”心拍数は二百を越えていた”と思います。さらに体は燃えるように熱く、”体温の数字は三十九度以上”になっていたはずですよ」

「!?そんな状態で動けますか?命にも関わりますよ」

無一郎の説明にしのぶが反応した。

「そうですね。だからこそ篩に掛けられる所だと思う。そこで”死ぬ”か”死なない”か。恐らく痣が出る者と出ない者の分かれ道です」

そこで無一郎の説明が一旦終わった。

「心拍数を二百以上に…、体温の方は何故三十九度なのですか?」

あまねが疑問に思ったことを無一郎に質問をする。

「はい。胡蝶さんの所で治療を受けていた際に、僕は熱を出したんですが、体温計と呼ばれる物で計ってもらった温度、三十九度が痣が出ていたとされる間の体の熱さと同じでした」

無一郎があまねの質問に答えると、蜜璃は今始めて答えを知ったよ
うな顔をしていた。

”心拍数を二百以上”、”体温を三十九度以上”…か。かなり厳し
そうだな」

「ああ。下手をすれば高熱で動けなくなり、鬼の格好の餌食となるな」

実弥のボヤきに義勇が返事をする。

「では痣の発現が柱の急務となりますね」

「御意…、何とか致します故、お館様には御安心召されるようお伝えく
ださいませ」

しのぶと行冥が話を締める。

「ありがとうございます。ただ一つ、痣の訓練につきましては皆様にお
伝えしなければなりません」

「何でしょうか…？」

あまねが痣についての注意に蜜璃が首を傾げる。

「もう既に痣が発現してしまった方は選ぶことはできません…。痣が
発現した方は、どなたも例外なく…」

…

…

……

柱合会議が終わり、あまねは退室した。

「なるほど…、しかしそうになると、私は一体どうなるのか…。南無三…」

「悲鳴嶼殿、それは…「煉獄よ」む？」

行冥の呟きに杏寿郎が答えようとすると、行冥がそれを遮った。

「皆まで言うな。その雰囲気で大体は察した」

行冥は杏寿郎の出す雰囲気でどうなるのかを察した。

「すまないが、俺はこれで失礼する」

「えっ、あの、義勇さん？」

「おい待て義勇!!」

しのぶと実弥の制止を聞かず、義勇は退室してしまった。

「富岡の奴…、柱としての自覚が足りんな」

小芭内は退室した義勇に愚痴を溢す。

「実弥さん…、義勇さんは…」

「ああ。あいつ、まだ”引き摺って”いやがるなあ…」

しのぶの困った視線に、実弥は後頭部を搔きながら答えた。

「不死川さん、引き摺ってるって…」

無一郎が実弥に質問をする。

「まあ、これは当人がいない所で話す内容では無いんだがなア。実は義勇の奴、”最終選別を突破してない” って言ってたんだわア」

実弥の説明に、しのぶを除く柱全員が驚いた。

「義勇が挑戦した最終選別なんだが、その時は異例の”死者が一人だけ”だったんだわ」

「聞いたことがあるぞ。確かその時の合格者は隊士になる者が少なく、殆どの方が隠になったり、入隊を辞退したりしたとか」

杏寿郎も心当たりが合ったのか、その最終選別のことを話した。

「義勇は最終選別の初日に鬼に攻撃されて気絶してしまっただらしくてな、気が付いた時は最終選別が終わった翌日だったんだってよ」

「亡くなったのは義勇さんと同門の錆兎って言う人で、義勇さんの兄的存在だったと聞いています」

しのぶが実弥から説明を引き継ぎ、説明を開始した。

「『最終選別を安全な所で過ごした自分は柱処か鬼殺隊にいたことは出来ない』と以前、酒に酔った勢いで言っていました」

『……………』

しのぶの説明に皆が言葉を失った。

「南無…、そのようなことがあれば、距離を取りたくなるのも頷ける…」

「富岡はそう思っているても、実力は確かなもの。でなければ、柱になるのは難しい…」

「(富岡の奴…、そんなことを抱えていたのか…)」

「富岡さん、自信を持てばいいのに…」

「誰か富岡さんを元気づけること、出来ないかな…」

柱は次々に思ったことを口にする。

「皆さん、このことは義勇さんには話さないでくださいね？義勇さん、結構気にしている節がありますので…」

しのぶは遠慮がちにお願いした。皆は各々頷いた。

第19話

「鋼錢塚さん！怪我の方は大丈夫ですか？」

緊急柱合会議が開かれた翌日、炭治郎の下に鋼錢塚が訪れた。鋼錢塚は息を荒くしており、何やら興奮しているようだった。

鋼錢塚は無言で炭治郎に刀を差し出す。炭治郎はその刀を受け取った。

「あれ？これは…、煉獄さんの鰐？」

炭治郎の新しい刀には、何故か杏寿郎の鰐が着けられていた。鋼錢塚は刀を鞘から引き抜くジェスチャーをし、炭治郎は刀を鞘から引き抜いた。

「はあ……」

炭治郎は刀の色に目を奪われた。

「鉄の質がいいし、前の持ち主が相当強い剣士だったんだろう」

鋼錢塚は後藤が座っていた椅子を借りて、そこに腰を落ち着けた。

「滅”の文字…」

「これを打った刀鍛冶が全ての鬼を滅するためにつけた刀だ。作者名も何も刻まず、ただこの文字だけを刻んだ」

「この刀の後から鬼殺隊では”階級制度”が導入され、柱のみが”悪

鬼滅殺”の文字を刻むようになったそうだ」

炭治郎は刀に文字を刻む由来を聞き、感心していた。

「あれ？でも前使った時にはこの文字は無かったような…？」

炭治郎は刀に刻まれた文字が以前使用した時には無かったことを思い出し、鋼錢塚に質問する。

「だからそれは第一段階までしか研ぎ終えてないのに、お前らが持つてって使ったからだろうが。錆が落とすきれてなかったんだよ！研ぎの途中で邪魔されまくったせいで、最初から研ぎ直しになったんだからな！」

鋼錢塚は怒った口調で炭治郎を責めた。

「いいか炭治郎、お前は今後死ぬまで俺にみたらし団子を持ってくるんだ。わかったな？」

鋼錢塚は好物のみたらし団子を炭治郎に持ってこさせる約束をさせ、炭治郎の下を去った。

その直後、伊之助が窓を突き破って入室してきた。しかもやたら興奮気味に。

「強化強化強化!!合同強化訓練が始まるぞ!!強い奴らが集まって稽古つけて…、何たらかんたら言ってたぜ」

伊之助は興奮している理由を言うが、炭治郎は何のことだかさっぱり分からず、伊之助に質問をするが、伊之助は『わっかんねえ!!』と胸を張って威張った感じで答えた。

「あらあら、伊之助君、あなたは一体何をしているんですか？」

そこに騒ぎを聞きつけたしのぶがやって来た。しのぶの顔は笑っているのに、出しているオーラは怒りそのものだったため、伊之助は即座にその場で正座をした。

「伊之助君、あなたは物分かりがいい子なので、自分が何をやったのか、分かりますよね？」

「ハイ、ゴメンナサイ……」

その様子はまるで『悪戯がバレた子供を叱る母親』のようだった。

…

…

…

柱稽古

その名の通り、柱が自分以下の階級の者に稽古をつけるもの。

基本的に柱は自分の継子以外には稽古はつけない。その理由は単純明快、“忙しい”。これに尽きる。

柱の仕事は広大な警戒区域の巡回に加え、鬼の情報収集や自身の更なる剣技向上の為の訓練など、やることが多いからだ。

しかし彌豆子が太陽を克服して以来、鬼の出没がピタリと止んでし

まった。だが、それを好機と見た柱たちはこれを機に来る最終決戦に向けて少しでも隊士の質を上げようと、この稽古を計画した。

「……らしいよ」

善逸が炭治郎に柱稽古の概要を伝えた。炭治郎は興奮するが、努力が嫌いな善逸は嫌々だった。

「自分よりも格上の人と手合わせしてもらえるって上達の近道なんだぞ？自分よりも強い人と対峙するとそれをグングン吸収して強くなれるんだから」

炭治郎は善逸に向けて熱弁する。

「そんな前向きなこと言うんであれば、俺とお前の仲も今日これまでだな!!お前はいいだろうよまだ骨折治ってねえから、ぬくぬくぬくぬく寝とけばいいんだからよ!!俺はもう今から行かなきゃいけねえんだぞ、わかるかこの気持ち!!」

善逸は炭治郎の頭に噛みつきながら炭治郎を批判した。そして泣きながら柱稽古に向かおうとする。

「あつ、善逸。上弦の肆との戦いで片足が殆んど使えなくなった時、前に善逸が教えてくれた雷の呼吸のコツを使って鬼の頸が斬れたんだ。勿論善逸みたいな速さはできなかったけど、本当にありがとう」

炭治郎は善逸を呼び止め、刀鍛冶の里の時のことでお礼を言った。

「こんなふうになんと人の繋がりが窮地を救ってくれることもあるけれど、柱稽古で学んだことは全部きつと、良い未来に繋がっていくと思っようよ」

炭治郎は笑顔で善逸に言った。

「馬鹿野郎お前っ…、そんなことで俺の機嫌が直ると思うなよ!!」

善逸は照れ臭そうに笑っていた。その顔を見た炭治郎は「すごいご機嫌だな」と思っていた。

「カアアアアツ」

丁度そこに炭治郎の鴉である松右衛門が炭治郎の額に突撃した。

「炭治郎、才館様カラノ手紙ダ！至急読ムノダ！」

松右衛門は耀哉の手紙を炭治郎に差し出し、炭治郎はその場で手紙を読んだ。

…

…

…

「ここは富岡義勇が住む”水屋敷”。その道場に義勇は一人、座っていた。

「ごめんください！炭治郎です！義勇師範いらっしやいますか？」

そこに炭治郎が訪れ、義勇は立ち上がり、門前まで移動した。

「炭治郎、どうした？何か急ぎの用か？」

義勇は門前で炭治郎を出迎え、中に通した。

「はい！ちよつと義勇師範とお話がしたくて」

「話？それだけでしのぶが今のお前に外出許可を出すのか？」

炭治郎は今、足の骨折がまだ治っておらず、松葉杖を使って歩いている状態だったのだ。

「その件はしのぶさんにお館様からの手紙を見せた所、『是非お願いします』って言われちゃいました」

「（しのぶの奴…、一体何をお願いしたんだ？）」

しのぶのお願いに疑問を持つ義勇であった。

…

…

…

「茶だ。それとそこの煎餅は好きに食って構わない」

炭治郎を居間に通した義勇は炭治郎をちゃぶ台の前に座らせ、お茶を振る舞った。

「ありがとうございます。それで義勇師範、柱稽古のことなんです…」

「そのことは既に聞いている」

炭治郎は柱稽古のことを話し、義勇は聞いていると答えた。

「でしたら話は早いです。義勇師範、稽古をつけてもらってもいいですか？」

「悪いが、俺は柱稽古には参加しない。よって稽古もつけない」

炭治郎は稽古をつけてもらうようお願いしたが、断られてしまった。

「何故ですか？」

「俺は柱の階級を貰ってはいるが、柱には相応しく無いと思っている」

義勇の答えは意外なものだった。

「俺は実際には最終選別を突破してはいない。俺が最終選別を受けた日、俺の兄弟子である錆兎と一緒に受けたが、俺は鬼の攻撃を受けて気絶してしまったんだ。そして気が付いた時には最終選別は終わっていた。死んだのは錆兎一人だけだった」

「錆兎は他の人を助けながら藤襲山にいた鬼の殆んどを倒した。しかし、お前も会った手鬼に殺された」

「錆兎が戦っている間、俺は鬼が来ない所にいた。鬼を一体も倒してはいない。そんな奴が鬼殺隊に、ましてや柱であること自体が烏滸がましい」

義勇は自分の過去を炭治郎に話した。

「だから俺は柱と言われても違うと言う。鬼を一体も倒していない者が稽古をつけることはしない。この話は終いだ。蝶屋敷まで送ろう。立てるか？」

義勇は立ち上がり、炭治郎に手を差し伸べる。しかし炭治郎はその手を掴むことはしなかった。

「義勇師範、師範は錆兎さんから託された”想い”を、受け継いではいかないんですか？」

炭治郎のその言葉を聞いた瞬間、義勇は昔のことを思い出した。

…

…

…

『さ…、錆兎…』

『自分が死ねば良かったなんて、二度と言うなよ。もし言ったらお前とはそれまでだ。友達を止める。翌日に祝言を挙げるはずだったお前の姉も、そんなことは承知の上で鬼からお前を隠して守ったんだ。他の誰でもないお前が…、お前の姉を冒瀆するな！』

『お前は絶対死ぬんじゃない。お前の姉がその命をかけて繋いでくれた命を、託された未来を、お前も繋ぐんだ。義勇』

…

……

…

義勇は鍛練の時に錆兎に叩かれた頬に手を触れていた。

「(痛い…。何で忘れていたんだ？こんな大事なことを…)」

義勇は錆兎のこと、姉のことを思い出していた。

「(そうだ。思い出したら、止まってしまうからだ。涙で前が見えなくなつて、止まってしまうからだ。葛子姉さん…、錆兎…。未熟でごめん…)」

義勇はその場で目を瞑り、頭を下げていた。その様子を炭治郎はただ黙って見ていた。

すると義勇は頭を上げて

「炭治郎、ありがとう。おかげで忘れていた想いを、未来を思い出した。礼を言う」

義勇は炭治郎に向かって頭を下げた。

「炭治郎、俺も柱稽古に加わろう。いいか？」

義勇は改めて炭治郎に手を伸ばす。

「はいーもちろんですー！」

炭治郎は義勇の手をしっかりと掴んだ。

そして炭治郎は義勇の付き添いで蝶屋敷まで戻り、しのぶに義勇も柱稽古に参加することを伝えた。

…

……

……

「遅い遅い遅い遅い!!何してんのお前ら?意味わかんねえんだけど!!」

「まず基礎体力が無さすぎるわ!!走るといふ単純なことがさ!!そんなに遅かったら上弦に勝つなんて夢のまた夢よ!?!」

「ハイハイハイ、地面舐めなくていいから!!まだ休憩じゃねえんだよ!!もう一本走れ!!」

柱稽古 第一の試練

元幼女好きの変態地味柱・宇随天元の基礎体力向上

「オイコラ!!誰が”幼女好きの変態地味柱”だ!?!」

(お前にはこれで十分だ) by 作者

「後でぜってえ殺してやる…!」

気を取り直して

柱稽古 第一の試練

元音柱・宇随天元の基礎体力向上

柱稽古はまず天元の基礎体力向上訓練から始まり、無一郎の高速移動稽古、蜜璃の地獄の柔軟、杏寿郎の模擬戦、小芭内の太刀筋矯正、実弥の無限打ち込み、行冥の筋力強化訓練と続く。

しのぶに関しては、自ら参加の辞退を申し出ていた。その理由は、後日語るとしよう。

…

…

…

ここは蝶屋敷。そこに住むしのぶは今、仏壇の前にいた。

「……………」

「師範」

仏壇の前で手を合わせていたしのぶに、カナヲが声をかける。

「カナヲ、どうしたの？」

しのぶはカナヲの方に向き直る。

「これから風柱様の稽古を受けに行きますのでそのご挨拶に」

カナヲはしのぶに声をかけた理由を話した。

「そう…。こんなことしか言えないけど、気をつけてね」

しのぶはカナヲの側まで近づき、カナヲの頭を撫でた。

「師範、どうして稽古の参加を辞退されたのですか？」

カナヲは疑問に思っていたことをしのぶに聞いた。

「実はね……」

しのぶは参加を辞退した理由をカナヲに打ち明けた。

「し…、師範。そのことを知っているのは…」

「当人と柱の人を除けば、あなただけよ」

理由を聞いたカナヲは相当びっくりしていた。

「だからなの。ごめんなさいね？稽古をつけてあげられなくて」

しのぶはカナヲに謝るが、カナヲは首を横に降った。

「そんな理由」だったら、仕方ないですよ。大丈夫です」

カナヲは笑顔をしのぶに向けた。

その後しのぶはカナヲを抱き締め、カナヲはしのぶにされるがままの状態が続いた。そして満足したしのぶはカナヲを解放し、カナヲは実弥の下へ向かった。

…

……

……

「お待たせ致しました。私、護衛並びに案内役を勤める鬼殺隊事後処理部隊“隠”の後藤と申します」

その夜、とある屋敷の前に、後藤他数名の隠の隊員が並んでいた。

「ご丁寧ありがとうございます。知ってるとは思いますが、私は珠世と申します。そしてこの子は愈史郎と零余子、猗窩座さんです。よろしく願います」

後藤たちの前にいたのは、珠世と愈史郎、零余子と猗窩座だった。

「皆様には、蝶屋敷へ丁重にお送りするようお館様より仰せ使っております。それと、護衛の隊員も信頼の置ける者ばかり。頸を斬ることは致しません」

後藤は珠世たちを何処へ連れていくのかを説明した。

「承知しました。皆さん、よろしく願います」

珠世は後藤たちに頭を下げ、愈史郎たちと一緒に蝶屋敷へと向かった。

第20話

義勇の柱稽古参加を表明してから七日後、炭治郎の怪我が完治し、念願の柱稽古に参加した。

「よおおお、久しいな！また上弦の鬼と戦ったんだってな？五体満足で生き残るったあ運の強え奴だ。ここで鈍った体を存分に叩き起こしな！」

炭治郎はまず天元の下で訓練をつけた。途中、昼休憩の時に天元の妻たちと再会し、食事に関しての情報交換などをしていた。

そして参加から十日後、炭治郎は天元の訓練を突破し、次の柱、無一郎の所へ向かった。

…

…

…

柱稽古 第二の試練

霞柱・時透無一郎の高速移動訓練

「そうそう！炭治郎、さつきより速くなってるよ！筋肉の弛緩と緊張の切り替えを滑らかにするんだ！そうそう！そうしたら、体力も長く保つから！」

炭治郎が無一郎の所に到着したのは、夜だったこともあり、その日

は体を休め、翌日から稽古を開始した。

炭治郎は最初の内は無一郎の速さについて行けて無かったが、五日もすると、無一郎の速さと同等の速さになっていた。

「足腰の動きも連動しててばっちりだね！次の柱の所に行つていいよ炭治郎」

無一郎はにつこり笑つて炭治郎の訓練終了を言い渡した。炭治郎はまだ五日した経過していないのに次の柱の所へ行く許可が出たことに驚いていた。

「だって炭治郎、僕が言ったことちゃんとできてるもん」

無一郎が許可を出した理由は最もな理由だった。

「あの…、俺たちも…。もう二週間いるので…」

先に稽古に参加していた隊士たちが許可を求めた。

「何言ってるの？君たちは駄目だよ。素振りが終わったら打ち込み台が壊れるまで打ち込み稽古しなよ」

しかし無一郎は冷たい眼差しで冷たく言い放つた。隊士たちは炭治郎との落差に落ち込み、炭治郎は申し訳無きような気持ちになっていた。

…

…

.....

柱稽古 第三の試練

恋柱・甘露寺蜜璃の地獄の柔軟

「炭治郎君久しぶり！おいでませ我が家へ！」

「ご無沙汰してます！お元気そうで良かった」

炭治郎と蜜璃は門前で挨拶を交わした。

クンクン「養蜂してらっしゃるんですか？蜂蜜のいい香りがします」

炭治郎は蜂蜜の匂いを嗅ぎ取り、蜜璃に質問をした。

「あつ、分かっちゃった？そうなのよ!!巣蜜をね、パンに乗つけて食べると超絶おいしいのよ〜〜！」

蜜璃は嬉しそうに炭治郎に話していた。

「バターもたっぷり塗ってね、三時には紅茶も淹れて。パンケーキ作るからお楽しみに！」

蜜璃は炭治郎の手を繋いで道場に案内しながら説明をしていた。しかし当の炭治郎は聞き慣れない単語を聞いたため、ちんぷんかんぷんだった。

そして三時になり、蜜璃がパンケーキを振る舞った。

パンケーキは三段重ねになっており、一段目の上に固形バターと巣蜜が乗っかっていた。

(女性は平らげそうだけど、男性は見ただけで胸焼けしそうだな…) b
Y作者

そして三時の休憩が終わり、炭治郎の訓練が開始された。

まず炭治郎は蜜璃からレオタードを渡され、それに着替えた。

その後、新体操さながらに運動をする。そして柔軟が始まるが、そこからが地獄だった。

何故なら、蜜璃は隊士の足を自分の足で広げるといふ”力技”だったからだ。それを受けた隊士たちは、次々に悲鳴を上げる。それは炭治郎も例外では無く、初日は股を無理やり広げられた反動で真面に歩くことすらできなかった。

しかし七日経過すると、蜜璃の力技の股割りにも慣れ、今ではすっかり股が開くようになった。

「炭治郎君合格！ 次の柱、師範の所に行つていいよ！」

「はい！ありがとうございます！」

こうして炭治郎は蜜璃の訓練を終えて次の柱、杏寿郎の下へと向かった。

…

…

.....

柱稽古 第四の試練

炎柱・煉獄杏寿郎の模擬戦

「竈門少年、よくぞ来られた！」

炭治郎が炎屋敷、即ち煉獄家に到着すると、門前で杏寿郎が待っていた。

「煉獄さん、お久しぶりです！稽古、よろしくお願いします！」

炭治郎は杏寿郎に頭を下げる。

「うむ！しっかりと鍛えよう！だが、稽古は明日からだ！今日は体を休めるといい！弟の千寿郎も首を長くして待っているぞ！」

「分かりました！」

炭治郎の稽古は明日からとなり、炭治郎は煉獄家に足を踏み入れた。

「あつ、炭治郎さん！ご無沙汰してます！」

「千寿郎君！久しぶり！元気そうで何よりだよ！」

炭治郎は杏寿郎に通された居間で、千寿郎と再会した。

「むっ…、坊主…」

「あつ…、煉獄さんのお父さん…」

更には杏寿郎の父の槇寿郎とも再会した。

「あく、その…、何だ。坊主、いつぞやの時は、すまなかつた。この場を持って謝罪したい。この通りだ」

槇寿郎は炭治郎に頭を下げた。

「謝らなくていいですよ。俺はもう気にしてませんので」

炭治郎は気にしてないと言い、槇寿郎を許した。

「……ありがとう。坊主、お前さんは優しい。自分を罵倒した俺を許すなんて…」

槇寿郎は頭を下げたまま、涙を流した。

「俺はお前さんのことが気に入った！どうだ？良かったら俺の養子にならんか？」

槇寿郎は炭治郎を養子にしたいと申し出た。

「父上！竈門少年は俺の継子になる予定です！邪魔をしないでもらいたい！」

「何を言つとる！義理の息子になっても継子にはなれるだろう！」

ギヤ〜ギヤ〜ギヤ〜

杏寿郎と槇寿郎は炭治郎そっちのけで言い争ってしまった。

「炭治郎さん、お恥ずかしい所をお見せして申し訳ありません。穴があつたら入りたいです…」

「あはは…」

千寿郎の謝罪に炭治郎は苦笑いをしていた。

…

…

…

それから翌日。炭治郎は他の隊士たちと模擬戦をしていた。

内容は『一対一の試合形式で、木刀を使用。一試合毎に相手を変え、先に十連勝すれば合格。しかし型は使用禁止で、使用したのを確認した場合、失格となり、戦績も零ゼロに戻る』というものだった。

炭治郎は他の隊士よりもキツイ訓練を義勇と実弥から受けていたため、呆気なく九勝まで勝ち上がった。

「坊主よ、十戦目はこの儂、煉獄槇寿郎が務めよう」

炭治郎の十戦目最後の相手は槇寿郎だった。

槇寿郎は“元炎柱”だったこともあり、炭治郎に善戦していた。

しかし

「炎の呼吸 壺ノ型 不知火！」

熱くなった槇寿郎がルールを忘れて、型を使用した。炭治郎は木刀で何とか受け止めたが、槇寿郎の不知火の威力が強かったのか、持っていた木刀が折れてしまった。

「そこまで！元炎柱・煉獄槇寿郎の反則負けにより、勝者、竈門炭治郎！」

審判を努めていた杏寿郎の言葉に、槇寿郎は意外な顔をしていた。

「父上、この試合では型の使用は禁止となっています。木刀を交える前に確認をしたのをもうお忘れですか？」

杏寿郎は試合を始める前に改めてルールを述べ、双方が納得したのを確認していたのだ。

槇寿郎はそのことを思い出したのか、頭を押さえて座り込んでしまった。

「炭治郎さん、大丈夫ですか？」

「ありがとう、千寿郎君」

炭治郎は千寿郎の手を借りて何とか立ち上がった。

「竈門少年、先程の試合、父上が申し訳無いことをした。父上の反則負けによって竈門少年は十連勝となり、炎柱の稽古は終了となる」

杏寿郎は炭治郎に稽古終了を言い渡した。

「父上、俺が言うのも何ですが、熱くなり過ぎです」

”炎”の呼吸だけにか？」

ヒュク

「父上…」

「すまん…。穴があつたら入りたい…」

…

…

…

杏寿郎の稽古を終了した炭治郎は、直ぐに出立はせず、その日と翌日は煉獄家に泊まることにした。

「煉獄さん、ちょっとお聞きしたいんですけど…」

「どうした？」

居間で寛いでいた炭治郎は同じく居間で寛いでいた杏寿郎に質問をした。

「鋼錢塚さんが持ってきてくれた刀なんですけど、それに煉獄さんが使っているのと同じ鏢がついていたんですが…」

炭治郎は刀の鏢のことについて聞いていた。

「ああそのことか、それは俺からの細やかな贈り物だ。例え継子にならなくても、想いは同じと言う気持ちを込めてな」

杏寿郎は炭治郎の質問鑢について答えた。

「そうだったんですか。ありがとうございます」

炭治郎は鑢のお礼を言った。

「うむ。……おおそうだ！竈門少年、”歴代炎柱の書”の復元がほぼ終わったそうだ！」

「そうなんですか!？」

杏寿郎の知らせに炭治郎は驚いた。

「うむ！父上も復元に加わって、もう九割近くは復元できたそうだ！もし良かったら、今から読むかい？」

「是非！」

杏寿郎の申し出に炭治郎は乗った。

「ならば今から千寿郎の所へ行こう！今も復元をしている筈だ！」

「はい！」

杏寿郎は炭治郎を連れて、千寿郎のいる部屋へと向かった。

…

……

……

「よもやよもや…だな」

「あはは…」

千寿郎の部屋から出た二人、杏寿郎は項垂れており、炭治郎は苦笑いを浮かべていた。

「仕方ないですよ。もう夜も遅い時間でしたし…」

そう、二人が千寿郎の部屋に来た時間はもう夜も遅い時間帯だったのだ。

千寿郎は就寝しようとして布団に入ろうとしていた所に、炭治郎と杏寿郎が入って来たため、思わず叱ってしまったのだった。

「うむ、確かに夜遅くに来た俺たちが悪かった。では翌日、改めて訪れるとしよう」

「そうですね。では煉獄さん、おやすみなさい」

炭治郎は杏寿郎と別れ、用意されていた部屋に入り、床に着いた。

…

……

……

その翌日、炭治郎は改めて千寿郎の部屋に赴き、昨夜のことを謝った。千寿郎も怒りすぎたと反省しており、お互いに謝った。

そしてほぼ復元が完了した”歴代炎柱の書”を読むと、様々なことが分かった。

曰く『”日”の呼吸は全ての呼吸の元となった呼吸なり』

曰く『”日”の呼吸の使い手は漆黒の刀を使用している』

曰く『”日”の呼吸の使い手は”花札のような耳飾り”をしている』

曰く『”日”の呼吸の使い手は額に陽炎のような”痣”がある』

等々。

「炭治郎さん、これって、全部炭治郎さんに該当していると思うんですが…」

炭治郎と一緒に読んでいた千寿郎が、口を開いた。

「確かに、書いてあることは、全部俺に該当している。けど、俺の家は代々炭焼きをしている家系なんだ」

炭治郎は自分の先祖のことを話した。

「だとしたら、何故…」

千寿郎も日の呼吸の使い手のことに頭を悩ませた。

「炭治郎さん、僕はもう少し調べてみます。もし何か分かりましたら、兄の鴉に手紙を持って行ってもらうようお願いしますので」

「分かった。千寿郎君、無理はしないでね？」

「はいー」

千寿郎は日の呼吸について調べることにした。そして炭治郎はその日は千寿郎の手伝いとして食事を用意したりして、翌日に煉獄家を後にした。

…

…

…

柱稽古 第五の試練

蛇柱・伊黒小芭内の太刀筋矯正

「竈門炭治郎、俺はお前を待っていた」

炭治郎は小芭内の下に到着すると、既に小芭内が待っていた。

「よろしくお願ひしま「黙れ殺すぞ」ええっ!？」

炭治郎が挨拶をしようとする、物騒な言葉で遮られてしまった。

「甘露寺からお前の話を聞いた。随分とまあ楽しく稽古をつけてもらったようだな。俺は甘露寺のように甘くないからな」

小芭内は炭治郎を冷たく睨んだ。そして小芭内は炭治郎を道場へ案内する。

「お前にはこの”しょうがいぶつ処刑人”を避けつつ太刀を振るってもらおう」

小芭内の道場の中には、角材にはりつけ磔にされた隊士たちが所狭しといた。

「この…、括られている人たちは何か罪を犯しましたか…？」

道場の様子にドン引きした炭治郎は、思わず小芭内に質問していた。

「…、まあそうだな。”弱い罪”、”覚えのない罪”と上げられるが、一番は”甘露寺に色目を使った罪”だ」

小芭内は磔にしている隊士の罪を述べたが、殆んどが”個人的な怨み”だった。

こうして、炭治郎の太刀筋矯正訓練が開始された。だが障害物を避けながら刀を振るうのは至難の技である。訓練で使用しているのは木刀であったとしても、当たれば痛い。しかも小芭内の太刀筋はまるで蛇のように”うねる”ので、なお達が悪い。

しかし四日経過すると、炭治郎は何処にどう振れば当たるのか分かるようになった。

そして炭治郎は小芭内の羽織の裾を木刀で切ることができた。

「俺の訓練はこれで終わりだ。さっさと不死川の下へ行け。それと、馴れ馴れしく甘露寺と喋るなよ?」

炭治郎は最後まで小芭内に嫌われていた。

…

…

…

炭治郎は松右衛門の案内の下、実弥のいる風屋敷を目指して歩いていた。すると視界の下から誰かが現れた。

「うわああああっ!? 善逸!?!」

そう、炭治郎よりも先に柱稽古に参加していた善逸だった。

「た、たた、た、たん、たん、炭治郎、頼む、後生だ、一生のお願いだ! 俺を逃がしてくれえええっ!!」

善逸は炭治郎にしがみつき、助けを求めた。

「あっ…!」

しかし炭治郎は気づいてしまった。

ガシッ

「選ベエ、訓練に戻るか俺に殺されるかア…!」

実弥がすぐ側まで来ていたことに。

「実弥師範、お久しぶりです！」

「ん？おオ炭治郎か！久しぶりだなア！見舞いとかに行けなくて悪かったなア。任務が立て続けに入っちゃまった性で行けなかったんだわア」

炭治郎は実弥に挨拶をし、実弥は炭治郎に気づいて怒った顔から笑顔に変わった。

「全然大丈夫ですよ！稽古、よろしくお願いします！」

炭治郎は見舞いに行けなかった実弥を許した。

「すまんア。それと、その我妻をちゃんと連れて来てくれ」

「はー！」

炭治郎は善逸を拘束し、実弥の後を追った。

柱稽古 第六の試練

風柱・不死川実弥の無限打ち込み稽古

実弥の稽古は至って単純^{シンプル}。隊士全員が実弥一人に襲い掛かり、一撃でも当てることができれば、合格である。

しかし実弥も黙って当てられる訳では無い。勿論実弥も反撃はする。しかも型を使用しながら反撃するのだ。

『一撃を与えるだけでいい』。聞こえはいいが決め事は単純なもの程難しいのである。

柱の中でも上位に君臨する実弥に攻撃を当てるのは至難の技である。挑んだ隊士は悉く負け、反吐を吐き、失神する。

しかしながら実弥も鬼では無く、一人失神すれば、その者の目が覚めるまで全員が休憩を取れるのだった。しかし、目を覚ましてでも失神した”フリ”をしていれば、無理やり起こされ、稽古を続けさせられるのだった。

そして炭治郎も意気揚々と稽古に参加する…はずだった。

「実弥師範、食事の用意ができました！」

「分かったぜエ！よしお前ら、これから昼休憩だ！しっかり飯を食えよオー！」

炭治郎は稽古に参加せず、食事などを提供していた。

「悪いな炭治郎。食事とかの家事を任せちゃって」

「いえいえ！家ではいつもやっていたことばかりでしたので！これくらい苦ではありませんよ！」

家事を任せっきりの実弥は炭治郎に謝るが、炭治郎は笑顔で大丈夫と答えた。

「兄ちゃん、こっちの洗濯物全部終わったよ」

そこに玄弥が合流した。玄弥もまた炭治郎と同じく稽古に参加せず、家事をしていた。

実弥は元々大家族の長男であり、母親が仕事をしている間、玄弥と共に家事や弟、妹の面倒をしていたことがあるため、一通り家事はできるのである。しかし、稽古で隊士たちを相手している間は、どうしても家事の時間を削らないとならない訳で、少しだけではあるが、手付かずの状態が続いていた。

勿論玄弥も家事をこなしていたが、一人ではできる範囲は限られてしまうため、稽古に参加することができなかつたのだ。

そこに自分たちと同じ境遇の炭治郎が来たことによって、玄弥の負担が軽くなったのだ。

「玄弥ア、いつもいつもすまねエ。二人とも、今は昼休憩に入っているから、手を洗って飯を食いなア」

実弥は炭治郎と玄弥の頭を一通り撫でると、飯を食いに移動した。

炭治郎と玄弥も井戸に移動し、手を洗い、飯を食いに移動した。

…

…

…

それから十日後、炭治郎は最後まで稽古に参加できないまま、実弥に次の柱の下へ行く許可をもらったのだった。

一度も稽古に参加していない炭治郎は、そのことを実弥に伝える。

「炭治郎、お前は自覚が無エかもしれねエが、もうお前の実力は柱と同格なんだよ。だから俺とやると見境いが無くなっちまうかもしれねエんだア」

実弥の説明に、炭治郎は驚きを隠せなかった。それもその筈、炭治郎の成長は凄まじく、短期間でその成長を見せる程だったのだ。

実際に無一郎や蜜璃、小芭内の稽古では、四く五日で合格となり、おり、最初の天元の稽古では完治直後だったこともあり、少し長い期間居た。(杏寿郎の稽古に関しては例外である。)

そして実弥は炭治郎の他に玄弥(と厄介払いの意味合いも含めて善逸)も次の柱への所へ行く許可を出したのだった。

…

…

…

「お前らが羨ましいいぜまったく…。稽古に一回も参加せずに次の柱まで行けるなんてよ…。俺は何度も何度も反吐を吐いたり失神したつてくによ…」

移動中、善逸は炭治郎と玄弥に愚痴を溢していた。

「そんなこと言うなよ善逸。俺だって実弥師範の稽古を受けれずにモヤモヤしてるんだぞ？」

炭治郎もまた不完全燃焼なのか、善逸に愚痴を溢していた。

「二人とも、もうすぐ悲鳴嶼さんの修行場に着くぞ」

そこに玄弥が声を掛けた。すると遠くから滝の音が聞こえてきた。

そして炭治郎たちが滝の方に目を向けると、そこには伊之助を含む数人の隊士たちが、念仏を唱えながら滝に打たれていた。

「心頭…滅却すれば……、火もまた涼し……」

すると後ろから行冥の声がしたので振り返ると、そこには足下を火で焙りながら太い丸太を三本、しかも両端に岩をそれぞれ二つ括り着けた物を担いだ行冥がそこにいた。

「ようこそ…、我が修行場へ……」

第21話

柱稽古 第七の試練

岩柱・悲鳴嶼行冥の筋力強化

「最も重要なのは体の中心…、足腰である。強靱な足腰で体を安定させることは”正確な攻撃”と”崩れぬ防御”へと繋がる…」

「まず滝に打たれる修行を一刻してもらい…、次に丸太三本を担ぐ修行…、最後にこの岩を一町先まで押して運ぶ修行をしよう…」

「私の修行はこの三つのみの簡単なもの…。下から火で炙るのは危険なため…無しとする」

行冥は修行の説明を淡々と話した。

「あの…、善逸が気絶してしまったのですが…」

丁度説明が終わったタイミングで炭治郎が善逸が気絶したことを伝えた。

「…川につけなさい」

行冥は炭治郎に善逸を川につけるよう言った。

炭治郎は善逸の上着を脱がし、善逸の足を掴んだ。と思った瞬間

「よここせし」

ドボーン

何と川に”放り投げた”のだった。

「うをおおいっ?!炭治郎何やってんだよ!行冥さんは川に”つける”とは言ったが”放り投げる”とは言ってなかったぞ?!」

玄弥は炭治郎の行動に驚きを隠せず、思わずツツコミをいれていた。そして当の行冥も炭治郎の驚きの行動に言葉を失っていた。

「ギヤアアアツ、つべてえええええ!!」

川に放り投げられた善逸はその川の冷たさに驚き、一気に目が覚めた。

「真冬の川よりも冷たいんですけど!死ぬわ!!何この山の川の水、異常だよ死ぬわ!!吐きそう!うわー何か…内臓がヤバイ!悲鳴上げてる、死ぬって言うてる!」

善逸は川から何とか上がるが、体の震えは止まらなかった。

「ヒエツ、ヒャーツ!!だっ駄目だ、上がっても…手遅れ!凍死する!!」

すると岩に引っ付いていた隊士の一人が

「岩に…、くつつけ…。あったかいぞ…」

善逸にアドバイスをした。その隊士とは、以前炭治郎たちが那田蜘蛛山での任務で出会った村田だった。

善逸は早速言われた通りに岩にくつつくと、その暖かさに涙を流し

た。

炭治郎も滝に打たれるために震えながら滝まで移動する。そして次々と滝から離れる隊士たちがいる中、伊之助だけは滝に打たれ続けていた。

「(伊之助、頑張っているんだな…。あれ？念仏が聞こえない)伊之助？いのっ…、ちよっ、ヤバイヤバイ!!」

炭治郎は伊之助が心肺停止寸前、つまり死にかけていることに気づいた。

人間は心肺が停止すると、一分につき生存率が約10%ほど低下するのだ。

炭治郎は急いで川岸まで伊之助を運び、心肺蘇生法を施した。

その後息を吹き返した伊之助を休ませた炭治郎は、滝行を開始した。

…

…

…

昼となり、目の前の川から魚を捕った炭治郎は魚を捌いて串焼きにしてみんなに振る舞った。

「アイツ凄えよ玉ジャリジャリ男」

伊之助は魚を食べながら行冥のことを言った。

「岩柱の悲鳴嶼さんな、変なアダ名つけちゃ駄目だよ。それで何が凄いの?。」

炭治郎は魚を焼いている焚き火に当たりながら伊之助に質問をする。

「初めて会った時からビビツと来たぜ、まず間違いねえアイツ。鬼殺隊最強だ」

伊之助は魚の骨を食べながら断言していた。

「やっぱりかあ、悲鳴嶼さんだけ匂いが全然違うもんな。もう痣が出てたりするのかな?。」

「出ててもおかしくはねえ」

伊之助は10匹目の魚を食べながら炭治郎の考えに同意していた。

「悲鳴嶼さんが最強なのは同意だ。何せあの人は今いる柱の中でも長く柱を勤めているんだからな」

そこに玄弥が二匹目の魚を食べながら言った。

「そうなの!?!」

「ああ、今の柱の人たちが入隊した時から既に悲鳴嶼さんは柱になってたって兄ちゃんから聞いたからさ」

どうやら情報元は実弥からのようだった。

「確かにあのオツサン、音が他の人よりも強いもんな。今だって俺たちよりも一回りか二回り大きい岩を押してるみたいだし…」

善逸が魚を食べながら言うと、ちようど行冥が善逸が言った通りの岩を押しながら現れた。

「南無阿弥陀仏…、南無阿弥陀仏…」

しかも念仏を唱えながら。

「悲鳴嶼さん、凄いなあ…。でも善逸、急にどうしたんだ？いつもなら『無理!!』とか『できない!!』とか汚い声で否定するのに…」

「いや俺だって否定したいよ？でも、いくら否定しても」音が否定させてくれないんだよ。だったらもう開き直るしかないだろ？」

炭治郎の疑問に善逸はハイライトが無くなった目をしながら説明をした。その善逸の顔を見た炭治郎は苦笑いを浮かべていた。

…

…

…

そして炭治郎は滝の修行、丸太の修行を終え、いよいよ岩を押す修行に挑んだ。

しかしいくら押しても岩はびくともせず、逆に足の方が下がってしまいう始末だった。

行冥の稽古は過酷ではあるが、どれも強制では無く、やめたければいつでもやめて下山できるのだった。炭治郎が来てから、数人が修行に耐えられず下山していった。

…

…

…

「俺分かったわ。今の柱の殆んどに継子がない理由」

その日の夜、炭治郎が作ったおにぎりを食べていた村田が唐突に話した。

「訓練がキツかったり、柱との実力差に打ちのめされて心折れたり」

村田の話を聞いていた他の隊士たちが同意していた。

「でも継子はいますよね？俺と同期のカナヲだったり、俺だったり」

炭治郎の言葉に善逸と伊之助を除く全員が炭治郎の方を向いた。

「ああコイツ、水柱と風柱の継子なんですって」

炭治郎の代わりに善逸が答えると、伊之助を除く全員が驚いた。

「しかも俺と炭治郎とそこの伊之助の同期に、風柱の弟がいるんすよ」

善逸が行った玄弥のカミングアウトにまたもや全員が驚いた。

「そ…、それは凄えな…。それにしても、お前、米炊くの上手くね？」

「そうそう、昼に食った魚も旨かったし」

村田は現実逃避するかのようには話を切り替えた。

「俺、昔から料理とか家で手伝っていたので。料理は火加減！」

炭治郎の力説に皆が納得した。

…

…

…

それから六日、炭治郎は未だに岩を押しすることができなかった。炭治郎は仰向けになり、夜空を見上げた。

「(はあ…、今日も押せなかった…。何がいけないんだろう…？単純に足腰の筋肉が足りないのかな…？それとも他の呼吸法があるのかな…？)」

炭治郎が考えに耽っていると、上から炭治郎の顔を覗く者がいた。

「炭治郎、お前額の痣濃くなつてないか？」

「玄弥…」

その者とは玄弥だった。炭治郎は玄弥に指摘された額に触れるが、

当人には実感は無かった。

「そりゃあ毎日鏡で見なけりや気づかねえわな」

玄弥は炭治郎の横に座り、炭治郎が押そうとしていた岩を見上げた。

「炭治郎も岩の訓練してんだな。俺もしてるよ」

「でも全然動かなくて。玄弥は動かせるの？」

「ああ、動かせるぜ。でも、少しだけ…だけどな」

玄弥は恥ずかしそうに頬を掻いていた。

「凄いな…。…なあ玄弥、岩を動かすための”コツ”とかは無いのか？」

炭治郎は玄弥に動かすためのコツを玄弥に聞いた。

「コツ…か？ そうだな…、まあ足腰の筋肉も重要なんだが、一番は”反復動作”って奴だな」

「反復…動作…？」

反復動作

別名『プリシヨットルーティーン』。

ある一定の動作をすることでイメージをより強くするための動作である。

かの元メジャーリーガーのイチローが打席に立った時の”腕を大きく一回転させる動作”やラグビーの五郎丸選手がボールを蹴る前にしていた”手を印のように組む動作”がこれに当たる。

因みに玄弥の反復動作は”念仏を唱える”である。

「あつ、それって昼間悲鳴嶼さんが岩を押してる時に言ってた…」

「そうそう、南無南無言ってただろ？悲鳴嶼さんは時々そうやって”見本”を見せてくれるんだ。だから見て盗まないと分からないんだ」

炭治郎と玄弥が楽しく談笑しているのを木の影から行冥が盗み見していた。

…

……

……

その頃、一人の鬼殺隊員の後ろを”肆”の文字が刻まれている”目”が見ていた。

「また一人見つけました。これで六割程の鬼狩り共の居所を把握、しかしまだ太陽を克服した鬼の娘は見つかりません」

無限城で新たに肆の数字を与えられた鳴女が無惨に報告をする。

「鳴女、お前は私が思った以上に成長した。素晴らしい」

「光栄で御座います」

「後はそうだな…、この辺り」

無惨は鳴女を褒め、探索する場所を地図に指差す。

「竈門禰豆子も、産屋敷も、もうすぐ見つかる…。待っている、産屋敷。そして竈門禰豆子」

無惨は静かに笑っていた。

…

…

…

翌日、炭治郎は早速玄弥から教わった反復動作を決めることにした。

「（俺の集中力を高めるもの…。やっぱり最初に思い浮かぶのは家族の笑顔、それからカナヲとアオイさんの笑顔）」

炭治郎は家族や大切な女性ひとの笑顔が次々に脳裏ひとに浮かんだ。

そして炭治郎は深呼吸を深く一回すると、岩に手を置き

「ぐあああああつ!!」

力一杯押した。しかし岩はピクリとも動かなかった。

炭治郎は次の日も、また次の日も、そのまた次の日も、反復動作を繰り返して岩を押しした。

そして岩の修行を始めてから五日後、炭治郎はいつものように反復動作をし、岩を押しす。すると額の痣の色が濃くなり、遂に岩が動いた。

「やった！遂に動いた！けど油断するな！少しでも気を緩めると岩が止まる！腕で押そうとするな！足腰で押せ！！」

その様子を見ていた伊之助は負けじと反復動作をし、岩を押し始めた。善逸も二人に負けじと反復動作をしようとする、足下に善逸の鎧雀のチュン太郎こと”うこぎ”が手紙を持って来ていた。

…

…

…

炭治郎は岩を一町先まで動かすことが出来た。しかしその間、炭治郎は水分補給をしておらず、脱水状態になりその場に倒れてしまった。

そこに行冥が現れ、念仏を唱えながら炭治郎に水を飲ませた。

「岩の訓練も達成した。それに加え”畢”での正しき行動。私は君を認める…」

行冥は炭治郎に水が入った大きめの竹水筒を渡しながら炭治郎のことを認めると言った。

「君は刀鍛冶の里で、鬼の妹よりも里の人間の命を優先した…」

「悲鳴嶼さん、それは違います。里の人のことを優先したのは禰豆子です。俺はどちらを優先するのか迷ってしまい、危うく里の人が殺される所でした。簡単に認められては困ります」

炭治郎は行冥の言葉を否定した。

「俺はみんなのおかげで助かっているだけです。助けてくれたから道を間違わずに済んでいる。だから悲鳴嶼さんも、俺のことを簡単に認めないでください」

炭治郎は「誰かの助けで今まで道を間違えなかっただけ」と言っ
た。

「君への疑いは晴れた。誰が何と言おうとも私は竈門炭治郎、君を認める」

だが行冥はそれでも炭治郎のことを認めると言った。

「えっ？なぜ…」

炭治郎は何で行冥が頑なに炭治郎のことを認めるのか分からなかった。

「私は昔、寺で身寄りのない子供たちを育てていた」

行冥はその理由である”自分の昔の話”を始めた。

「皆、血の繋がりがりこそ無かったが仲睦まじく、お互いに助け合い、家族のように暮らしてした。ところがある日の夜、言い付けを守らず寺に

戻らなかつた子供が鬼と遭遇し、自分が助かるために私と残りの子供たちを喰わせる約束をしたのだ」

行冥が語ったのは、恐ろしい内容だった。

「私の住んでいた地域では、鬼の脅威の伝承が根強く残っており、夜は必ず藤の花の香炉を焚いていた。その子供は香炉の火を消し、鬼を寺の中に招き入れ、直後に四人殺された」

「私は残った四人の子供を守ろうとしたが、その内の三人は私の言うことを聞かなかつた。当時の私は今より痩せ細っており、目も見えなかつたから、役に立たないと判断されたのだろう。その三人は暗闇の中で喉を切られて死んでしまった」

「私は唯一残った”沙代”だけは守らねばと思い、戦った。鬼を何度も何度も殴り、夜が明けるまで鬼の頭を殴り潰し続けた。今でも忘れはしない、鬼を殴った気色悪い感触を」

行冥は涙を流しながら話し続けた。

「夜が明け、騒ぎを聞きつけた村の者が来た時、沙代はこう言ったのだ。『あの人は化け物。みんなあの人が、みんな殺した』と。寺の中は子供たちの亡骸が転がり、壁には血がこびりついていて。鬼は太陽の光を浴び塵となり無くなつたせいで、私は殺人の罪で投獄された」

「お館様が私の無罪を勝ち取ってくださいらなければ、私は処刑されていた。それから私は人を疑うようになった。人は土壇場になればなる程、その本性が現れる」

「だが君は現実から逃げず、目を逸らさず、嘘をつかず素直でひたむきだった。これは言うのは簡単だが、それをやれる者は少ない…、君は

特別な子供、即ち”やれる者”だ」

「大勢の人間を心の目で見てきた私が言うのだからこれは絶対だ。君が道を間違えぬよう、これからは私も君を手助けしよう…」

行冥の話が終わると、炭治郎は涙を流した。行冥は炭治郎の頭を優しく撫でると、炭治郎は笑った。

行冥はかつて沙代の頭を撫でた時のことを思い出し

「私の訓練は完了した…。よくやり遂げたな…」

優しく微笑んだのだった。

…

…

…

その後炭治郎はまだ残っている隊士たちに鍋を振る舞った。玄弥はその鍋を突っつきながら行冥の優しさを語った。

炭治郎はこれから義勇の下へ向かうため、玄弥を誘うが、玄弥はまだ岩を一町先まで動かせていなかったため、辞退した。

それを聞いていた伊之助は玄弥を挑発するが、玄弥はそれを無視していた。

それから炭治郎は善逸のために魚を焼き、善逸がいる所へやって来た。

「あつ、善逸！岩は動いたのか？」

炭治郎は岩の上に座っている善逸に声をかける。

「いや、まだだ」

炭治郎の質問に善逸の出した答えは“NO”だった。

「なあ炭治郎、ちよつといいか？」

今度は善逸が炭治郎に質問をした。

「もし、もしも…だ。禰豆子ちゃんが人を喰った時、炭治郎はどうするんだ？」

善逸の質問は、かつて炭治郎の育手の鱗滝左近次が初めて会った時に炭治郎にした質問と同じだった。

「その時は、『俺が禰豆子を殺して、腹を切ってお詫びをする』。でも、禰豆子にはそんなことしないし、俺がさせない」

炭治郎は左近次の時とは違い、即座に答えた。

「そうか…。ありがとう、それを聞いて良かった」

善逸は炭治郎の回答に礼を言った。

「善逸…、どうしたんだ？ここ暫く無言だったから……」

「俺は大丈夫だ。俺は”やるべき”こと、”やらなくちゃいけない”

「ことができた」

炭治郎は善逸からかつて無い程の”決意の匂い”を嗅ぎ取った。

「善逸、俺にできることがあれば手伝うけど」

炭治郎は善逸に協力を申し出る。

「ありがとう。でも、これは絶対に俺がやらなきゃ駄目なんだ」

しかし善逸は炭治郎の申し出を断った。

「……わかった。でも、もし行き詰まったら、声をかけてくれ。いくらでも協力するから。後、魚焼いたから後で食べてくれ。ここに置いておくから」

炭治郎は焼き魚を乗せた葉を岩の側に置き、その場を去った。

「……炭治郎、ごめん。だけど、これは、これだけは俺が”始末”しないといけないんだ……！」

善逸は誰も聞いていないのに、虚空に話していた。

第22話

炭治郎は行冥の修行を全て終え、最後の柱、義勇の下へ向かっていった。

そして義勇の屋敷『水屋敷』へと到着すると、中庭で炭治郎の師範である義勇と実弥が木刀をそれぞれ持って対峙しており、炭治郎は垣根の外から様子を伺っていた。

すると

「風の呼吸 壱ノ型 塵旋風・削ぎ！」

実弥が高速で斬撃を繰り出した。しかし義勇はそれを木刀で受け止めた。だが、受け止めた木刀が少し欠けてしまった。

そして何度も打ち合い

「水の呼吸 肆ノ型 打ち潮！」

義勇が実弥の足を狙って打ち潮を使うが、実弥はジャンプしてそれを避けた。

「風の呼吸 伍ノ型 木枯らし風！」

「水の呼吸 漆ノ型 雫波紋突き！」

実弥は空中で風のエフェクトを、義勇は地上から水のエフェクトを纏った突きをそれぞれ繰り出した。その威力は凄まじく、木刀の切っ先が触れ合った瞬間、木刀が粉々に砕けてしまった。

「……木刀が砕けてしまったな」

「…そうだなア」

義勇と実弥はお互いの砕けた木刀をぼんやりと見ていた。

「……炭治郎、そこにいるのは分かっている。隠れてないで出てきたらどうだ?」

「!?」

義勇に言われ、炭治郎は垣根を越えて姿を見せた。

「あの…、お二人は何を…」

炭治郎は先程の稽古について質問をする。

”柱稽古”だ。柱稽古には二種類の意味合いが在って、一つ目は今炭治郎たちが行っている”柱が下の階級の者を稽古する”もの、二つ目は文字通り”柱同士の者が稽古をする”ものだ。俺たちがやっていたのは二つ目の意味の柱稽古だ」

義勇は丁寧に炭治郎に分かりやすく説明をした。

「水柱様、風柱様。稽古は終わりましたか?」

そこにカナヲが現れた。

「栗落花か、ちょうど今終わった所だ。そして”人数が揃った”からやっと稽古をつけることができる」

「えっ!?カナヲはまだ稽古をつけてはいなかったんですか!？」

義勇の発言に炭治郎は驚いていた。

「ああ。この俺、水柱・富岡義勇」の柱稽古、それは『連携訓練』だ」

柱稽古 最終試練

水柱・富岡義勇の連携訓練

「任務によつては柱を含めて複数の隊員が一緒の任務に赴くことがある。炭治郎も覚えはあるだろ？那田蜘蛛山の時や無限列車、最近だと俺と煉獄の刀鍛冶の里の護衛があるな」

「鬼が一体に対して隊員が複数の場合、連携がとれていないと、互いの足を引っ張ることになる。俺の訓練では、それを無くすために設けたんだ」

義勇の説明に炭治郎、カナヲ、そして実弥が頷いた。

「実弥…、お前には以前話しただろ…。まあいい、まず最初に俺と実弥、炭治郎と栗落花の組、次に俺と炭治郎、実弥と栗落花と言った感じで組を変える。全ての組で相手を全員倒せたら終了だ。では道場へ移動する。付いて来てくれ」

義勇は説明を終了し、道場へ移動する。その後を炭治郎たちが追いかけた。

…

……

……

「はあ……」

その日の夜、炭治郎は湯に浸かり、一日の疲れを癒していた。

「流石は義勇師範と実弥師範……、全く敵わなかった……」

炭治郎はその日の訓練を思い返していた。

柱と柱、隊員と隊員。柱と隊員、柱と隊員。全てにおいて炭治郎は相方の足を引っ張っていた。

炭治郎は稽古が終わり次第相方に謝ったが、みんな笑って許していた。

「何がいけなかったんだろう……」

炭治郎は考えに集中してしまったのか、逆上せてしまった。

……

……

……

それから三日後、炭治郎は「ある結論」にたどり着いた。

「（義勇師範の動き……、まるで」相方が次に出す型が分かっている」よ

うな動き……。そうか！義勇師範は相手の動きを”観察”して次に使う型の動きを”予測”していたんだ！」

炭治郎は義勇の動き方に違和感を感じており、その結論にたどり着いた。

「風の呼吸 伍ノ型 木枯らし風！」

「花の呼吸 陸ノ型 渦桃！」

炭治郎が考えている途中で実弥が空中からの突きを繰り出し、カナヲは攻防一体の技で避ける。

「(ここだ!) ヒノカミ神楽 輝輝ききおんこう恩光！」

炭治郎は実弥が着地する瞬間を見切り、力強く踏み込んで木刀を振り抜いた。

実弥は何とか木刀で防御するが、木刀の耐久力が限界を迎えたのか、木刀が折れてしまった。

「水の呼吸 参ノ型 流流舞い！」

そこに義勇が炭治郎と着地しようとしたカナヲを同時に攻撃しようとした。

「ヒノカミ神楽 幻日虹げんにちこう！」

しかし炭治郎の姿がまるで幻のように揺らめき、義勇の木刀が当たった瞬間に消えた。すると義勇の後ろにカナヲをお姫様抱横抱つこした炭治郎がいた。

「カナヲ、大丈夫？」

「う…、うん…」

カナヲは自分の顔と炭治郎の顔が近いことに恥ずかしさを感じ、顔を真っ赤に染めていた。

炭治郎とカナヲはお互いの顔を見つめ、徐々に顔の距離が近くなる。

「水の呼吸 拾ノ型 生生流転！」

『本気でkissする5秒前』で義勇が攻撃を仕掛け、二人はそれぞれ反対方向に離れた。

「今は訓練中ということを忘れるな。そういった行為は訓練が終わってからにしろ」

義勇に正論を言われた二人は反省し、気持ちを切り替えて訓練に挑んだ。

だが結局この日も炭治郎は義勇たちに勝つことはできなかった。

…

…

…

その日の夜、炭治郎は風呂で汗を流し、後は寝るだけとなり、自分

に用意された部屋に布団を敷いた。すると

『炭治郎、起きてる?』

カナヲが襖の向こう側から声をかけた。

「カナヲ? どうしたんだ?」

『ちよつとお話したくて…、入っていい?』

「分かった、入っていいよ」

炭治郎は入室を促し、カナヲは襖を開けて中に入った。カナヲの姿は寝間着を着ており、髪も解いて自然な状態だった。

「……………」

「……………」

二人は無言のまま見つめあつた。そして

「炭治郎、聞いて。私、炭治郎のこと、一人の男性として好きなの。だから、私を炭治郎のお嫁さんにして」

カナヲは炭治郎に愛の告白をした。

「……………嬉しいよ、カナヲ。俺も、俺もカナヲのこと、一人の女性として好きだ。だから、俺と結婚してくれ」

炭治郎もまた、カナヲに告白をした。

「……嬉しい！」

カナヲは嬉しさの余り、炭治郎に抱きついた。

「炭治郎……」

「カナヲ……」

二人の顔は徐々に近くなり、そして

「んっ……ちゅ」

「んう……」

ゼロになった。

……

……

……

チュンチュン…… チュンチュン……

「ん……んんっ……」

翌朝、炭治郎が目を覚ました。炭治郎はふと、隣に目を向けると、そこにはカナヲが幸せそうな寝顔で寝ていた。

「何でカナヲが……？あつ……、そっか……。昨夜、俺はカナヲと……」

炭治郎はカナヲと一緒に一晩を過ごしたことを思い出した。そして炭治郎はカナヲの頬にキスをして、起こさないように気をつけながら起き上がり、退室した。

実はこの時、カナヲは既に目覚めており、狸寝入りをしていたのだ。そして炭治郎が自分の頬にキスをしたことで、幸せの絶頂に浸っていた。

「よオ炭治郎、おはよう」

「あつ、実弥師範、おはようございます」

炭治郎は顔を洗いに井戸へ行く途中の廊下で実弥と出会い、挨拶を交わした。

「昨夜は”お楽しみ”だったなあ」

「…!?…!?…!?」

実弥が炭治郎にひっそりと話すと、炭治郎の顔が一気に真っ赤に染まり、口を金魚のようにパクパクさせた。

「だっはっはっ！そんな恥ずかしがることアねえだろ！堂々と胸を張れ胸を！それと俺は今日、玄弥の様子を見に悲鳴嶼さんの所へ行くかなア。因みに義勇には既に断りはもらっているからな」

実弥は炭治郎の背中を何度も叩き、その場を去った。

「むっ…、炭治郎か。おはよう」

「あつ…、義勇師範。おはようございます」

炭治郎が井戸に到着すると、そこには義勇が顔を拭いていた。どうやら先に顔を洗っていたようだ。

「炭治郎、昨夜は良く眠れたか？」

「はい、もうぐっすりでした」

「そうか。それと今日の稽古だが、俺と実弥は用事があるので休みとする。栗落花にもそう伝えてほしい」

義勇は稽古を休みにすることを伝え、それをカナヲにも伝えるように頼んだ。

「分かりました。実弥師範とは先程廊下で会いまして、玄弥の所へ行くって言っていました」

「そうだな、俺もそう聞いている。俺はしのぶと用がある。それと今晩は”お赤飯”を炊くことにした。楽しみに待っていてくれ」

義勇はそれだけ言って着替えのために去った。

…

…

…

炭治郎はその後カナヲに今日の稽古は休みであることを伝えた。そしてカナヲはこれを好機と捉え、炭治郎をデートに誘う。

炭治郎は満更でもない様子でそれを承諾。二人は隊服に着替え、市井へと向かった。

カナヲは歩きにくそうにしていたが終始笑顔で私服を買ったりと楽しそうに、炭治郎もまたカナヲの笑顔を見て笑っていた。

そしてその夜、義勇は言った通り赤飯を炊き、みんなに振る舞った。

炭治郎とカナヲは美味しそうに食べていたが、実弥が赤飯を出す理由”を言うと、二人共派手に赤飯を吹き出し、顔を真っ赤にしていた。

…

…

…

それから二日後、義勇の下に玄弥と伊之助が訪れた。二人共行冥の稽古を突破したからである。

義勇は二人に稽古の内容を説明し、炭治郎とカナヲ、実弥を含めた六人で稽古を開始した。

しかしその稽古は唐突に終わりを迎える。

「カー！カー！緊急招集！緊急招集！産屋敷邸二無惨ガ襲撃！襲撃！柱並ビニ隊員ハ速ヤカニ集マレ！」

鬼殺隊の怨敵である鬼舞辻無惨が現れたせいだ…。

…

…

…

鴉が鬼殺隊全員に報告に向かう前、産屋敷邸の一室にあまねが座っていた。その前には布団が敷かれており、その中には”全身に包帯を巻いた”耀哉が寝ていた。

するとその部屋から見える中庭から一人の男性が現れた。

「やあ…、ようやく…、姿を…見せたね…。鬼舞辻…無惨…」

その男性とは無惨だった。

「何とも醜悪な姿だな…、産屋敷」

無惨は今の耀哉の姿を見て、”醜悪”の一言で済ませてしまった。

「醜悪…か。私がこの姿になったのも、私の一族が鬼殺隊を結成したのも、全て…、全て君が原因なんだ!!」

耀哉は今までに無い程の大声を出した。

「無惨…、君と私は元は”同じ一族”だった…。しかし、君が鬼になってしまったからには私の一族は呪われてしまった…。生まれてくる子供は皆病弱ですぐ死んでしまう…。いよいよ一族が絶えてしまいそうになった時、神主から助言をもらった」

「『同じ血筋から鬼が出ている。その者を倒すために心血を注ぎなさい』

い。そうすれば一族は絶えない』…と。代々神職の一族から妻をもらい…、子供は死にづらくなったが…、それでも、この呪いのせいで三十年と…、生きられない」

耀哉は一族に伝わる伝承を無惨に言う。

「くだらないな。私達にはそんなことは関係無い。お前が私の血縁だろうと、私には知ったことでは無い」

しかし無惨はそれを一蹴した。

「私の悲願は達成される。竈門彌豆子を取り込むことで。私は太陽を克服する。さあ無駄話は終わりだ。竈門彌豆子を差し出せ。そうすればなるべく苦しまずに殺してやろう」

「ふっ…、ふふっ…、ふふふっ…、ふははっ…」

無惨の要求に耀哉は笑い出した。

「…何がおかしい」

笑い出した耀哉を見て無惨は怒りを堪えて問い質す。

「私が素直に彌豆子を引き渡すとも思っているのかい？滑稽、余りにも滑稽だ。私たちは君の部下でも、しもべでも、ましてや奴隷でも無い。君に彌豆子は渡さない」

耀哉は無惨の要求を突っぱねた。

「…まあいい。私はお前とは違って時間はたっぷりある。お前を殺した後、じっくりと竈門彌豆子を探すでしょう」

「そんなこと、させると思っているのかい？」

「……なに？」

無惨が耀哉を殺そうと手を伸ばした時に、耀哉の一言でその手が止まった。

「君は何度も、そう何度も”虎の尾”を踏み、”龍の逆鱗”に触れている。本来なら一生寝ていたはずの虎や龍を君は起こしてしまった。彼らはずっと狙っているよ、君の命を奪い取るまで」

「それに、君が死ねば、”全ての鬼が滅ぶ”のだろうか？」

耀哉に凶星をつかれ、普段動揺しない無惨が一瞬、動揺してしまっ
た。

「この空気の揺らぎ……、どうやら凶星のようだね」

「…黙れ」

「ふふっ…、その言葉は今肯定に聞こえるよ。私の言いたいことはもう全て言い尽くした。まさか君がここまで聞いてくれるとは思わなかったよ」

「…話は終わりだな？なら死ね、産屋敷」

無惨は今度こそ耀哉を殺そうと手を伸ばす。

…

……

……

鴉の知らせを受けて、蜜璃、小芭内、無一郎、実弥、義勇といった柱、そして炭治郎、カナヲ、伊之助、玄弥といった隊員が産屋敷邸へと急いで向かっていた。

そして産屋敷邸をそれぞれの視界に捉えた瞬間

ドゴッソーン……

産屋敷邸が”爆発”した。

普通ならば、敬愛する者が亡くなった時、呆然とする。”普通ならば”。現にカナヲ、伊之助、玄弥の三名は呆然としていた。

しかし炭治郎と、柱全員は何故か”笑っていた”。そう、まるで産屋敷邸が爆発するのを”知っていた”かのように……

……

……

……

産屋敷邸を灰にしている炎の中、一人の男がいた。

「グツ、産、屋敷イイツ!!」

その男こそ今耀哉を殺そうとしていた『上司にしたくない者N〇』。

1』の男、『超ブラック企業の第一人者』、『腐ったワカメ頭』の鬼舞辻無惨だった。

「迂闊だった…。私は産屋敷耀哉という男を、人間にあてる物差しで測っていた。だがそもそもそれが間違いだった！産屋敷は尋常では無い！私を殺すために屋敷諸とも妻や子供を道連れにするか普通!?」

耀哉の思いがけない策に無惨はかなり動揺していた。

「しかし、奴はこれだけでは終わらないはずだ。現に人の気配がこちらに集まりつつある、恐らくは柱。あの野郎、自分を囷にして戦力を集めていたな！しかも爆発と同時に撒菱まきびしのような物を使って殺傷能力を上げていた。下手をすれば自分にも刺さるぞコイツ！」

無惨は心の中で愚痴っていた。すると無惨の周りに小さな肉の塊が幾つも漂っていた。

「（これは…、肉の種子。血鬼術か!?）」

無惨が肉の塊が血鬼術だと見破った瞬間、種子が棘に変わり、無惨を貫いた。

「（固定された!?この棘、私の体内で更に細かく枝分かれして抜けないようになってる。だか問題無い。全て吸収すればいいだけのこと）」

無惨は棘を吸収し始めると、腹に違和感を感じた。無惨が目を向けると、そこには零余子が自分の腹に手をつっ込んでいた。

「貴様は…、零余子!?何故生きている!?貴様はあの時、私が殺したはず

！」

「残念だったわね鬼舞辻無惨！あの時アンタが殺したのは私の血鬼術で作った分身よ！そして私はあの後、自分の血鬼術を昇華させて他人の分身をも作ることができるようになった！アンタが殺そうとしていた”お館様”たちは、私が作り出した分身！本物はアンタの知らない所で、アンタが死ぬ知らせを首を長くして待っているわよ！」

何と先程まで無惨の前にいた耀哉たちは、零余子が血鬼術で作りに出した分身だったのだ。

「それに、今アンタは体内の棘と一緒に私の手も吸収した。私の手には何が握られていたと思う？”鬼を人間に戻す薬”よ！」

「馬鹿な!?そんな薬、完成しているはずが無い！」

無惨は自分が吸収したのが棘だけでは無いことを信じはしなかった。

「じゃあ今自分が吸収したのは何かしらね？言つとくけど、薬が完成したのは本当よ？アンタは徐々に人間に戻り、不老じゃ無くなる。それまで精々足掻くことね」

無惨に説明をしている零余子の体が徐々に崩壊し始めた。

『そうそう、言い忘れていたけど、私もお館様たち同様、血鬼術で作られた分身よ。本物はここには誰一人たりともいないわ。岩柱様、後はお願ひしますね…』

零余子の分身はそう言い残した途端、崩壊した。

「無論！零余子殿、そなたの覚悟、無駄にはしない！鬼舞辻無惨、覚悟
！南無阿弥陀仏！」

するとまるで入れ替わるかのように行冥が現れ、自分の武器の一つ
である棘付き鉄球を無惨に向けてぶん投げ、無惨の頭を潰した。

第23話

「(……やはり!!鬼舞辻無惨…、この男、頸を斬っても死なない!!)」

行冥は無惨の再生する音を聞いてその再生速度を知った。

「(この再生の速度、音からして私が今まで対峙したどの鬼よりも強い!流石鬼の始祖というべきか。これはやはり、夜明けまでの持久戦に持ち込むしか無い…か)」

頸を再生させた無惨は行冥に手を向ける。すると

『黒血枳棘』

血色の有刺鉄線を伸ばした。

『岩の呼吸 参ノ型 岩軀の膚』

しかし行冥は自身の武器である手斧と鉄球を振り回し、鉄線を悉く斬った。

「貴様アアア〜ツ!!」

そこに実弥を始めとした柱たちが抜刀しながら続々と到着した。

「(柱たちが集結…、お館様のご配慮か。見事なり…)無惨だ!鬼舞辻無惨だ!奴は頸を斬っても死なない!夜明けまで此処に押し留めるぞ!!」

行冥の言葉に柱たちは目の前にいる男が無惨だと知る。

「無惨!!」

ただ一人、以前浅草で出会った炭治郎を除いては。

『霞の呼吸 肆ノ型』

『蛇の呼吸 壺ノ型』

『恋の呼吸 伍ノ型』

『水の呼吸 参ノ型』

『風の呼吸 漆ノ型』

『雷の呼吸 壺ノ型』

『獣の呼吸 伍ノ牙』

『花の呼吸 肆ノ型』

『ヒノカミ神楽』

柱や隊員がそれぞれの型を繰り返すために足を踏ん張る。しかし、急に脱力したかのように踏ん張りが利かなくなった。何故なら、”足下が地面では無く、開いた障子”だったからだ。

「フハハハハッ、これで私を追い詰めたつもりか鬼狩り共!?! 貴様らがこれから行くのは地獄だ! 目障りな鬼狩り共、今宵皆殺しにしてやろう!」

無惨は障子の向こう側に落ちながら挑発する。

「地獄に行くのはお前だ無惨!!絶対に逃がさない、俺たちが必ず倒す!!」

炭治郎も無惨に負けじと挑発をする。

「やれるものなら、やってみろ!竈門炭治郎!!」

こうして無惨を含む産屋敷邸に集まったメンバーが、無限城へと落とされた。

…

…

…

炭治郎は型を繰り出して体勢を変えてどこかに掴まろうとするが、落下速度が速く、加えて落下による風圧で体勢を整える処か型を繰り出す余裕すら無かった。

しかし誰かが炭治郎の羽織を掴み、振り子の要領で炭治郎を放り投げたおかげで、炭治郎は難を逃れた。

シユタツ「炭治郎、大丈夫か!？」

「義勇師範!」

炭治郎を助けたのは義勇だった。

「ありがとうございます！おかげで助かりまし…」

『水の呼吸 壺ノ型 水面斬り』

お礼を言っていた炭治郎の背後に鬼が現れたが、炭治郎は振り向き様に水面斬りを使い、鬼の頸を斬った。

しかしそれが合図だったのか、異形の鬼が次々と炭治郎の目の前の襖を破って涌き出てきた。

『水の呼吸 参ノ型 流流舞い』

『風の呼吸 陸ノ型 黒風烟嵐』

こくふうえんらん

だが義勇と炭治郎は鬼を悉く斬り伏せた。

「大丈夫だったか？」

「はい。稽古をしていて良かったです」

二人は互いの無事を確認すると、その場を移動した。

…

…

…

その頃、小芭内と蜜璃は一緒に行動しており、次々に現れる鬼を斬っていた。

『蛇の呼吸 伍ノ型 蜿蜿長蛇』

「甘露寺に近づくな塵共」

「(キヤーツ、伊黒さん素敵!)」

その殆んどが小芭内に倒されていたが…。

…

……

……

同じ頃、行冥は無一郎を連れて無限城内を走っていた。

「凄い量の鬼ですね…」

「下弦程度の力を持たされて…いるようだ…。我々を消耗させようとしているのだろう…」

二人が話している間にも、鬼は襲ってくるが、こちらも返り討ちにしていた。

…

……

……

「ちくしょう…、炭治郎たちとはぐれちまったぜエ…」

一方、実弥は一人で無限城内を探索していた。その目的ははぐれた炭治郎たちを見つuckerためだった。

しかし実弥の下にも鬼が押し寄せて来た。

「しつけエんだよ!!風の呼吸 肆ノ型 昇上砂塵嵐!」
しょうじょうきじんらん

実弥は襲ってきた鬼を細切れにする。しかし鬼が四方八方から次々に現れる。

「悪いが、お前らに構っている暇はごちらには無エんだよ!!」

実弥は鬼の群れに一人、突っ込んで行った。

…

…

…

炭治郎と共に行動していた玄弥、伊之助、善逸、カナヲはそれぞれバラバラにはぐれてしまったが、鬼を倒しながら城内を進んでいた。

…

…

…

無限城の廊下の一角に、何故かしのぶがいた。

「……は一体……」

しのぶが鳴女に捕捉されたのは丁度義勇の稽古が一日休みの時、義勇はしのぶの所へ赴き、炭治郎とカナヲが結ばれたことをひっそりと話していた。それに喜んだしのぶは義勇を街に連れて逢い引きしたのだ。

しかも夜になつてもしのぶは義勇を離さず、そのまま宿に泊まり、翌日の朝に蝶屋敷に帰つたのだつた。

無論しのぶと共同で薬を生成していた珠世は当然しのぶを叱つた。その姿を見ていたアオイたちは『まるで母子おやこみたいだつた』と語つていた。

しのぶは辺りを見渡し、自分が何処にいるのかを把握しようとしていた。

しのぶは鬼の気配を感じ取り廊下を進んでみると、一つの扉の前で止まつた。

「(この部屋から血の匂いがする……)」

しのぶは意を決してその扉を開けた。

その部屋は床一面水が張られており、所々に蓮華の花があつた。そして部屋に掛けられた棧橋の上には、幾人もの女性の死体が転がっていた。

バリッ　バリッ　ゴリッ「あれえ、来たの？」　グルンッ

するとしのぶの気配を感じたのか、女性を喰っていた鬼がしのぶの方を振り向いた。

「わあ、女の子だ！若くて美味しそうだなあ。後で鳴女ちゃんにありがとうって言わなくちゃ」

鬼は食事を止めてしのぶの方に体を向け

「やあ、俺は童磨。いい夜だねえ」

被っていた帽子を取って自己紹介をした。

「た…、たす…。助けて、助けて…！」

その時、まだ生き残っていた女性がしのぶに助けを求めた。

「しーっ、今話してるだろうに…」

ヒュガッ

童磨は腕を振って氷を出した。しかし童磨の攻撃は空振りに終わった。

「大丈夫ですか？」

何故なら、しのぶが間一髪で女性を救出していたからだった。

女性は息を荒くしているが、突如、全身が切り刻まれて絶命した。

「あ、大丈夫！そこにそのまま置いて！後でちゃんと喰ってあげるから」

童磨は徐に立ち上がり、持っていた鉄扇を広げた。

「……これがあなたのやり方ですか？『万世極楽教』の教祖、いえ、『十二鬼月・上弦の弐』、童磨……」

しのぶは怒りに満ちた顔を童磨に見せた。

「あれ？俺のこと知ってるの？そうだよ。その子はもう苦しくない、辛くもない、怯えることもない。誰もが死ぬのを怖がるから、俺が喰ってあげているんだ。俺と共に永遠の時を生きていくんだ」

「俺は信者たちの想いを、血を、肉を、しっかりと受け止めて救済し、高みへと導いている。それが俺の仕事であり、やるべきことなんだ」

童磨は自分のことを知っていることに疑問を感じるが、しのぶの質問に答える。

「反吐が出ますね……、あなたの頭の中は蛆虫が湧いているんじゃないですか？」

「初対面なのに酷いこと言うなあ……、何かつらいことでもあったのかい？よかつたら聞くよ……」

しのぶの罵詈雑言に動じない童磨にしのぶの怒りは更に増した。

「つらいも何も……、私の”姉”を殺したのはお前だな！この羽織に見覚えは無いか!？」

しのぶは堪忍袋の緒が切れそうになりながらも、辛うじて怒りを抑え込み、自分の羽織を握りながら童磨に問い質す。

「んん？ああ、あの花の呼吸を使つてた女の子か！いやあ残念だったよ、朝日が昇つて救済し損ねたからね。ちゃんと喰つてあげたかった」

『蟲の呼吸 蜂牙^{ほうが}ノ舞 真靡き』

童磨の言葉にとうとうしのぶの怒りが頂点を越え、童磨の左目を刀で突き刺した。

『血鬼術 蓮葉氷』

「うーん、速い、速いねえ。凄い突きだ、手で止められなかった。けど不憫だなあ、突きじゃ鬼は殺せない。やっぱり頸を斬らないと」

童磨は血鬼術でしのぶを遠ざけ、突かれた左目を再生させた。

「それは重々、百も承知です。ですが、”毒”ならどうですか？」

しのぶは納刀しながら童磨を見据える。

「ん？グツ、ガハツ」ビチャビチャ

童磨の体内に注入された毒が効果を発揮し、童磨は血反吐を吐く。

「あれえ？毒、分解できちゃったみたいだなあ。ごめんねえ」

しかし童磨は血反吐を数回吐いただけで体内の毒を解毒してしまつた。

「その刀、鞘にしまう時の音が独特だね。そこで毒の調合を変えてい

るのかな？」

童磨は鞘にしまう音を聞いただけで、調合を変える仕組みを見破ったのだった。

「うわーっ、楽しい!! 毒を喰らうのって面白くて癖になりそう! 次の毒なら殺せるかな? やってみるかい?」

「ええいいですよ。そんなに癖になるのだったら、何度でも打ち込んでもあげましょう」

しのぶは童磨に別の調合を施した毒を注入しようとしていた。

…

……

……

しのぶが童磨と出会っていたころ、炭治郎と義勇の目の前に”ある鬼”が現れた。

「!? 炭治郎、富岡殿!」

「猗窩座殿 (さん) !!」

二人の目の前に現れたのは猗窩座だった。

「丁度良かった! 今あなたたち二人を探していた所だったんだ! この無限城に胡蝶殿が落とされてしまったんだ!」

「何だって!?!それは本当か猗窩座殿!」

「間違い無い!現に俺は胡蝶殿が落とされた扉を潜ってここにいるのだからな!」

猗窩座はしのぶが無限城に落とされたことを義勇たちに知らせた。

「胡蝶殿は恐らくだが、童磨の所にいると思う!奴は女の肉が好物だから、胡蝶殿が危ない!今から童磨のいる部屋に案内するからついて来て欲しい!」

「わかった(わかりました)!!」

猗窩座の要請に二人は頷く。しかしその行き先に鬼が大量に現れたのだった。

「俺たちの邪魔をするな!!『炎の呼吸 伍ノ型 炎虎・二連』!!」

猗窩座は腰の後ろに差している二本の短刀をそれぞれ逆手持ちで抜き、構えると、炎でできた虎を二匹同時に鬼に向けて繰り出す。すると、目の前の鬼たちは瞬く間に灰となっていく。

「猗窩座さん…、今のって…」

「ああ、杏寿郎殿が使う『炎の呼吸』だ!耀哉殿こと”お館様”が渡してくれた日輪刀を握ってみると、刀身が”燃えるような赤”に染まってるな!それで俺の適正呼吸が”炎”と分かると、お館様は杏寿郎殿に連絡して俺に炎の呼吸を伝授してくれたのさ!」

「更にこの短刀は鋼錢塚殿が俺のために打ってくれた刀だ!」

猗窩座は何故炎の呼吸を使えるのか、何故短刀を持っているのかを説明した。

「そうだったのか…。そう言えば、猗窩座殿の服も、鬼殺隊の隊服に似てるな…」

義勇が疑問に思ったこと。それは『猗窩座が着ている服』だった。それもそのはず。猗窩座の服は鬼殺隊の隊服であるのだから。

(イメージは猗窩座の服を鬼殺隊服に見立てた物で、上着の前を全部解放している感じです)

「因みにだが、零余子の色は『青』だったぞ！今は鱗滝左近次と言う天狗の面を着けた方に教えを請うているはずだ！」

猗窩座は目的地に進みながら、零余子の状況を説明していた。

「そうなんですか！実は俺と義勇師範も鱗滝さんの下で修行していたんですよ！」

炭治郎、義勇もまた、猗窩座について行きながら、鬼を討伐していた。すると三人の前方からカナヲと伊之助が来ているのを見つけた。

「カナヲ！伊之助！」

「炭治郎！」

「権八郎！」

炭治郎たちは二人と合流し、猗窩座が言っていたしのぶのことを話した。

「師範が心配だわ！早く師範の下へ行かないと!!」

「分かっている！皆、こっちだ！」

炭治郎たちは猗窩座先導の下、童磨がいる部屋まで進んだ。そして開けた場所に到着すると、猗窩座はそこで立ち止まった。

「この”下”だ。この下の部屋が童磨の部屋だ」

猗窩座は足下を指差し、説明をする。

「今からこの足下をブチ抜く。衝撃が走るから気をつけてくれ」

猗窩座はそう言って持っていた短刀を納刀すると

「術式展開、破壊殺・羅針！滅式・鬼気正拳突き！」

自分の足下に拳を突き刺した。すると床から波紋のように衝撃が広がり、猗窩座を中心に床が砕けた。

「このまま一気に下へ降りるぞ!!」

「「おう（はい）!!」」

先に降りる猗窩座を追うように、炭治郎たちは穴へと飛び降りた。

…

…

……

炭治郎たちが部屋の上に到着していたころ、しのぶは童磨と戦っていた。

「うーん、これで六回目。これも駄目だったみたいだね」

童磨は毒を打ち込まれた箇所をしのぶに見せた。そこは毒によって被れていたが、徐々に他の箇所と同じような肌色に戻っていった。

「(毒が悉く利かない…、毒の耐性がつくまでの早さが異常…、これが上弦の強さ…)」

しのぶは顔に脂汗を掻きながら、童磨を見ていた。

「凄い量の汗だね、大丈夫かい？さつき俺の血鬼術吸っちゃったから、肺胞が壊死してるからつらいよね？」

童磨は血鬼術で自分の凍らせた血を霧状に散布していたため、それを吸ってしまったしのぶは肺胞が幾つか壊死してしまい、呼吸が若干し辛くなっていたのだ。

「(なら…、連撃で大量の毒を打ち込む！)」

『蟲の呼吸 蜻蛉ノ…』

ドガンッ

「!?何が…」

しのぶが童磨に毒を打ち込もうとした瞬間、部屋の天井が割れたの

だった。そしてそこから降りてくる人たちを見ると、しのぶの顔に少しではあるが、笑みが溢れていた。

「童磨ーッ!!」

『炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり』

猗窩座が先陣を切って童磨に攻撃を繰り出す。童磨は反応が遅れ、何とか距離を取るが、片腕を斬られてしまった。

「しのぶーッ!!」

「義勇さん!」

そこに猗窩座の後を追った義勇たちが現れ、着地した義勇はしのぶを抱き締めた。

「しのぶ、怪我は無いか!?何か変なことをされてないか!」

義勇はしのぶの体を触りながら質問をする。

「相手の血鬼術によって肺胞が少し壊死してしまいましたが、問題はありません」

しのぶは苦笑しながら義勇の質問に答えた。

「そうか…、良かった…」

義勇は安堵のため息を一つ吐くと、しのぶから少し離れた。

「しのぶ、お前はもう戦わなくていい。童磨は俺たちが殺る。お前の

敵は俺の敵だ」

義勇はしのぶに背を向けて言った。

「義勇さん……」

しのぶは頬を少し桃色に染めていた。

…

……

……

「ちよつ、猗窩座殿！何故俺に刃を振るう!?俺たちは仲間じゃないのか!？」

童磨は猗窩座の攻撃を避けながら猗窩座に質問をする。

「仲間……だと?ふざけるな!!俺は貴様など、仲間と思つたことなど一度も無いわ!!」

『炎の呼吸 壺ノ型・改 不知火・双連』

猗窩座は短刀をバツの字に振り、童磨の胸を斬つた。

「貴様は感じたことがあるか!?親に褒められようと努力した子供の苦勞を!」

「子供の努力を褒める親の手の温もりを!」

「親を失った子供の哀しみを！」

「想い人から寄せられる愛情を！」

「愛する人が死んでしまった絶望を！どれか一つでも、お前は感じたことがあるか!!？」

『炎の呼吸 参ノ型 気炎万象』

猗窩座は短刀の柄を強く握り締めていたせいか、刀身が赫くなっていた。そしてそのまま短刀を振り抜くと、防御しようとしていた童磨の両腕を一刀両断した。

「ぎやあああツ!!熱い!痛い!何なんだこれは!？」

童磨は初めての痛みに悶える。

「貴様が喰った人は確かに怯えることも、哀しむことも無い。しかし、それと同時に”楽しむ”ことも、”喜ぶ”こともできない!貴様がしているのは”救済”では無く、ただの”食事”だ!!」

猗窩座は童磨を指差し

「貴様の悪行は法律では裁くことはできない!だから、俺が裁く！」

童磨に向かって見栄を切った。

「悪?それは違うよ。俺は信者がこれ以上苦しまないように救ってあげているんだ。だからこれは”正義”なんだよ。それに裁かれるのは寧ろ君の方だよ。無惨様を裏切った罪、俺が裁こう！」

『血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩』

童磨は自分の血鬼術の中で最大にして最強の血鬼術を繰り出す。

「なら俺の”裁き”と貴様の”裁き”、どちらが上か勝負と行こう！」

『炎の呼吸 奥義 玖ノ型 煉獄』

猗窩座が繰り出す炎の呼吸の奥義と、童磨の氷の菩薩がぶつかり合った。

「はああああああーッ!!」

「うおおおおおーッ!!」

途中、童磨の菩薩が猗窩座を少し後退させる。しかし菩薩と言えど所詮は氷。猗窩座の炎を受けた所から徐々に溶け始めていった。そして

「おおおおおああああーッ!!!」

ガシヤーンツ……

猗窩座の奥義が童磨の菩薩を破壊し、童磨の体を袈裟斬りにした。

「今だ！富岡殿！胡蝶殿！」

『水の呼吸 壱ノ型 水面斬り』

『蟲の呼吸 蝶ノ舞 戯れ』

猗窩座の合図により、義勇が童磨の残った体から頸を斬り離し、その頸にしのが毒を打ち込んだ。

「あなたは今は頸だけ。なら毒の回りは分解速度より早くなる」

しのが言う通り、童磨は毒を打ち込まれた瞬間、顔中に毒が広がる、更に日輪刀で頸を斬られたことによって崩壊した。

第24話

『カアアツ、カアアツ！水柱・富岡義勇、蟲柱・胡蝶シノブ、並ビニ鬼ノ協力者・猗窩座！上弦ノ式ヲ討伐！討伐！』

『風柱・不死川実弥、岩柱悲鳴嶼行冥！上弦ノ壱ヲ討伐！討伐！霞柱・時透無一郎、不死川玄弥、重症ニヨリ戦線離脱！戦線離脱！』

『我妻善逸、上弦ノ陸ト遭遇！遭遇！重症並ビニ苦戦ノ末、上弦ノ陸ヲ討伐！討伐！』

「鴉たちが戦闘報告を随時伝える。

ズバツ「鴉たちの情報共有の早さが異常ですね…」ズバツ　ズバツ

ザシュツ「それはそうだろう。何せ愈史郎殿の”紙眼”を鴉たちに着けているのだからな」

炭治郎たちは襲い掛かってくる鬼を倒しながら無惨がいる所まで進んでいた。

炭治郎が情報の早さを気にしていると、猗窩座がその仕組みを説明した。

炭治郎は鴉に目を向けると、確かに以前浅草で愈史郎が自分に着けてくれた”札”を鴉の胸の辺りに着けているのを見つけた。

「愈史郎殿の紙眼は姿を消すだけでは無く、見たものを共有する力を持っている。だから誰がどの鬼と戦い、どうなったのか、随時分かると言う訳だ」

猗窩座の説明に皆が納得していた。

…

…

…

猗窩座たちが無惨の所へ向かっている頃、無惨を搜索していた部隊の第一陣が無惨のいる所へと到着した。

部隊の指揮を統括している産屋敷輝利哉は隊員をその場から離れ、待機の命令を鴉を通じて出す。

だが時既に遅し。そこに無惨が現れ、隊員を全て喰ってしまった。

無惨の姿は腕から手の甲、太腿から脛にかけて口のような物がついており、隊員の肉を喰っている最中なのか、モゴモゴと動いていた。

「鳴女、私を柱がいる所へ飛ばせ」

無惨は誰もいないのにそう呟くと、琵琶の音が鳴り響き、無惨は炭治郎たちの所に現れた。

「無惨…！」

「驚いたな…。童磨の視覚で見えていたが、まさかお前がそちらにいるとはな…。猗窩座」

無惨は童磨の視覚を共有して猗窩座のことに気づいていたらしく、

猗窩座の姿を見てそう言った。

「ふんっ、貴様から此方に向向いてくるとはな。鬼舞辻無惨！今日、ここで貴様に引導を渡してやる！」

猗窩座は短刀を構え、無惨に言った。そしてそれが合図だったのか、次々に炭治郎たちが抜刀し、刀を構えた。

「私を倒す」…。そう言われ続けて幾星霜…。誰もその目的を達成できずに私に喰われた。私は疲れた…。貴様らの相手をするのも…」

「なら今ここで貴様を倒せば全て終わる！大人しくその命を神に帰せ！」

「神」…か。それは即ち、私自身のこと。貴様たちは考えたことがあるか？地震、雷、火事、嵐と言った天変地異。そのどれか一つでも復讐をしようと。誰もそんなことを考えた者はいない。私はその天変地異の一つに過ぎない」

「天変地異…、自然災害で命を落としても、誰も復讐をしようとは考えない。私に殺されると言うことは、それと同義なんだよ」

無惨はまるで自分が神になったかのように語る。

「無惨…、貴様は、存在してはいけない生き物だ…」

そんな中、炭治郎は静かに怒りを燃やしていた。

「ほう…う…ならどうする？私は頸を斬られても、その直後に再生し、くっつくから意味は無いぞ？」

無惨は自分の親指で自分の頸を斬るジェスチャーをする。

「それは「それは勿論決まっている！」えっ？」

炭治郎が答えようとすると、違う方向から”自分の声”が聞こえた。

「無惨、お前を倒す！」きげんじゆつ鬼幻術・鬼火！」

すると炭治郎たちの後ろから白い体の鬼が炭治郎たちを飛び越え、口から”白い炎”のようなものを吐き、無惨を攻撃した。

「……誰？」

「何か、炭治郎に声が似てた気がするけど……？」

「感じる…、感じるぜ…！あの鬼の強さ、今まで会った鬼の比じゃねえ！」

炭治郎たちは突如現れた鬼に戸惑いを隠せなかった。その間も、白い鬼は先端に宝玉を取り付けた二本の棒を巧みに扱い、無惨にダメージを与えていた。

「あ…、あいつは…！」

そんな中、猗窩座は白い鬼を見た瞬間、全身を震わせていた。

「猗窩座さん？どうしたんですか？」

猗窩座の様子が変わったことに気づいた炭治郎は、猗窩座の顔を覗きながら質問をする。

……

輝鬼が無惨と戦い始めたのと同じ時、『上弦の肆・鳴女』と小芭内、蜜璃ペアの戦いは熾烈を極めていた。

二人が鳴女に近づこうものなら琵琶を鳴らし、障害物を作ったり、足下の障子を開いて踏ん張りを利かせなくしたりと、小芭内と蜜璃を近づけさせなかった。

どう攻めようか考えていると、蜜璃の肩を掴む者がいた。

「俺の名は愈史郎。鬼ではあるが、お前たちの協力者だ」

それは鬼殺隊服を着た愈史郎だった。

「今から俺が考えた作戦を伝える。まずお前たちは鳴女の注意を向けさせて欲しい。その隙に俺は自分の血鬼術を使い姿を消す。そして奴に近づき、奴の視覚を乗っ取る」

愈史郎は蜜璃たちを囲にして鳴女の視覚を奪うと言った。

蜜璃は愈史郎の作戦に乗り、小芭内にもその作戦の内容を伝え、愈史郎の作戦が決行された。

…

…

……

「鬼棒術・閃光弾！」

輝鬼は自身が持っている”音撃棒・閃光”の先端に着けている宝玉から光の弾を生成し、無惨に向けて放つ。しかし無惨はそれを避けた。

”鬼棒術・閃光剣!”

だが光の弾は囷だったのか、無惨が移動した先に輝鬼が先回りしており、宝玉の先端から”光の刃”を生成し、無惨を斬った。

「無惨に一撃を与えた!」

「……あれ? 無惨の斬られた所、再生が遅くなっているような…」

「いい所に気がついたな」

炭治郎は輝鬼が無惨に一撃を与えたことを喜び、カナヲは無惨が斬られた箇所が再生が遅くなっていることに気づくと、様子を見ていた猗窩座が説明を始めようとしていた。

「輝鬼は自分の攻撃に陽光と同じ力を無意識の内に加えているんだ。だから彼の攻撃は無惨にとっては”一番受けたくない攻撃”であり、輝鬼は無惨の”一番の天敵”なのさ」

猗窩座の説明に炭治郎たちは感心していた。

すると炭治郎たちの周辺が”揺れ始めた”。

「何ですか!?!地震!?!」

突然の揺れにしのは動揺する。

「落ち着け！この無限城は、異空間」に存在しているから地震は無い！これは、俺たちが立っている床が上に向かっていているんだ!!」

「！！」なっ、何だって〜！！！！」

猗窩座の説明にまたもや炭治郎たちは驚いた。

「愈史郎の奴、琵琶女の視覚を奪っただけでは無く、血鬼術までも操作して無惨を俺たち諸共地上へ放り出す算段か!？」

猗窩座の考えは概ね当たっていた。愈史郎は猗窩座と零余子と一緒に暮らすようになってから、二人のことを少しずつではあるが、気にしていた。

特に零余子に関しては自分と同じで、患者の世話や病人食、はたまた診療所の掃除や服の洗濯など、一緒に仕事する機会が多かったのだ。

それを分身ではあるが、無惨に攻撃されたことによつて愈史郎の怒りは上がっていた。

そのため、無惨を陽光に晒そうと考えていたのだった。

そして炭治郎たちがいる足場は無限城の天井を突き破り、炭治郎たちは地上へと放り出された。

…

…

……

『鬼舞辻無惨、地上二排出！地上二排出！夜明ケマデ一時間半！夜明ケマデ一時間半！』

炭治郎たちと一緒に地上へ出た鴉が状況報告と夜明けまでの時間を言った。

すると瓦礫の下から無惨が瓦礫を吹き飛ばして現れた。

「ほう……？夜明けまで私をここに留めるつもりか……。やれるものなら、やってみろ！」

無惨は両腕と背中から伸ばした“九本の管”を用いて瓦礫を吹き飛ばしたのだった。

「(まったく……、”この世界”の愈史郎さんは粗っぽいなあ……)皆さん、夜明けまでまだ時間はありますが、俺たちが一丸となって戦えば、勝機はあります！諦めずに頑張ってください！」

輝鬼は既に集結していた隊員たちを鼓舞し、やる気を満たせた。

「流石、輝鬼だ！一瞬にして隊員たちのやる気を奮い立たせたか！」

猗窩座は輝鬼の鼓舞を聞き、自らを奮い立たせた。

「猗窩座！久しぶりだな」

そこに輝鬼が猗窩座の存在に気づき、挨拶を交わした。

「久しぶりだな輝鬼殿。いや、鬼柱・竈門炭治郎殿と呼べば良いかな

？」

「炭治郎の名前を持つ者が二人もいるから、区別をつけるために輝鬼と呼んでくれ」

輝鬼と猗窩座は以前は敵同士だったと言うのに、今は和氣藹々と楽しく話していた。

「私を無視するとは、とんだ余裕だな!!」ヒュガツ

無惨は輝鬼と猗窩座に向けて腕の鞭と背中の管で攻撃をする。しかし、二人は無惨の方を”見ずに”鞭や管を斬ってしまった。

『蛇の呼吸 参ノ型 峙締め』

『恋の呼吸 式ノ型 懊悩巡る恋』

『水の呼吸 捌ノ型 滝壺』

そこに小芭内、蜜璃、義勇の三人が無惨に攻撃をする。が、無惨は斬られた瞬間に再生をし、まるで何事も無かったかのように見せていた。

無惨は攻撃を繰り返すと、そこに輝鬼に鼓舞された隊員たちが柱を庇った。

「行けーっ！進めーっ！柱を守る肉の壁となれ！無惨と戦える者を一人でも多く助けるんだ！」

一人の隊員が鼓舞をすると、他の隊員たちが無惨を覆うように取り囲み、柱たちを一旦遠ざける。

しかし無惨は隊員たちを悉く斬り伏せるが、次々に隊員たちが集まり、また肉の壁となる。

無惨は遠ざかった蜜璃に狙いを定め、腕を振るう。しかし、その攻撃は”鉄球によって防がれた”。

鉄球を投げたのは行冥であり、その行冥は”匣”であった。

無惨の後ろから実弥が無惨を縦一文字に斬り、”何かの液体”が入っている瓶を、数個放り投げた。

無惨は即座に再生し、実弥を攻撃するが、実弥は寸前で避け、無惨の攻撃は瓶を割るだけに終わった。

だが、無惨は瓶の中身の液体を被ってしまい、実弥は火が着いたマッチを無惨に向けて投げる。すると無惨の体が炎に包まれた。

実弥が投げた瓶の中身は”油”であった。

「テメエにはこれすらも生温いぜエ。地獄への手土産、たっぷり受け取っときなア！塵屑野郎!!」

実弥は左手の中指を立てて無惨を挑発していた。

「この世界の不死川さん、めちやくちや無惨挑発してるなあ…」

「流石の俺でも、無惨を挑発したりはしないぞ…。しかし、不死川殿は凄いな…」

「何が？」

猗窩座は実弥のことを称賛した時、輝鬼がそのことに疑問を持ち、猗窩座に質問をした。

「不死川殿は”わざと”無惨を挑発して、攻撃を自分”一人”に集中させているんだ。これ以上、仲間の死体を増やさないために」

猗窩座に言われ、輝鬼は改めて実弥に視線を向ける。確かに猗窩座の言う通り、実弥は無惨の攻撃を避けたり迎撃しながら無惨を挑発して、他の人に攻撃が行かないようにしていた。

「言われてみれば、確かに…。でも、あれじゃいつか体力が限界を迎えてしまう」

「だな。そこで…だ、今俺の手には”これ”があるのだが？」

猗窩座は輝鬼に数枚の札を見せる。輝鬼はその札を見た瞬間、猗窩座が言いたいことを察した。

「…なるほどね。乗らない訳には、行かないな」

輝鬼は猗窩座から札を一枚受け取ると、それを額に貼った。すると輝鬼の姿がみるみる内に”消えていった”。

「えっ!? き…、消えた!?!」

「正確には”見えなくなった”が正しいな」

炭治郎が輝鬼の姿が消えたことに驚いていると、猗窩座が訂正した。

「この札を着けていると、周囲の人からは見えなくなるんだ」

「見えなくなると言うことは、同じ札を着けた人が攻撃の際に巻き込まれたりしません？」

”見えなくなる”ことの欠点をしのぶは看破し、それを猗窩座に伝える。

「同じ札を着けた人同士なら、お互いの姿を見ることができる。寧ろ危ないのは札を着けた人が札を着けていない人の攻撃を喰らうことだな。けどそれは札を着けた人が攻撃を避ければ問題ない」

猗窩座はそう言つて、炭治郎たちの額に一枚ずつ札を貼った。すると、無惨を挟んで実弥と輝鬼が戦っているのが見えた。

義勇が試しに額に着けた札を外すと、輝鬼がいた所には誰もおらず、実弥一人が戦っていた。そしてもう一度札を着けると、実弥の反対側に輝鬼が戦っているのが見えた。

「なるほど。こいつは便利だな。気づかれるまでの時間がある分、無惨に攻撃を仕掛ける機会が多く取れる」

「そう言うことだ。俺は輝鬼の加勢に加わる。札の配布は任せてもいいか？」

猗窩座はどこから出したのか、大量の札を炭治郎たちに渡した。そして炭治郎たちが頷くを見ると、猗窩座は札を額に張り付け、姿を消した。

…

……

……

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ〜！」

実弥は無惨をおちよくりながら、攻撃を仕掛けたり、無惨の攻撃を避けたりしていた。

「貴様〜、一体どれだけ私をおちよくれば気が済むのだ！」

無惨は苛々しながら実弥に攻撃を集中させる。

「それは貴様が死ぬまでだよクソワカメ！風の呼吸 参ノ型
晴嵐風樹！」
せいらんふうじゆ

実弥は無惨の攻撃を悉く斬り伏せる。

だが斬り伏せた攻撃は少なかった。

「（今なら行ける！鬼棒術・閃光剣！）」

なぜなら、輝鬼が無惨の背中の管を斬っていたからだだった。

「!?（私の背中の管が斬られた？どうやら姿を消して攻撃しているよ
うだな…）」

無惨は自分を攻撃した相手は分からなかったが、どうやって攻撃をしたのかを見破った。

「誰だか知らねエが、感謝するぜエ！風の呼吸 伍ノ型 木枯し嵐！」

実弥は痣を発現させ、刃を赫くした状態で型を使う。すると斬られた無惨の腕の再生が若干ではあるが、遅くなった。

「へエ…、上弦の壱の時もそうだったが、刀が赫い状態だと再生が遅くなるみてえだな。ホラどうした糞虫、掛かって来いやア！それとも、この赫い刀が恐くて来れないかア？」

実弥は無惨を嘲笑うかのように挑発をしていた。

「……貴様は余程死にたいようだな。いいだろう、その望み、叶えてやろう！」

「!?不死川さん、危ない!!」

ヒュガッ　ボゴンッ

「んなっ!？」

輝鬼が実弥に危険を知らせた直後、実弥がいた所に突如クレーターができた。

実弥は輝鬼に間一髪の所で体当たりされて難を逃れた。しかしそのときに額に貼っていた札が剥がれ、輝鬼の姿が露になってしまった。

「一体、何が起きたんだ…」

「無惨は背中と腕だけでは無く、腿からも背中にある管と同じ物を出して攻撃したんです」

「そっか…って、手前エは誰だ!?炭治郎なのか!?声が同じだが…」

「自己紹介が遅れましたね。俺は別の世界から来た”元鬼殺隊・鬼柱”、竈門炭治郎です」

輝鬼の自己紹介に、実弥は目が点になった。

「……マジ?」

”本気”と書いてマジです。証拠はこれです」

輝鬼は顔だけ変身を解く。すると、その顔は紛れも無く”竈門炭治郎”の顔だった。

「マジかよ…、頭が全然追いつかねエ……」

実弥は混乱してしまっただのか、頭を抱えてしまった。

「不死川さん、考え込むのは後です。今はあの『糞ワカメ』を何とかしないと」

炭治郎（別）こと輝鬼は再び変身し、無惨を指差す。

「そうだなア！世界は違えど、炭治郎は炭治郎だ！炭治郎、息を合わせろ！あの糞虫に一泡吹かせてやるぞ！」

「はいー!」

実弥は輝鬼に言ったつもりが、輝鬼と同時にこの世界の炭治郎までもが返事をした。

「いや炭治郎、実弥は恐らく輝鬼に言ったのではないか…?」

義勇の眩きは炭治郎の耳には入らなかった。なぜなら炭治郎は実弥の下へ行ってしまったからだった。

…

……

……………

「行くぜエ鬼の炭治郎!」

「俺には輝鬼と言う名があります!炭治郎だと二人いるので、区別をつけるためにこれからは輝鬼と呼んでください!」

「そりゃ悪かった!そんじゃ改めて、輝鬼!遅れんなよ!!」

「ご心配無く!行くぞ!輝鬼・炎光!」

輝鬼は力強く叫ぶと、体が一回り大きくなり、手足首に炎、胸に日輪のような模様が浮かんだ。

「この世界の俺!ヒノカミ神楽は使えるか!?!」

「使えますが、長時間はできません!」

「それで十分!今から」本当の”ヒノカミ神楽を見せるから、よく見ておくんだ!!」

「はい!!」

輝鬼は腰に差ししてある刀を抜刀し、柄を強く握る。すると元々赤かった刀身が更に赫くなった。

「猗窩座、交代だ!」日の呼吸 円舞!」

輝鬼たちが話している間に無惨と戦っていた猗窩座と交代した輝鬼は、すれ違い様に無惨を斬った。

「続けて”碧羅の天”!烈日紅鏡”!灼骨炎陽”!」

”陽華突”!日暈の龍・頭舞い”!斜陽轉身”!飛輪陽炎”!」

”輝輝恩光”!火車”!幻日虹”!」

輝鬼は更に型を繋げていき、無惨を斬り刻む。

”炎舞”!これがヒノカミ神楽改め、”日の呼吸 拾参ノ型 円環えんかん”
だ!!」

輝鬼はヒノカミ神楽の型を全て繋げ、無惨を斬った。

「……凄い」

炭治郎は輝鬼が繰り出した型を見て呆然としていた。

「貴様、忌々しいその型を……!」

輝鬼の円環によって斬り刻まれた無惨は、腕や背中の管が無くなり、腿や脛、胴体からは血が流れており、息も絶え絶えになっていた。

「おやおや、随分と男前になったじゃねえか？」

実弥は相変わらず無惨を挑発していた。

「…………あれ？」

炭治郎は今の無惨にとある”違和感”を感じていた。

「どうした炭治郎？」

「いえ…、無惨は”鬼”なのに、何で『息切れをしているのかな？』って思いました…」

炭治郎が言ったことの意味を理解した実弥は改めて無惨を見る。無惨は斬られた箇所や腕を再生させてはいるが、確かに肩を上下させながら息をしていた。

「確かに…、肩で息していやがるなア…」

「…………どうやら、”薬”が効いてきたようだな」

炭治郎たちの疑問を聞いた猗窩座が呟いた。

「”薬”…ですか？確か零余子さんが吸収させた薬は”鬼を人間に戻す薬”だったのでは？」

「その他にも幾つか混合させていたのさ。その一つが”老化薬”なのさ。”一分で五十年”老けさせる代物さ」

炭治郎の質問に猗窩座は笑いながら答えた。

「ちよつと待ちやがれエ、無惨が薬を吸収したのは今からざつと”五時間”近くは経過しているぜエ！」

「薬の効果が出始める時間を差し引いても、最低でも”三時間”は経過しているな。だから無惨は今、”九千年”老けたことになるな。それじゃあいくら無惨でも、息切れするのは仕方ないことだ」

猗窩座は”ニヤリ”と笑うと、無惨の方を見た。

「どうだ？自分が老化する気分は？」

「……くっ」

無惨は悔しそうに炭治郎たちを見ていると

『カアアアッ！夜明ケマデ五十九分！夜明ケマデ五十九分！』

鴉が夜明けまでの時間を伝えた。

「さて、夜明けまで残り一時間を切った。それまでお前をここに留めさせてもらうぜ！覚悟しな、腐鬼った糞舞ワカメ無!!」

輝鬼が音撃棒・閃光を構えたと同時に、炭治郎、実弥、猗窩座が刀を構えた。

第25話

「炎の呼吸 伍ノ型 炎虎・二連！」

「水の呼吸 参ノ型 流流舞い！」

「日の呼吸 日暈の龍・頭舞い！」

「風の呼吸 弍ノ型 爪々そうそう・科戸風しなとかぜ！」

「鬼幻術・鬼火！」

猗窩座、炭治郎、実弥、輝鬼の四名が無惨に攻撃を仕掛ける。回復しきっていない無惨は避けつつも、その攻撃を幾つか喰らっていた。

すると、無惨の体に”無数の傷痕”が浮かび上がった。

「急に無惨の体から無数の傷痕が!?どうなってるんだ!?!」

無惨の傷痕を見た実弥は驚き、攻撃の手を止める。

「あの傷痕は”始まりの呼吸の剣士”である”継国縁壹”つぎくによりいちさんがつけた傷痕です!無惨は胃や腸などの臓器を”脳”と”心臓”に造り変えているんです!今無惨の体内には”七つの心臓”と”五つの脳”があります!」

そこに輝鬼が傷痕の正体と無惨の秘密を暴露した。

「何だど!?!んなの本物の化け物じゃねえか!?!」

「無惨は元々化け物なので問題無いです！」

輝鬼はさりげなく無惨をデイスった。

「それとすみません！しのぶさんに渡したい物があるので、一旦離脱します！」

輝鬼はそう言って、戦線を一時離脱した。

…

…

…

「しのぶさん、少々よろしいでしょうか!？」

「ひゃい!？」

輝鬼に突然声を掛けられたしのぶは驚いて変な声を出してしまっ
た。

「すみません、これを渡したくて…」

輝鬼は何処から出したのか、手に透明な液体が入った瓶を持ってい
た。

「これを痣が出た人に投与してください。寿命を”ある程度”延ばす
効果があります。でも、一回投与してしまうとそれ以降投与しても効
果はありませんので」

輝鬼は瓶をしのぶに渡して再び無惨の所へ向かった。

…

…

…

「お待ちせしました！」

実弥たちの下に輝鬼が戻ってきた。

「輝鬼殿、先程胡蝶殿に何かを渡していたようだが…？」

「あれは一回限定の”寿命を延ばす薬”だ。痣が出た人に投与すれば、ある程度ではあるが寿命を延ばすことができるんだ」

猗窩座の質問に輝鬼は丁寧に答えた。

「そうなのか。因みに延びる寿命は大体どれ位だ？」

「人にもよるけど、約三年くらい…かな？」

「…微妙だな」

輝鬼の解答に、猗窩座は少しだけ呆れていた。

「仕方ないよ。何だかよく分からない成分や材料を使っているんだから。珠世さんでも、これが精一杯だったんだから」

「ウェイ!?あの薬、珠世様が生成された物だったのか!？」

輝鬼が渡した葉は珠世が生成した物だと知った猗窩座は驚いて一部言葉がオンドウル語になってしまった。

「…そんなに驚くことか？」

「「驚くわ!!」」

輝鬼の疑問に猗窩座だけでは無く、炭治郎と実弥までもがツツコミを入れた。

「この私を前に談笑とは、随分と余裕だな!!」

「「あつ…、忘れてた…」」

輝鬼、猗窩座、炭治郎、実弥の四名に存在を忘れられていた無惨は怒りに震えていた。

『カアアアッ！夜明ケマデ四十分！四十分！』

その時、鴉が夜明けまでの時間を伝えた。すると無惨は輝鬼たちがいる方向とは”逆方向”に向かって走り出した。

…

…

…

「あつ！無惨が逃げる！」

「逃がすかア！待てビチクソ野郎!!」

無惨が逃げたことに気づいた炭治郎が声を発し、実弥が無惨を追いかける。

「逃がさんぞビチクソ野郎!!」

「止まれビチクソ野郎!!」

実弥の『ビチクソ野郎』が感染うつったのか、猗窩座うづに炭治郎、輝鬼までもが無惨を『ビチクソ野郎』と呼びながら追いかけた。

「ビチクソビチクソ五月蠅いわ!!」

無惨は逃げながら文句を言う。

「大人しく死ねビチクソ野郎!!」

「待ちなさいビチクソ野郎!!」

「殺してやるビチクソ野郎!!」

『死に晒せビチクソ野郎!!』

輝鬼たちが続くかのように、行冥、蜜璃、小芭内、義勇。更には生き残った隊員たちまでもが無惨を『ビチクソ野郎』と呼びながら追いかけた。

「私が…、私が一体何をしたと言うのだ〜!! (泣)」

無惨は泣きながら鬼殺隊員から逃げていた。

「見つけたぞビチクソ野郎!!」

『こっちにビチクソ野郎がいるぞ!!』

『待て〜! ビチクソ野郎!!』

無惨が逃げる先には他の鬼殺隊員がおり、その者たちも無惨のことを『ビチクソ野郎』と呼んでいた。

鬼殺隊の『口撃（誤字に非ず）』を受け続けた無惨の精神は少しずつではあるが磨り減り、無惨のストレスがマツハに溜まっていった。

そして無惨の走るスピードが徐々に遅くなり、炭治郎たちが無惨に追い付いた。

「追い付いたぞビチクソ野郎!!」

「観念しろビチクソ野郎!!」

実弥と猗窩座は未だに無惨を『ビチクソ野郎』と罵る。

「……あれ?」

そんな中、炭治郎は無惨が言い返してこないことに疑問を感じ、無惨の顔を覗いて見ると、しわくちやの皺だらけの顔に、頭髮が殆んど抜け落ち、頭頂部に一本残っているだけの状態だった。

「ヒエッ」

無惨の顔を見た炭治郎は、思わず悲鳴を上げた。炭治郎の悲鳴を聞いた実弥たちが炭治郎の側まで寄って無惨の顔を覗き見る。

「ダツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ!!何つー顔してんだよ無惨!」

実弥は大声で笑い出し

「プツ　クククツ　いい顔になったじゃないか無惨：　クククツ」

猗窩座は笑いを堪え

「……………」

輝鬼は言葉を失って放心していた。

『カアアア!夜明ケマデ二十五分!夜明ケマデ二十五分!早くビチクソ野郎ヲ倒スノダ!』

鴉が夜明けまでの時間を伝えながら無惨の精神を更に摩耗させる。

「ハッ!　止めは俺がやります!」

輝鬼は我を取り戻し、腹に着けていた『音撃鼓・輝光』を無惨に取り付ける。すると音撃鼓・輝光が大きくなり、和太鼓程の大きさになった。

「音撃強打・爆炎陽光ノ型!オラア!」

ドンツ

輝鬼は音撃鼓・輝光を両手に持った音撃棒・閃光で叩く。

「オラ、オラ、オラオラオラオラオラオラオラオラ……」

ドンツ、ドンツ、ドドドドドドドドドドドドドドドド……。

輝鬼は何度も、何度も、力強く太鼓を叩く。

「オウラア!!」

ドンツ!!

そして最後に、最大の一撃を叩き込むと、無惨は爆散し、それと同時
に夜明けが訪れ、無惨の肉片は陽光に晒され、塵となった。

…

……

……

「勝つ…た……」

「ああ、勝ったんだ。そして、終わったんだ。悲しみの連鎖が」

『うおおおおおおお〜〜!!!』

最初は呆然としていた隊員たちだが、戦いに勝ったことを自覚した途端、盛大な勝ち鬨どきが上がった。

「義勇さん、勝ちました！勝ちましたよ!!」

「わ、分かった！分かったから落ち着けしのぶ！」

しのぶは嬉しさの余り義勇に抱きつき、義勇はしのぶを落ち着かせようとする。

「伊黒さん、やりましたね！」

「ああ、そうだな甘露寺」

蜜璃は小芭内に寄り添い、小芭内は蜜璃に向かって微笑んでいた。

「やったな猗窩座！…あれ？猗窩座？」

輝鬼は猗窩座と一緒に喜ぼうとしていたが、そこに猗窩座はいなかった。

…

…

…

炭治郎たちから離れた日が当たらない場所では、愈史郎が陽光に当たらないようにしながら座っていた。

「終わったな…。終わりましたよ珠世様…」

愈史郎は感傷に浸っていた。

「確かに大きな戦いは終わった。だが、俺たちの戦いは今、これから始まったんだ」

そこに猗窩座が現れた。

「猗窩座か。あいつらの所に行かなくていいのか？」

愈史郎は猗窩座に質問をする。

「俺はまだ太陽を克服した訳では無いからな。行きたくても行けないのさ」

猗窩座は肩をすくめながら言った。

「……そうか。…猗窩座、お前、人間に戻るつもりはあるか？」

「何だ？藪から棒に」

「いいから答えろ」

愈史郎は猗窩座に質問の答えを急かす。

「……そうだな。俺は杏寿郎、そして輝鬼に”命の尊さ”を学んだ。だから俺は人間に”戻る”。そして一人でも多くの命を救ってみせる」

猗窩座は自分の”決意”を愈史郎に話した。

「……そうか。できるといいな」

「”できる”、”できない”じゃ無い。”やる”か”やらない”かだ」

猗窩座は愈史郎に向かって笑い、愈史郎もまた笑みを浮かべた。

…

.....

.....

最終決戦から三日後、産屋敷の別邸の中庭に人影が集まっていた。

『風柱・不死川実弥』

『水柱・富岡義勇』

『蟲柱・胡蝶しのぶ』

『岩柱・悲鳴嶼行冥』

『蛇柱・伊黒小芭内』

『恋柱・甘露寺蜜璃』

『炎柱・煉獄杏寿郎』

『霞柱・時透無一郎』

『元音柱・宇随天元』

『竈門炭治郎』

『我妻善逸』

『嘴平伊之助』

『栗花落カナヲ』

『不死川玄弥』

そして『元鬼殺隊・鬼柱 竈門炭治郎こと音撃の戦士・輝鬼』の総勢十五名がいた。

「「お館様のお成りです」「」

そこに耀哉の娘のにちか、くいな、ひなた、かなたの四名が耀哉が来たことを告げる。

「おはよう皆。今日もいい天気だね」

屋敷の奥から現れた耀哉は無惨の呪いが解けたお陰で視力が戻り、中庭から見える空を仰ぐ。その横には妻のあまねと息子の輝利哉が寄り添っており、座敷の日陰には珠世、愈史郎、猗窩座、零余子が座っていた。

「今日の空は雲一つ無い快晴、まるで私たちの心を表してしるみたいだね」

空を見た耀哉はまるで詩人のように語った。

「お館様におかれましても御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます」

今回の耀哉への挨拶は輝鬼がした。

「ありがとう。君は確か別の世界の炭治郎だったね」

「はい、”元鬼殺隊・鬼柱”竈門炭治郎です。この場には俺が二人おりますので、区別をつけるために輝鬼とお呼びください」

「分かったよ。輝鬼、私たちのために別の世界から来てくれてありがとう」

「勿体無いお言葉です」

「さて皆、鬼舞辻無惨の討伐、お疲れ様。これで我々産屋敷一族の悲願を達成することができた。一族を代表してお礼を言うよ。本当にありがとう」

耀哉を含めた産屋敷一家は全員に向けて頭を下げる。

「あっ…、頭をお上げくださいお館様！」

「そうです。我々が鬼殺隊として戦えたのはお館様方産屋敷一族のお力添えのお陰です」

頭を下げた耀哉たちに実弥は驚き、義勇は礼を言う。

「…ありがとう。今日で鬼殺隊は解散とする。皆、今まで本当にありがとう」

耀哉は改めてお礼を言った。

「それと義勇、君から皆に報告があるんだってね？」

「御意。私富岡義勇は、胡蝶しのぶと結婚しましたことをお伝え致します」

耀哉に促された義勇は、しのぶと結婚したことを報告した。

「そうなのか！そりゃ派手にめでたいな！」

天元は義勇としてのぶが結婚したことを喜んだ。

「宇随さんありがとうございます。それと、私のお腹には新しい命…、私と義勇さんの”子供”がもう宿っています」

『ええええええくくくっつ!!!?』

しのぶの爆弾発言に皆が驚いた。

「しのぶちゃん、いつから子供ができたの!？」

「柱稽古が始まる前ですね。このことを知っていたのは私と義勇さん、担当医である珠世さんと、助手の愈史郎さんに猗窩座さんに零余子さん、それからカナヲですね」

「ええっ!?!カナヲ、しのぶさんが妊娠していたのを知っていたのか!?!」

「うん。柱稽古が始まる時に、師範が教えてくれたの」

カナヲの解答に炭治郎は呆気にとられてしまった。

その後義勇は男性陣にもみくちやにされながらも祝福され、しのぶも女性陣に囲まれながら祝福されていた。

そして夜になり、産屋敷邸で勝利の晩餐会が開かれた。

ある者は騒ぎ

ある者は豪勢な食べ物に舌鼓を打ち

ある者は酒に酔い

皆思い思いの一時を楽しんでいた。しかし、その中に輝鬼は「いなかった」。

…

……

……

産屋敷邸の一室でどんちゃん騒ぎをしている最中、輝鬼こと別の世界の炭治郎は一人、夜空に浮かぶ月を見ていた。

「この世界の戦いは終わった。部外者である俺は静かに去るさ」

炭治郎は暗闇に身を隠そうとしていた。

「待ってくれ」

しかし、炭治郎を呼び止める者がいた。

「……猗窩座か」

炭治郎を呼び止めたのは猗窩座だった。

「輝鬼…、いや、炭治郎。お前、一体何処に行こうとしていたんだ？」

「俺はこの世界では完全な部外者だ。目的を終わらせれば、”世界”から弾き出される。それだけさ」

「…炭治郎、俺はお前に礼を言いたい。あの時、俺を救ってくれてありがとう。お前が救ってくれたから俺はこの世界で再び生を受け、生きることができた。本当に、ありがとう」

猗窩座は炭治郎に頭を下げた。

「俺は何もしてはいないさ。けど、再び貰ったその命、無駄にしないようにな」

「もちろんだ」

炭治郎は猗窩座に拳を突き付け、猗窩座はその拳に自分の拳を重ねた。

「炭治郎、待たせた。迎えに来たぞ」

そこに現れたのは、『外史管理局否定派』の左慈だった。

「そんなに待つてはないさ。時間ぴったりだな」

「賛辞はいい。これよりお前を”元の世界”に送る。用意はいいか？」

「いつでも」

左慈の質問に炭治郎は頷き、左慈は炭治郎の側まで寄って印を結ぶ。すると炭治郎と左慈の二人を中心に光が登った。

「じゃあな猗窩座。幸せになれよ」

炭治郎はそう言った途端、光が強くなり辺りを白く塗り潰す。猗窩座はその光の眩しさから目を守るために腕で視界を被う。そして光が止み、猗窩座は腕を退けると、そこに炭治郎たちはいなかった。

「お兄様」

「…零余子か」

猗窩座の後ろに零余子がいた。

「……彼は？」

「この世界の役目を終えて、自分の世界へ帰ったよ」

猗窩座は夜空を見上げ、零余子も猗窩座に連れられて一緒に夜空を見上げる。

「…彼は一体、何者なんでしょう？」

零余子は猗窩座に質問をする。

「彼は俺を救ってくれた”恩人”であり、世界を守る”鬼”…かもな」

猗窩座は夜空を見上げたまま、零余子の質問に答えた。

猗窩座たちの頭上には、満月と無数の星が光っており、満月の側を一筋の流れ星が走った。